

42
309

Vertical text or markings on the left page, possibly bleed-through or a stamp.

John Brown

11/10/1859

42-309

武士道
之精華

山

櫻

明治
43. 7. 28
圖書

如人

道
位
道
如
人

序

我日本民族の中心たる天照大神は、畏くも三種の神器を以て、萬世一系の皇室を組立てられ、之を後世に御傳へになつた。此劍といふものは、即ち武の起る本であるが、然し單純に解釋すれば、劍は武を表するだけで、勇を好むの弊に陥る譯であるから、他に鏡璽をも添へられ、此三つの寶を傳國の璽として御傳へになつた。是れは申す迄もなく、鏡は聰明を表はし、璽は徳を表はしたもので、これを以て日本民族の精神を組立てられたのである。そこで日本國民の勇といふものは、義勇でなければならぬ。唯徒らに武を好むのみでなく、勇を好むのみでなく、所謂正を衛り邪を挫き、外國の侮りを禦ぎ、國家を安んずる爲

に、劍を掲げる。ツマリ義よりして勇が現はれ、勇によつて武が立つ。此義勇といふものこそ、日本國民の精華である。處が王道衰へて、覇者が現れた處より、初めてこゝに武士といふ名が現はれ、一身の修養として、心膽を練る上から、自然に武士道の研究が起つて、段々發達したのである。勿論今日の如く、組織的に論理的に、研究された譯でなく、知らず識らずの間に組立てられたのであるが、去らば此武士道は、どんな都合に根據を据えて來たかといふに、或は神道に結び付き、或は儒教に結び付き、或は佛教に結び付くとかして、皆宗教的に發達した。死生の巷に立つて、朝夕を測られぬといふ時に當つて、自分の生命を棄てるといふ事が、一番武士の尊ぶ處であるが、是れは皆

宗教的觀念から起つて來たと思ふ。鎌倉より室町を経て、應仁の大亂以來、日本全國は、全く暗黒世界となつたのであるが、此暗黒世界の時代に、武士の階級が、非常に發達して、殆ど全國皆武士といふ有様となり、而して其極が元龜天正の時代で、織田信長とか、豊臣秀吉とか、徳川家康とかいふ、撥亂反世の英雄が出て、其部下に、又多數の智者も勇者も出てた。是れが即ち明治年代、封建の廢滅に至るまでの間に、武士道の中心となつたものである。其故に、まづ概して此武士道といふものは、餘り學問を尊はなかつた。徳川幕府は、文學を奨め、學問を勵ますことに、餘程盡力したけれども、三河武士に於ても、又各藩の武士に於ても、本などを讀むことは、夫程尊敬しなかつた、

劍を提げ馬に跨つて、死生の巷に出入し、少しも懼れぬといふ方が尊まれて、書物を講釋することは、割合に尊はれなかつた。偶々尊はれた事があつても、ホンの一局部であつて、多數の人は、それ程に思はなかつた。學問を尊敬せぬといふ事は、餘り善い事てなかつたかも知れぬが、然し其間に、至極淳朴な、天真爛漫なる人性の自然が現はれてゐた。此勇を尊ぶといふのは、所謂勇者は仁に近して、亂暴などやる事は、武士の最も卑しむ所であつた。又弱いものに向つて、腕力を加へるなどは、武士の最も恥辱とする所であつた。武士は物の情を知るといつて、最も同情を重じた。其感化力が武士以外の階級にまでも、同様の氣風を作らせ、もし人に向つて争ひをして、負ければ腹を切

る、負けることはならぬ。然しながら容易に刀を抜くものではない。抜いたなら斬れといふことが、チャンと不斷から吹込まれて居て、目に一丁字なき婦女子までも、此心懸を失はなかつた。それが暗々裏に時代の精神となつて、武士道を組立て、同時に社會全體に感化を及ぼしたのである。要するに四百餘年間の封建制に養はれた武士といふものは、随分弊害もあつたが、強健なる堅實なる純潔なる思想を以て、義を尊ひ勇を重んずるの風を助け、愚夫愚婦に至るまでも、武士道の觀念を與へた。これが一たび外に對するや、燃ゆるが如き愛國心となつて發現する我日本國民が、西洋の文明を消化して、其精粹を抜き、又對外戦争に於て、優越なる武力を發揮し、世界の耳目を驚かしたの

は、其原因何れにあるかといふに、武士道與りて力ありといはねはならぬ。

其處で、此武士道といふものは、一寸考へると、封建時代の遺物で、今日は誠に無用の長物であるやうだが、決して左様でない。武士道は、何も封建によつて成立つたものでない。日本民族の義勇なる固有性に發したもので、それが封建時代に於て、武士の階級に表はれたから、武士道と名づけられたのである。武士道といふと、語弊があるかも知れぬが、武士に代へるに、國士といふ文字を以てしてもよい、紳士といふ言葉を以てしてもよい。兎に角、我民族に於て、武勇の起りは何か。全く三種の神器より來て居る。此事實が存在してゐる以上は、我民族の上に、

武勇といふ事は、一日も廢すべきでない。而して曾て封建時代には、四十萬の武士であつたものが、今日は四千五百萬の武士になつた。土族が消滅したために、全國民が土百姓素町人に成下つた譯でなく、天子のお直ただの臣民となつたのである。『朕の親愛なる臣民』といふのは、昔の土族以上になつたのである。以上は、余輩が武士道に對する見解の一斑であるが、本書の序を請はるゝに當り、こゝに擧げて序文に代へる。

明治四十三年七月

伯爵 大隈 重 信

自序

日露平和克復後茲に五星霜而して予今や滿洲駐劄軍の一員として新に其任に服し戰跡を弔ふて感慨無限なり
噫滿洲の山河は依然として舊態を存するも陣歿將士の血肉は朽ちて殘影無く然も滿鐵延長五百餘哩の鐵道及租借地就中大連旅順の發展邦人の活動が尙豫期に達せざるを見聞し轉た懷舊の情に堪へず

於是乎予陣中私記を繙き紙間に挾まされたる一輪の櫻花を捧けて恭しく其英靈を慰めんとす雖然要するに予は一介の武士銃劍に親むも筆墨に接せず書中文辭の拙劣見るに堪へざる者あらんも之によりて日露戰役戰捷の一大素因たる軍人精神大和魂 武士道武士道

(2)

が如何に活動したるかを味ひ併て軍隊家庭の温情に通じ給は、
望外の光榮なり

明治四十二年十月二十六日

伊藤公爵滿洲ハルビンにて暗殺されたる夜
鐵嶺官舎に於て起稿す

陸軍歩兵中尉 辻 權 作

目

序

凡 例

本書稿を脱し將に印刷に着手せんとするも身遠隔の地にある
を以て躬ら校正に従ふ事能はず爲に脱字又は字句の妥當を缺
くものあらん再び版を重ねる節を待つて全部訂正すべし。讀
者諸氏之を諒せよ。

本書發刊に際し伯爵大隈重信閣下には序文陸軍中將男爵土屋
光春閣下には題字を賜り著者の光榮之に如かず。謹んで其厚
意を謝し併せて直接間接に助力せられたる諸氏の厚意を謝す。

明治四十三年七月

著 者 識

(1)

例

凡

武
士
道
之
精
華
山
さ
く
ら
目
次

第一編 幹の巻

宜戦詔勅

第一 動員

第二 侍命

第三 出征

第四 行軍

第五 駐軍

第二篇 花の巻

第一 軍人は忠節を以て本分とすべし

一 旅順攻圍軍の歩兵二等卒川端彌太郎の忠節

一
二
六
一八
二九
三八
四三
五〇
五一
五一

廢殘の子をして再び奉公の榮を
得せしめたる菊地軍醫總監閣下
渡邊善通寺島備病院長殿應前武
雄町の整骨醫副島國手の厚恩を
感謝す
著者

二 中村特務曹長の美談、勳章の爲に戦は致しませぬ……………六七

第二 軍人は禮儀を正しくすべし……………七〇

一 瀕死の境にある上等兵島村猪源太の舉手注目……………七〇

二 補充隊戦傷兵士の道避け……………八三

第三 軍人は武勇を尙ぶべし……………八七

一 今武藏宮本上等兵の剛勇、徒手鐵條網の抗を引抜く……………八七

二 祖谷平氏の孫平山二等卒の沈勇、外套を下して銃に枕さす……………九二

附 劍山戦争の概要及滯陣中の慰勞……………九二

第四 軍人は信義を重ずべし……………一〇四

一 重傷の従卒中田喜代七小隊長を觀音脊にす……………一〇四

二 勇士の情死、銃を抱ひて汜濫に溺る……………一〇九

附 小孤山戦闘最後の概況……………一〇九

第五 軍人は質素を旨とすべし……………一二三

一 一日五厘宛を兩親に捧げて歸休となり一等卒中山勝太郎の勤儉……………一二三

二 食はず眠らず而して壯快を感ずるは質素の極……………一二四

戊 申 詔書……………一二九

第三編 果實の巻……………一三一

陸海軍人に賜りし詔勅……………一三七

平和克復詔勅……………一三九

長團師一十第
將中屋土

官令司總軍洲滿
將大山大

官令司軍三第
將大木乃



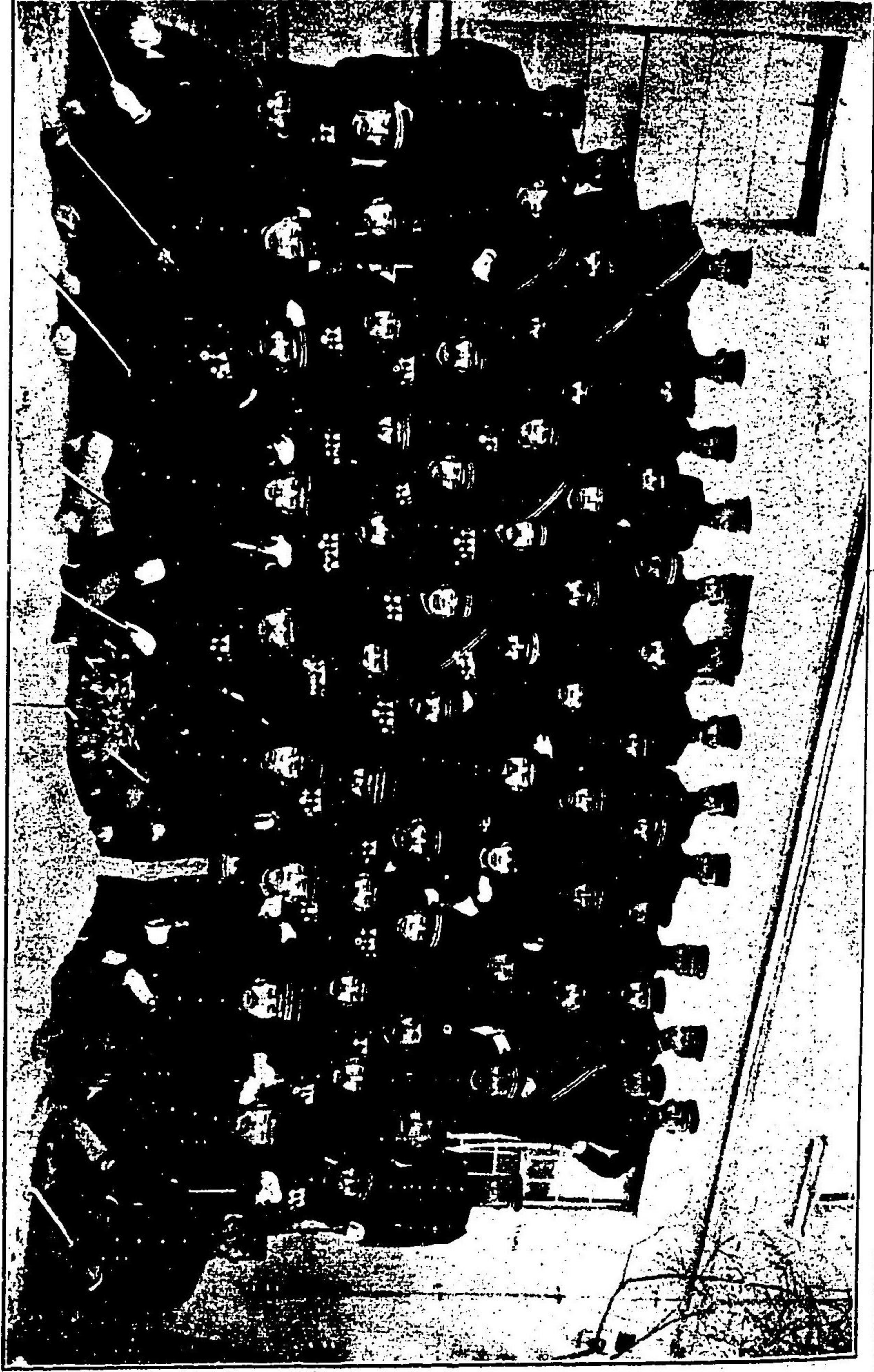
長團旅二十第兵步
將少尾神

長隊聯三十四兵步
佐大山西

圖 校 將 隊 聯 三 十 四 第 兵 步 征 出

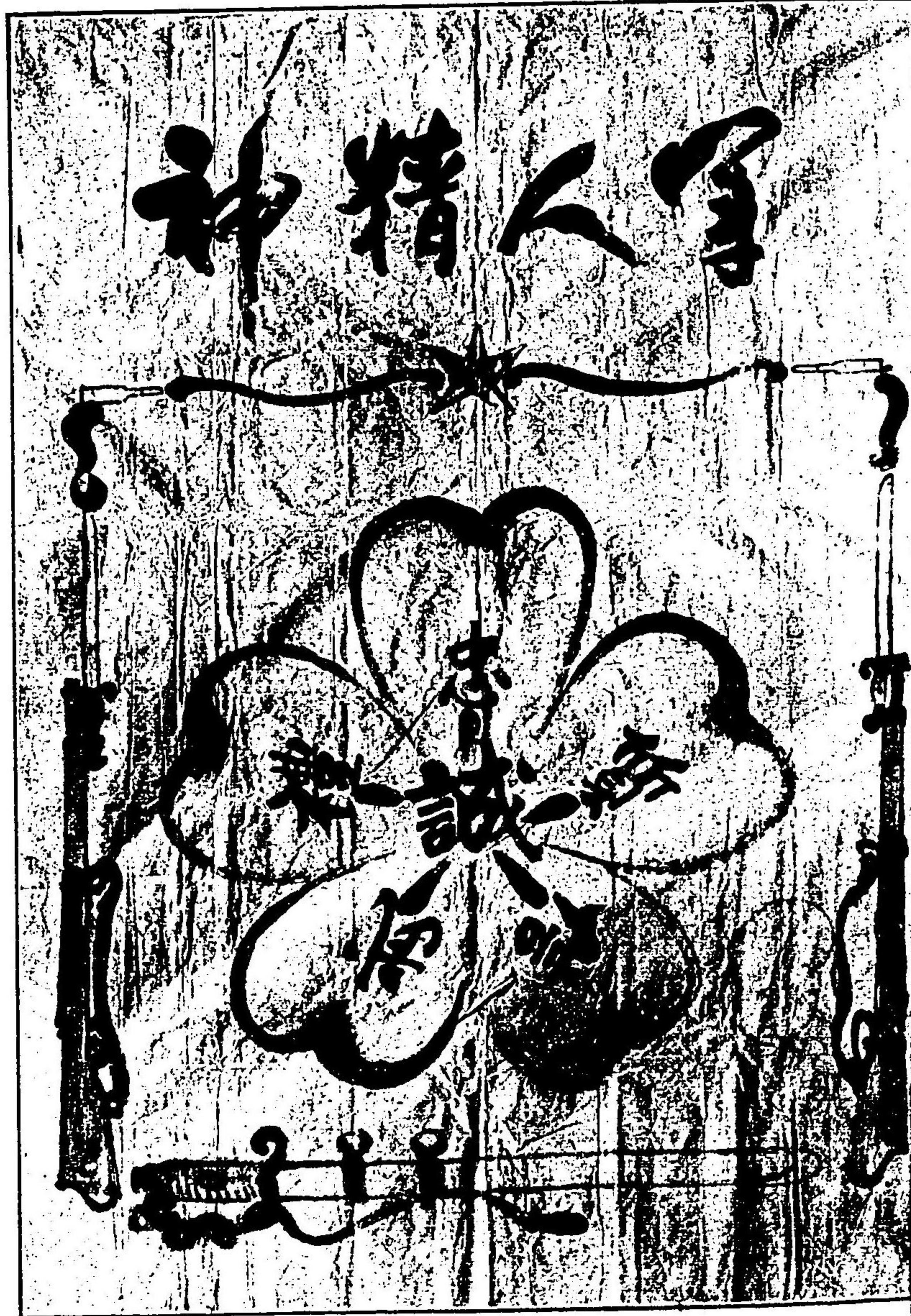
○市村少尉 ○松川中尉 ○新井中尉
 ×松井少尉 ×濱田大尉
 ×市村少尉 ×津生少尉
 ○幸田中尉 ○幸田中尉 ○竹村大尉
 ×榎本中尉 ×神田二等軍醫 ×正木二等軍醫 ×岡村中尉
 ×北原少尉
 ○森中尉
 ×岡本少尉
 ○野口一等主計
 ○山崎少尉 ×大谷中尉
 ×藤田二等軍醫 ×小原三等軍醫
 ×川路少尉
 ○真田少尉 ×三谷中尉 ○野田大尉
 ×藤智少尉
 市村少尉 ×近藤中尉
 ○米留中尉
 ○岡崎少尉 ×藤雄大尉
 ×清水中尉
 ○小笠原少尉 ○高岡中尉
 ×木村少佐
 ×長尾中尉
 ○永井少尉 ×根本中尉 ×辻司大尉
 ×藤田少尉 ○中田中尉 ×渡邊少佐
 ○瀧谷少尉 ×伊丹中尉
 ○奥田大尉
 ×小原中尉
 ×松田少尉 ×尾崎少尉
 ○奥田大尉
 ×武富少佐
 ×山内少尉 ×鈴木大尉 ○村井少尉
 ○伊藤少尉 ○荒尾少尉
 ×伊藤二等軍醫
 ×越智少尉 ×後藤中尉
 ×入江中尉
 ×野上少尉
 ×野上中尉
 原 (出征者)

備考 ○印は戦死×印は負傷 官等入営時ノ位トス

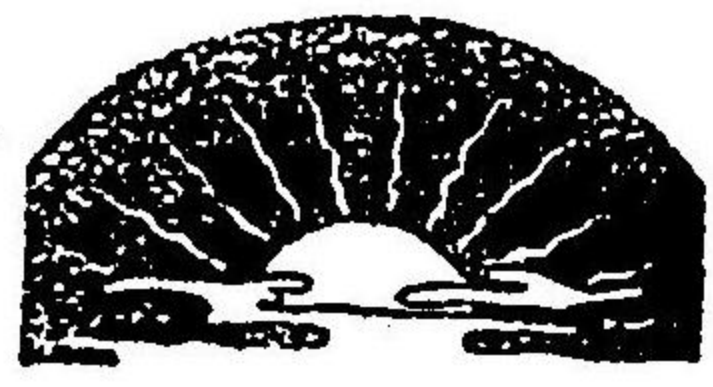


出陣遊兵頭孫三禮親袞叔團

- 輪巻 ○甲八郎兵衛 ×甲八郎兵衛 官眷八當初(遊兵頭)
- 母 薮 少 探 ○菜 原 少 探 ○笹 野 一 等 軍 醫
 × 鶴 野 少 探 × 大 井 中 探 × 神 土 中 探 × 神 土 少 探
 × 山 内 少 探 × 野 田 中 探 × 神 木 大 探 ○ 井 井 少 探
 × 野 田 少 探 × 阿 屋 中 探 × 養 實 少 探
 × 原 井 少 探 ○ 美 田 大 探 × 小 屋 中 探
 ○ 新 谷 少 探 × 母 野 中 探 ○ 中 田 中 探 新 登 少 探
 × 黒 田 少 探 × 田 本 中 探 × 森 匠 大 探
 ○ 永 井 少 探 × 高 瀬 少 探 × 阿 部 大 探 × 具 野 中 探
 ○ 小 笠 原 少 探 ○ 高 岡 中 探 × 木 村 少 探
 × 太 田 中 探 × 野 田 大 探 × 新 井 中 探
 ○ 岡 井 少 探 × 藤 崎 大 探 × 四 山 大 探 新 井 中 探
 市 村 少 探 ○ 三 原 中 探 × 五 山 大 探 ○ 米 屋 中 探
 ○ 岡 大 野 少 探 × 五 浦 中 探 ○ 堀 口 大 探
 ○ 奥 田 少 探 × 三 谷 中 探 ○ 堀 口 大 探 × 藤 野 少 探
 × 川 野 少 探 新 田 二 等 軍 醫 小 野 三 等 軍 醫
 ○ 山 崎 少 探 × 大 谷 中 探 堀 口 一 等 主 計
 × 岡 本 少 探 ○ 藤 中 探
 × 林 少 探 ○ 白 井 中 探
 × 井 原 少 探 神 田 二 等 軍 醫 五 木 二 等 軍 醫 × 岡 井 中 探
 × 野 本 中 探 ○ 寺 田 中 探 ○ 竹 村 大 探
 × 並 少 探 × 野 川 中 探 ○ 藤 井 中 探
 ○ 中 村 少 探 × 野 井 少 探 × 野 田 大 探
 × 藤 井 中 探



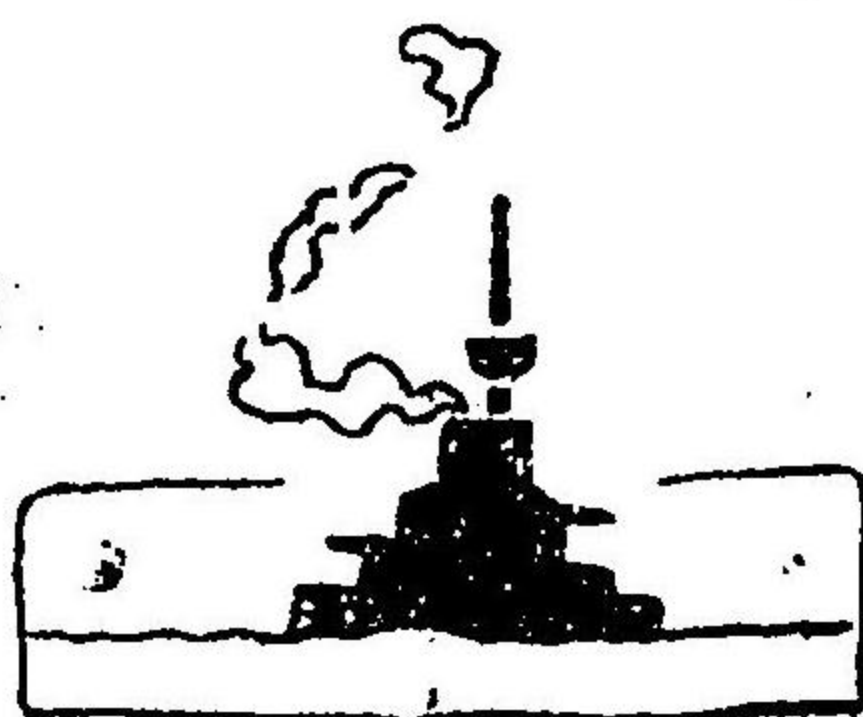
著者 眞蹟



山さくら

陸軍歩兵中尉

辻権作 著



第一編 幹の巻

滿洲に散りし櫻の昨日今日

散りてこそ花も花なる武夫の、武運拙く討果もせて、生きながらへて茲に又、花咲く春の日もがなと、祈りこそせね廻る世や、うゐのをくやまけふこそあて、あさきゆめみしえひもせず、不忠不信と譏られな、人道の雨平和の露、笑顔涼しき浮世なるに、劍も捨てず筆の楯、心を籠めて培養ひし、この幹の巻を見よ。

* * * * *

詔勅

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ露國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海軍ハ宜ク全力ヲ極メテ露國ト交戰ノ事ニ從フベク朕ガ百僚有司ハ宜ク各々其職務ニ率ヒ其權能ニ應ジテ國家ノ目的ヲ達スルニ努力スベシ凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ盡シ遺算ナカラシムコトヲ期セヨ

惟フニ文明ヲ平和ニ求メ列國ト友誼ヲ篤クシテ以テ東洋ノ治安ヲ永遠ニ維持シ各國ノ權利利益ヲ損傷セスシテ永ク帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スベキ事態ヲ確立スルハ朕夙ニ以テ國交ノ要義トナシ且暮敢テ違ハザラシムコトヲ期ス朕カ有司モ亦能ク朕カ意ヲ體シテ事ニ從ヒ列

國トノ關係年々逐フテ益々親厚ニ趣クテ見ル今不幸ニシテ露國ト齟齬ヲ開クニ至ル豈朕カ志ナラムヤ

帝國ノ重キヲ韓國ノ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ス是レ兩國累世ノ關係ニ因ルノミナラス韓國ノ存亡ハ實ニ帝國安危ノ繫ル所ナレバナリ然ルニ露國ハ其ノ清國トノ明約及列國ニ對スル累次ノ宣言ニ拘ハラズ依然滿洲ニ占據シ益々其ノ地歩ヲ鞏固ニシテ終ニ之ヲ併吞セムトス若シ滿洲ニシテ露國ノ領有ニ歸セン乎韓國ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和亦素ヨリ望ムベカラズ故ニ朕ハ此ノ機ニ際シ切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ以テ平和ヲ恒久ニ維持センコトヲ期シ有司ヲシテ露國ニ提議シ半歲ノ久シキニ亘リテ屢次折衝ヲ重ネシメタルモ露國ハ一モ交讓ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘズ曠日彌久徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ陽ニ平和ヲ唱道シ陰ニ海陸ノ軍備ヲ増大シ以テ我ヲ屈從

キヤメントス凡ソ露國ガ始ヨリ平和ヲ好愛スルノ誠意ホカモノ毫モ
 認ムルニ由ナシ露國ハ既ニ帝國ノ提議ヲ容レズ韓國ノ安全ハ方ニ危
 急ニ瀕シ帝國ノ國利ハ將ニ侵迫セマレントス事茲ニ至ル帝國ガ平和
 イ交渉ニ依リ求メムトシタル將來ノ保障ハ今日之ヲ旗鼓ノ間ニ求ム
 ルノ外ナシ朕ハ汝有衆ノ忠實勇武ナルニ倚頼シ速ニ平和ヲ永遠ニ克
 復シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名 御璽

明治三十七年二月十日

- | | |
|-----------------|----------|
| 内閣總理大臣兼
内務大臣 | 伯爵 桂 太郎 |
| 海軍大臣 | 男爵 山本權兵衛 |
| 農商務大臣 | 男爵 清浦奎吾 |
| 大藏大臣 | 男爵 曾根荒助 |
| 外務大臣 | 男爵 小村壽太郎 |

- | | |
|------|-------|
| 陸軍大臣 | 寺内正毅 |
| 司法大臣 | 波多野敬直 |
| 遞信大臣 | 大浦兼武 |
| 文部大臣 | 久保田讓 |



第一 動員

「諸君」

と、聯隊長西山大佐(保之)の一聲、禁し難くやありけん微笑を漏らすも左こそ、

「待ちに待ちたる動員令は下りました」

語調嚴然眞に鶴の一聲である、満場の將校は肅然容姿を正した、

「大元帥陛下の御爲め、國のため、初陣の軍旗に千古の光輝を放たしむへきは近き將來にあることを確信します、茲に本職は満腔の喜びを以て動員令を迎へ、併せて之を諸君に傳達するの光榮を有す云々」

是より戦時命課に各自捺印す、時維れ明治三十七年四月十九日、

「ヤア！あめてたう」

と甲士官は、いとも快活な調聲で、

「あめてたう、あましたネ」

と乙士官の謙遜せる態度で、而も喜色は満面に溢ふれて居る。

横合より丙士官は

「あめてたう、僕は第八だ、貴公は？」

甲士官

「今の中隊だ」

此處も彼處も快談笑話、微醉機嫌のち正月にも彌増す將校集會所の光景、笑を含める其顔には活氣を帯ひて總ての所作に一層の生氣を添へて居る。

ア、動員、この動員なる響が、軍隊に對し如何なる印象を與ふるかは兎ても局外者の想像し能はざる程で、回顧するだに愉快でたまらなくなる。

丙士官

「どうだい、野戦隊は若者が揃つて居るぢやないか」

乙士官

「氣の毒ですネ。補充隊や後備隊へ残されましたものは？」

「ア、病氣どんせんごとしとらんば」

甲乙丙

「ハッ、ハ、ハ、ハ、」

若盛の花武者はに互、野戦隊に編入されたのを無上の光榮として喜んで居る。補充隊の教育が如何に重大且つ緊切で、又後備隊の老練兵が如何に活動するかを夢にも知らずに、野戦隊のみで戦争の終局を結ぶ考へて、魂は早や海山幾千里遶満の山野に活劇を夢みつゝあるも可笑。

抑も我中隊の將校は誰れ？

步兵中尉 根本喜三郎

中隊長 步兵中尉 岡村朝次郎 小隊長 步兵少尉 小笠原 於菟彦

同 辻 權 作

是より中隊長以下打揃ひ中隊へ歸つて特務曹長以下へ動員下令の傳達、戦時職務の命課を行ひ、夫々分課せられたる業務に従事するものである。即ち應召員の受領、馬匹の徴發、兵器、彈藥、糧食、被服の支給、分配、補充等百般の業務は一時に多端となり今まで沈靜なりし聯隊

内邊かに活動を始め、將校下士の東奔西走、さては當番傳令使の自然に駆走する様、見るからにいと心地よく、全く營内の面目は一變し、活氣滿々志氣大に勃興して來た。さて動員とは凡て軍隊か平時の態勢より戦時の状態に移る事にして、在郷の軍人は赤禱の状袋を受取つて飛んで來る、之か充員召集で動員中の一である。サア、斯なると親もなければ勿論妻子を顧みるものもなく、唯君の御爲め、國のため、「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉シ」と云ふのが胸中を滿したのである。之れ即ち日本人の日本人たる所にて、戦勝の原因となる第一歩ではあるまいか。

父「オイ林太、鍬を投棄つて何處へ行く？」

林太「お父さん？ 愈々運か向いて來た。」

と、萬歳唱ふ壯者の有様は殆んど狂的である。

父「ナンチャイ、押載いては東方を拜み、此方に向ひてはニコニコ笑つて居る。」

と、拳固めて腰打延はすさま、親父には馬耳東風なり。

林太「お父さん！お父さん、耳が遠ひなあ、アア、コレ、コレ」と手真似で、事を辨する有様は、親父が餘程耳が聾と見へる、鐵砲撃つ手真似に氣が付いたものか、

父「オー、オー、戦争が来たか、ウン、ウン、早う行け。早う行け。お石よ、お前は一寸新店へ駈出して、ソ、ソ、ソ、五合計り、イ、急げ！お石、林太が行くんじや戦争に、ウン！戦争に行くんじや林太が！！」

心は矢竹、口吃る老乍ら親父の熱血、國を思ふの真心に、嫁女に酒の用意は流石に日本の親御かな、

阿波は〇〇郡〇〇村林太が住家なる、いともしぶせき茅屋の前、群り集まる諸人は、此度村一番の孝行者林太が芽出度出征を送らんとして居るのである、

「コレはコレは皆さんまことにだうも」

と感謝の辭は、口にくそ出さね、彼が赤き心の焔は、顔にも夫と知られけり、

「お父さん！お母さん！行きます！！お石、氣を付けよ、お母さん弱うから」と、子は親を、母は又子に未練を残させじと、

「御上の爲ぢや、案んぜずに」

互に慰め訓しめつゝ、國を思ふの誠心は我國特有の美質也。

「さらばお父さん、お母さん、何れも諸君！左様なら！勇む壯者の行末を幸多かれと、誰れ祈らぬものやある、

一同〇〇君萬歳々々。

* * * * *

斯くて應召員は何れも後るゝを耻として、犇々管門へ遁入て来る、而して應召員受領委員は一々身體検査の上、合格者は之を各中隊へ分配する、各中隊よりは大概特務曹長又は曹長が受領者として出て居る、元來應召員は現役中の中隊へ編入せらるゝのか常である。

特務曹長

「大變早かつたネ！」

〇「ハイ、親父か早う行けと言ひましたから、直ぐ来ました、」

△「ハイ私は徳島へ行って居りましたから、動員か下つたと聞きましたから宅へは歸らず、直ぐやつて来ました、夫れて召集令狀は持ちまへん」

特務曹長

「持ちまへんと言ふものがあるかッ」

△「誤り、持ちません」

と、せのアクセントに力あり。

特務曹長

「よろしむ、相變らず元氣だノ」

何れ現役中の知己でもあるが、一言一句修正する、一點の曇り隔てなき上下の親情、かくてこそ、まことの親しみは起るなれ。

○「特務曹長殿、私は瘠せて居るからと言ふて不合格です、残念で残念でたまりません、國を出る時、大勢の人々に送られて、御土産には、ロスケの生首盞漬にしてと、勇んで來ましたのに、エ、不合格とは残念です、特務曹長殿、御願です、合格になる様願うて下さい、御願です」

と見るも哀れな特務曹長、之れでは合格しないも無理はない、併し姿に似合ぬ元氣、其切なる願ひ。何れ劣らぬ日本の武士。

特務曹長も心嬉し氣に

「ウム尙一度願つて見るから待て、併し今度不合格しても落膽するな、又其内には召集があるぞ」

彼の心を宥むる優しさ、忙しさ、遂て特務曹長は重き唇を開き兼ね、

「矢張り駄目だ、残念だが仕方がない、マアゆつくり養生しろ、」

是等應召員は、土地の遠近、交通の便否により行程數日に亘つて來るのである、

此間動員業務の各擔任官は、營内詰切の姿で各自分擔業務の整理に従事して居るのである、だから現役中の兵卒は是等の使役として働くので、動員完結までは、殆んど練兵するの邊はない位悦しむ。

さて愈々充員すると、中隊の戰時編成だ、其當時中隊の編成は兵卒身幹の順序に整列し之を三個の小隊に分つ云々とありしも、之は實戰的でない、即ち身幹の順序と言ふ事は、極論すれば裝飾的である形式的である、戰時補充を受くる度毎、一々中隊の編成を仕直されては堪

へ得る者でない、のみならず其生死を共にすべき小隊長に取りては極めて不公平である、然るに近時或論者は中隊内小隊長割據の弊害を唱導す、勿論割據は不可なり、然れども偶生の弊害をのみ見て常生の効益を没却してはならぬ、即ち小隊長は何處までも小隊長と生死を共に樂むべきである、而して中隊はこの團結の強き三つの固結を合せて一丸とすべきである、平時はいざ知らず、戦時人員の増大と、豫備、補充兵の編入とは共に團結の單位を小隊とした方は良くはあるまいが、乞ふ杞憂するを止めよ。今や將校には公道の理非に陥み迷ひ或は大綱の順逆を誤るものあらじ、併しながら先輩として癡さに敢て小隊長割據の弊害を唱へしむるは、互に小隊長諸君の能事とする所ではあるまい、研究に研究を重ね、修養に修養を積んで、誠實壯快に戦死しようてはありませんか、それは兎もあれ、今や歩兵操典改正せられて、中隊長を核心として士氣の結合を必要とする今日中隊長の責任亦重い哉、そこで平戰兩時を問はず、小隊長たるものは宜しく其本分を守り中隊長を輔佐し、中隊をして舉止恰も一體の如く又和氣藹々たる圓滿の家庭を作成することに努力し、斷して放任専横等割據に陥らざるを要するなり。

そこで我中隊に於ては、中隊長の意圖に従ひて、各小隊長は各其氣に入りの人を自分の部下

とすることにした、素より一人として嫌な人が中隊にあらう筈は無く、又予等三人の小隊長は骨肉の兄弟も只らざる間柄であつたので不平などの筈もあらう筈はなかつた。

予は或程度までは無論平素の考科に就き撰擇したが、「待て矣待て暫し、こゝなんめり、こゝなんめり、下士兵卒は生物だ、器械的無性の物ではない、ドーセ活物だ、活かして使ふは此時だ士は己を知るもの、爲めに死すとかや、ア、愉快！」誰しも君の御爲、國のため死を希ふは言はずもがな、己を知るものと互に胸を語り合ひ、手に手を取つて進む心持は又格別、乍失禮敵弾の下を潜つた事のない御方には想像も及ばざる程、何んとも言ふに言はれぬ味があるもので、親子一世夫婦二世主従三世の世の譬、生死の巷に契を結んだ上官と部下の親しみは、成程コ、かと首肯しめるのである、況してや我 大元帥陛下には勿體なくも畏くも、「朕ハ汝等軍人ヲ股肱ト頼ミ汝等ハ朕ヲ頭首ト仰ギテソ其親ハ特ニ深カルベキ」と仰せ給ふに至りては、感涙潜々又何をか言はん、

嗚呼生を皇國に享くるもの、職に貴賤はなけれども、死甲斐あるは敵に當るの職ぞかし、小供が兵隊ゴッコを好む先天的性質まことに故あるかな。

さてされば、予は中隊の變物を集めた、即ち偵動兵、刑法に觸れたため其缺勤の日數を償ふ

もの、新平民、四民平等に思召す。聖旨に對し奉り畏多き言葉なれど未だ此頃までは内々區別卑下する風があつた。或はボンヤリと云ふ部類のものを集めた。

斯くして中隊の編成が出来上がった。部下は生死を共にすべき上官を得、上官は各々氣に入りの部下を掌握したものであるから、上下の親密は恰も春の日のやう、温かい血が通ふて、唯モ一今日か明日かと出征の途に上る事のみ喜び勇んで待ち焦るゝのであつた。

兵書に所謂「部下は上官のため、上官は部下のため、互に相濟して以て全軍の名譽を發揚すべし」と云ふ事實は何時何處に於て實現せらるゝであらうか。

日直下士

「武裝検査に整列ッ」

最う何日何時出發命令が下つても差支ない、即ち出師の準備全く整頓した曉、聯隊長の武裝検査が行はるゝのである。

充員したる聯隊は練兵場の中央に縦隊横隊の一線に整列した、さしもに廣き岳東の練兵場も、今日計りは重大なる希望と任務とを負へる予等に對しては、餘りに狭き心地せらるゝのである。

武裝検査が終つて分列式其後で聯隊長は一般に左の要旨の訓示を發せられた、

「茲に滞りなく動員完結して出陣準備全く整頓せり、本日の武裝検査は勿論、分列式に於て一點の非難すべきを見ず、殊に活氣の充溢せる情態を認めしは聯隊長の深く満足する處である、諸子も知る如く、我軍旗は今度が初陣である、この前途有望なる軍旗の光輝を普ねく宇内に發揚するは、我々の重且大なる責務である、况んや今回畏くも、大元帥陛下は、「卿等ノ忠誠武勇ニ信頼シ其目的ヲ達シ以テ帝國ノ光榮ヲ全フセントヲ期ス」と仰せられたるに非ずや、希くば近き將來に於て軍旗の陣頭に鎮るの時、勇戰奮闘一死以て、上は聖旨に答へ奉り、下は以て國民に酬ひざるべからず、諸子夫れよく攝生努力して芳名を天下に轟かせ」

注意一、露探徘徊す秘密を嚴守せよ

二、血氣にはやり身體を病傷るな、

茲に於て動員完結し〇〇餘名の部下と生死を共にすることの出来る、其當時星の付いた赤襟の服を脱いで戦時服と著換へた時の子の喜は、譬ふることが出来なかつた。

此日將校團一同撮影した、嗚呼今にしてこの寫真に對すれば、武骨なる子の眼にも一滴の露

宿るを禁じ能はぬ、心弱しとな笑ひ給ひそ、幾多うら若き未亡人と頑是なき孤兒を残して、旅立ちせし先輩がア、此處にもア、彼處にも、まして予が同期生中の二分の一(伊東南海士、山崎繁樹、奥田徳寧、阿久津潛)は幽明處を異にしてゐる、ア、此の花の蕾はそのまゝに散つて何等種子を残して居らぬ、或は不具廢疾となり、否らざるも身に一創を負わぬもの之れなきこの寫眞を見、又部下の殆んど全部は戦死傷病したることを追想するに及んでは、同情悲愴の感に打たれざるを得ない。

殊に死んで差支なき五人兄弟の予の如きは、生きながらへ反對にタッタ一人の兒を失ひ或は家嗣を絶やされた親御の心中を察しては、予は忍び泣きに泣いたことも屢々である。されど予は婦女子に非ず過去の追憶に泣いて將來の奮闘を忘れるものではない、然り轉悲爲喜、移危置安、將さには是れ憂國丈夫の本領、瓦全の予の義務である。

第二 侍 命

動員完結して出征の命を待つ間を侍命と云ふ、此侍命間は充員したる兵員の訓練殊に精神

教育、射撃、戦闘演習、行軍と云ふ様な學術科に力を用ゆるのである。

春風駘蕩百花妍を競ひ、雲雀空に啼つる野邊に、一隊の將士、今や戦闘演習を了へて、流汗淋漓、一陣の清風に茲處暫し其勞を慰めて居る。

「誰れだッ」

と一聲予は、稜線を越へて團練の中に歩を進めた、

「休め、今唱歌をやつて居たのは誰れだ」

「桑原であります、悪くありません、」

「イヤ悪い事はない、好矣、悪い事にしても、そんなに早く名乗り出るお前の精神はよろし
の、一體どんな唱歌だ」

「實はその四季節であります」

「四季節それは春夏秋冬の歌か」

「ハイ一寸その作り替へてあります」

「四季節の作り替へ、何んでもよろしむ、一つやつて見よ、そんなに堅くならなくつてもい
よ、ア、お前名が堅太郎ぢやのラハッハ、ハ、」

「やります、併しドウも少々」

「何を愚圖付くか、ア、ソーか、腰掛けてよろしい」

春は嬉しや野外演習に前哨勤務、

響く銃音あちこちと、

文句「小哨長殿、第一復哨報告、敵の歩兵約二百名伏見村方面より第三下士哨の處に攻撃前

進中終りッ」

進めますら夫抵抗線

ちよと櫻の花盛りハアイ、ナ丁リッ

「ハッハ、丁リッが、よかつたネー、實に甘い、ソーしてその文句が要領を得とる、小哨長殿、第一復哨報告、敵の歩兵約二百名伏見村方面より第三下士哨の處に攻撃前進中かハッハ、皆も一つ覺へたが、よからう。」

「時に丁度イ、時機だ、歌とか詩、それに節がドーあるが、そんな事に八釜敷言はない、要は男らしむ、元氣のある、誰れが聞いても耻しくないものなら、許された所で大にやるがよろしむ、一家ぢやもの、互に手に手を取つて死のうと言ふ間柄ぢや、他人根性を出して

はいかん、互に相信頼して疑はず、ビク／＼せず淡泊にやれ、併し親而不怙、即ち親しむ中に禮儀ありだ、之を忘れてはならぬ、兎んや卑猥な歌や下品な詩などは決してやつちやいかん、その處をよくかみわけて軍紀風紀を妨げないものなら大にやつて差支へない、今の様なのはやつてよろしむ皆一つやつて見よ終り」

衆爲めに満面笑を含んで、詩歌の取捨に關する解決を與へられたるを喜ぶもの、如し、花下の群集眞に仲の好い同胞なる哉、

晴天の霹靂予は一聲高く「集れ」と、殿然又銃線の前に立ち、「解け銃」と令し心機一轉衆心を緊縮して曰く

「本日の新聞に依りて公報を見るに、我第一軍は五月一日九連城を攻撃して、大勝利を博し敵を急追中なり」と

扱予は茲に我第一軍第一の勝利を祝するため、謹んで軍人一般に賜はりし勅語を奉讀せん「氣を付け」

朕ハ東洋ノ平和ヲ以テ、朕カ衷心ノ欣幸トスル所ナルガ故ニ、清韓兩國ニ關スル時局ノ問題ニ付、朕カ政府ヲシテ昨年來露國ト交渉セシメタリ、然ルニ露國政府ハ東洋ノ平和ヲ顧念スルノ誠意ナキ事ヲ確認スルノ已ムヲ得ザルニ達シタリ、蓋シ清韓兩國領土ノ保全ハ我日本ノ獨立自衛ト密接ノ關係ヲ有ス、茲ニ於テカ朕カ政府ニ命シテ露國ト交渉ヲ斷チ我獨立自衛ノタメニ自由ノ行動ヲ執ラシムル事ニ決定セリ

朕ハ卿等ノ忠誠勇武ニ信賴シ、其目的ヲ達シ以テ帝國ノ光榮ヲ全クセムコトヲ期ス

明治三十七年二月十二日

「休め、さて諸子は此有難い 勅語に對し何を以て之に答へ奉るか」
新居「唯これ死力」

「然り、唯これ死力あるのみだ、義は山岳よりも重く、死を鴻毛の輕さに比してこそ眞の勝利は得らるゝものなれ、此覺悟は日本帝國軍人の特有、名譽として世界に誇るべきものである。今より否、諸子は先天的に即ち、生れぬ先きから君の御爲、國の爲め死力を盡して戦ふと云ふ精神が全身の血管の中に充ち満ちて居るのである、之れなきものは日本帝國の人間でない」

予の父上は予に訓戒て、兒の體は親が生んでも最早親のものでない、畏多くも 陛下に捧げ奉つた幸福名譽の體だ、立派な働きをして呉れと、これは予が軍人になつた初めに言はれた事であるが、昨日又面白い手紙が兄から來たからその概要を話そう。

兼て父上は信神家であるから、毎日々々神様や御寺詣りだそうだ、そして何かブツ々々唱へて拍手禮拜をされる、そのブツ々々が如何にも高い、それを隣人が聞いて、一體辻の叔父さんは何を言つて居るのかと、御堂の影に身を潜めて聞いて居た、そうすると權作が立派な働きをなす様に、病氣に罹らぬ様にと云ふ意味で一生懸命祈りて居られたそうだ、そ

こて隣人の曰く「いや實は權作さんが出征されるから、目出度凱旋でもされる様に祈つて居られるかと思ふたら、流石昔の人だ、昔の人は二本差した丈ある、違ふたもんだ、」と之を兄から父上に話すと、「馬鹿ッ神様に生きて還る様になど祈たら却て罰が當ると申されたそうだ、なぜそんなに高くとをし人にまで聞かせる様に唱へられて居つたかと言ふに、最早老今年は六十九歳で耳が非常に聾い、そこで少々の聲はちつとも聞へんものだから、御自分でも矢張その考へて聲を出されたらしむ。

諸子の御兩親にしても矢張同じだ、所が西洋人君はそうでない「親愛なる我夫よ妻は御身の一日も速に凱旋されんことを」とか或は、「ネー貴郎早く歸りて頂戴よ、ハッ、ハッ、こんな風だ、諸子の中にも妻君のある人も多かろうが、日本の婦人はそんなものぢやないよ、どうだ、「美事務めて下さい、女ながらも、一家の事は案して下さるな」とか「御國のために勳功を立て、下さい萬一の事があつても子供の事は引受けます」等、天晴凛々しる別れの言葉を聞いたろう、そこが日本人だ、舉國一致だ、そこで御互、身を捨て家を忘れて君の御爲め國のために働く事が出来る、如何にも愉快な有難い國に生れたものだ、抑も我國體の世界萬國に比し秀逸である所以を述べよ。

中山、「ハイ皇統連綿萬世一系の天皇

陛下を奉戴さ、忠君愛國を以て國民建國の基礎とし、大和魂武士道を以て軍人の精神となし、古來外國から一度も侵襲を受けた事はありません」

「よろしる本日の學術科は之で終り右向け右、駈歩進め」と勇ましく歸營せり。

*

*

*

*

*

*

*

開戦以來茲に三閱月、動員完結して早や數十日、劍の磨き様武の練り方、それは々々眞面目なものだ、而して出征の命に渴する事恰も大早に雲霓を俟つにさも似たり

此の間我聯隊長は、熱血溢るゝ如き溫情を以て吾人に告げて曰く

出戦に臨み親愛なる將校下士卒に告ぐ、

日露兩國の平和弦に破れて宣戦の 大勅を發せられ、又特に帝國軍隊に優渥なる勅語を賜はり、吾々軍人を推奨し給ふ、我師團の出陣また近きに在らんとす、實にや明治廿八年遼島半島を還附してより、我國民は切齒扼腕怨を呑み耻を忍びて、國權の屈辱を憤り、帝國軍人は遺恨十年武を練り兵を講じて他日の報復を期したりしが、今や惟れ時宜しく機

熟し積年の讐を報ゆる時とはなれり、これ誠に千載一遇の好機とも謂いつへく、吾に帝國臣民の本懐なるのみか、亦當代軍人が脾肉の嘆を慰むるに足りなむ、忝しく惟るに 神武天皇武を以て國を肇め玉ひしより以來、細戈千足の國として二千五百六十有餘年の其間、未だ曾て外國の凌侮を受けざるのみならず、屢々國威を海外に輝かし武威を異域に樹てたることも多かりつれど、其の事の係はるところ概ね清韓二國にして、其の相戦ふや常に友邦互に艦に闘きしに過ぎざりき、然るに今吾が敵たる露國は、實に世界雄邦の一にして其の富強は優に歐米列強を凌ぐに足るのみならず、其の住民たるや「スラヴ」人種にして「ピートル」の遺訓に基き世界併呑を國是とするの民族なり、故に今回の擧たるや實に帝國未曾有の快事たるのみならず、やがて世界文明史に大書して永く丹青を照らすに足るものなり、されば明治聖代の恩澤に浴し、生れて此の盛事に逢遇するもの、誰れか踴躍して義勇奉公せざるべき、況して軍人たらんもの、其の覺悟する所あるは固より知るべきのみ、古語に曰はずや國家千年兵を養ふは一日の爲めなりと、實に吾人が常々勅諭の五事を服膺して軍人の本分を恪守し、敢て精神の修養を怠らざりし所以のものは、是れ今日有るが爲めならずや、寒暑に堪へ飢餓を忍び、行軍に演習に孜々として努めし所以の

のは、是れ今日あるが爲めならずや、明治二十八年の 聖勅に「一誠以テ他日ノ報効ヲ期セヨ」と宣へるは、正に今日なるを示し給ひしものなりけるよ、
 實に今回の擧たる振古未曾有の偉業にして帝國興敗の別れ目なり、我國權が益々擴まりて、其威稜を永く世界に擧ぐることを得るも得ざるも、一に我々軍人が其職を盡すと盡さざるとにあるべく、我 天皇陛下が世界の覇權を握らせられ、宇内の盟主となり給ふも否らざるも、唯我々軍人が其の本分を全ふするとせざるとに因るをかし、誠に吾人の雙肩に擔へる責任は、國權の屈伸と皇威の汚隆に繋がるどころなれば、いそしみはげみて、日本武士の本領を發揮するの覺悟なかるべからず。

日頃 陛下の御信任を蒙り、其股肱を以て自ら任ずる軍人が、此重大なる責任を盡さんが爲め家を忘れ身を捨て、一意専心軍務に従ふは、實に祖先の美風を顯章し、聖代の餘光に酬ひまいらす爲めにみにあらざるなり、吾人の想像すべき第一の戦地は曾て先輩が骨を溲らし血を漂はして戦たる滿韓の平野にあらずや、吾人當面の敵は東洋の平和を破り人道公義に悖る露人ならずや、吾人が殊死奮闘して以て先輩の靈に酬ひ、且つ世界の爲めに光華を添ふるは、仁義によりて動き文明によりて戦ふの日本軍の天職と知らずや、他日赫

たる偉勳を奏せずば再び生きて此の國土を踏むべからずと覺悟せよ、若し我々軍人にして一度海外に挫折し、我國威を墜すが如きことならば、二千五百年來金甌無缺の國體を如何にせん、皇統連綿萬世一系の 皇室を如何せん、生きては陛下に奉答の辭なく、死しては何の面目あつてか吾忠勇なる祖先の靈に見えんや。

我聯隊は設置以來實戰に臨むは實に今回を以て始めとす、故に我軍旗をして忠勇なる聯隊の標識たらしめ、永く名譽を後世に胎すと胎さるも一に諸士の覺悟如何にあり、若し初度の戰役に於て不覺を取るが如き事あらば、長く軍旗の光を汚し、再び之れを雪ぐべき機會はなかるべし、益威武を宣揚し以て帝國を保護すべき明勅に對し奉り、死力を竭して之を酬ひんことを誓ひてし吾人の責務も重いかな。

余は信任する諸子と共に、劍電彈雨の裡に提挈し、軍旗と其の生死を共にするを樂む、諸子よ、軍旗の樹つ所は即ち 陛下の御馬前なり、軍旗翻る所は到る所これ本國なり、軍旗を擁護して協力同心奮て國事に當らば何の敵が破れざらん、何の城が拔けざらむ、若し不幸にして克つ能はずんば、乞ふ諸士と共に軍旗の下に死なむ。

余は親愛なる諸士と共に次の必勝の要訣を深々肝銘せんとなす、歩兵操典に曰く、「總て退

走ハ殲滅ニ陥ルモノニシテ、猛烈果敢ナル攻撃ハ常ニ成果ヲ得ルモノトス」と是れ軍人の拳々服膺すべき金科玉條なり、吾人の戰法は唯攻撃前進あるのみ、前進するときは身を勇進せよ、射撃するときは充分頭を露して沈着照準せよ、この二つは眞に戰勝の必要條件にして實に易々たるが如きも、實際戰場に於て勇怯の分かるゝ所なればなり、余は他日聯隊が赫々たる偉勳を樹て、以て上聖旨に答へ奉り、下國民に酬ゆるの日あるを期し、今や光榮ある出戰に際して一言以て諸士を戒む諸士夫れ旂を體せよ

明治三十七年五月二十日

歩兵第四十三聯隊長陸軍歩兵大佐 西 山 保 之

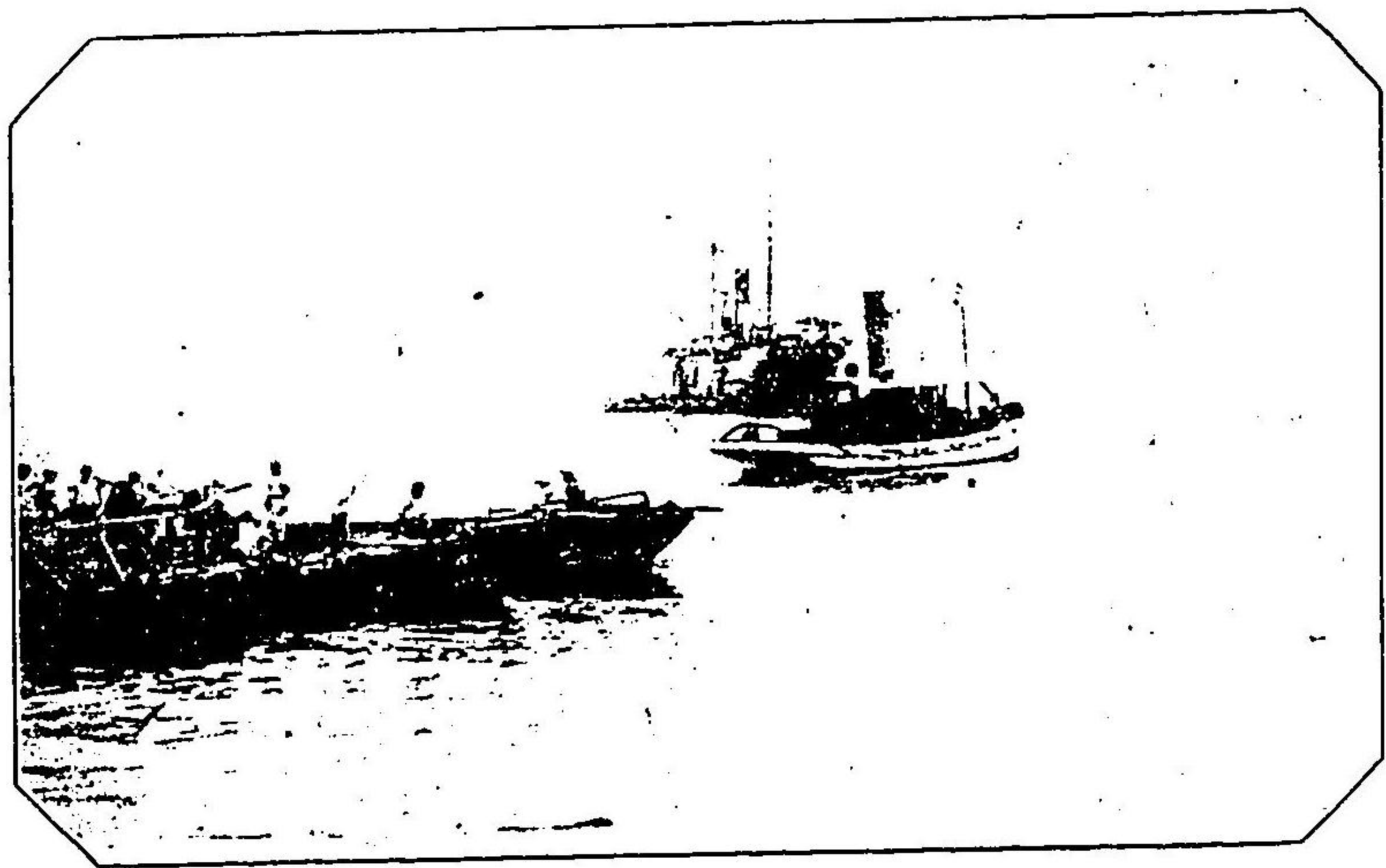
第三 出征

五月廿三日我中隊は、軍旗の出發に後るゝこと一日、今日しも芽出度門出に、一同東面して、中隊長發聲の下に、天皇陛下の萬歲を三唱遙拜しぬ。

東天漸く紅に、而も殘月中天に懸りて、明星其側に輝く、象頭山腹神々しき綠樹の梢にたな



善通寺歩兵第四十三聯隊



詫間灣軍隊乗船の光景

ひく春霞、高く雲際に聳へ立つ弘法大師の聖廟善通寺五重の塔、崇高壯美の威に打たれて、別れとなれば残る言の葉、口にくそ出さね、神佛も護照覽ましませ、必勝す生還を期せざるなりと。

歩武肅々隊伍整正營門を出づ、四ツ辻々々の大緑門、球燈國旗家毎に、老幼男女群集し、萬歳々々萬々歳、善通寺町民歡送の聲は唳々たる喇叭の音と相和して足爲めに軽く、欣躍壯快の極古句を借りて、「出陣やよくも男に生れけり」。

何時も行き通ふ大通、兵林館や警察署、何時しか過ぎて練兵場、永々御世話になりました、心身練りし甲斐ありて、征途に上る嬉しさよ、下崩へ出る若草や、しばし待たれよ今しはし、旭日の恵みに露消へん、躑躅咲きたるを無情など、恨まず繁れ年々に、上、下吉田日の本の、今昔も變りなき、油断中村八幡社、義家公は弓矢の神、雁行亂れて、伏兵を知る、勝つて兜の緒を緊める、兜形なる甲山。

大陸建國の基礎は何？ 聞いてや無邪氣の小學生、紅葉の様な幼な手に、赤き心の日の丸御旗、打振りかざし一齊に、

隊の乗る船は名も良縁しき吉林丸にして當時國論一致復讐的熱情強烈なりしを以て官民共に軍隊に信頼するの念其極度に達せしかば、出征の報傳はるや其行を盛んにせんが爲め誠心誠意諸般の設備に熱中し、風雨を厭はず晝夜を問はず、幹旋奔走寢食を忘れ、其極殆と狂喜に近きものなりき、即ち軍隊發途に先つこと數日、既に各縣各市町村及び民間設立各種の團體は、各其の吏員を衛戍地及び詫間並に浴道各地に派遣して事務所を設け、絲門及び諸般の裝飾に勉め、或は軍隊の休憩場及び湯茶の供給を設備する等、専ら出征者の便宜を計畫し、乗船に際しては、四縣知事、縣官、郡市町村長、兵事關係の官民、赤十字社愛國婦人會員、香川縣各學校等の諸團體、及び出征者の親族故舊等數萬の群集は、詫間灣頭を埋め、各旗幟を翻して其の團體を表し、潑々劉曉たる奏樂は、海を渡りて遙に發途を祝し、段々轟々たる歡聲は山河を動して發程を報ずる汽笛と相和し、海陸の壯觀實に千古に絶す、歡聲歡呼萬歲聲裡午後三時より四時に亘る間に、舳艫相啣んで詫間灣頭を解纜し西に向て徐に航程を起せり、船中の壯士聖代に生れ千歳一遇の好機に際し征途に就くに臨んで此の厚遇に浴す、一死以て君國に盡さんことを誓はざる者やあらん。

予は今詫間灣を去るに臨み特に一言小學職員諸賢に對し謝辭に代へんとするものは孟子

の所謂「庠序の教を謹むにあり」と論断せられたる如く、教育の要は人格をして道義的ならしむるにあるの一事なりとす。併せて四國官民の健康を祈るや。

瀬戸の絶景間もなく暮れて翌くる曉、關門海峡躍る眞帆片帆操作の手を休めて漁夫の聲

「勝つて来うい 勝つて来うい」

ア、この忠實飾りなき彼等の聲は予の最も感喜せし處である、形式的歡呼よりは自己業務の傍、有のまゝを以てする厚志が予等に取り如何に嬉しかりしよ、要するに吾人の感謝に價する最大のものは誠意を以て遇せらるゝに存す矣。

廿四日前夜來の強雨暴風、殊にこゝは名にし負ふ玄海灘、狂瀾怒濤船舷を洗ひ、爲めに六連島の影に避難すること一晝夜、やがて天候稍靜穩となり船は次第に進み行く。

弘安四年元寇十萬の兵殘るは唯三人の多々良濱邊はあれなるか、一際高きは背振山、ア、我が父母兄弟姉妹舊師に在ます故郷の佐賀はあの山の南側なり、如何てか家も忘るべき、あれど今や千歳一遇の大御世國家干城と生れし身、死するは忠義の最大値「さらばにて候」

吉林丸は約四千噸客船ならねど外國通ひ、十人位ひの將校を容るゝ一等船室は裕なり、予等

* * * * *

青年將校は初航海の嬉しさに引更へ、一等船客となつたのは今が初めては情ない心地する。

「オイ辻君風呂に這入ろヤ」

と次兄小隊長たる小笠原(於菟彦)少尉

「ハイ這入ましやう」と、

二人裸體で飛込まんとする風呂はこはそも如何に

「どうした？君」

「ア、失策だ！實はね、私今朝の中に放尿しました」

と臍下を指しつゝ、

成程今朝は其の底に少し斗り水が溜つて居た、勿論栓は抜いてあつたが其の水色は潮水、異りて少し黄色を帯びてゐた、又其側には例の楕圓形の箱に蓋をしてあつたものがある、予の如き足の短きものには少々高過ぎるが、これは西洋人に適する如く構造が出来てゐると考へポンプを向上しつゝ、遂に放尿したることである。

「ハッハ、ハ、構ふもんか君！出所こそ異ふが汗と同じだ沸す前に掃除してゐたよハッハ、ハ、ハ、」

「宜し、それでは先へ失禮します、これも毒味ぢやハッハ、ハ、ハ、ハ、船中の失策談はこればかりではない序だから尙一つ談しまじよう……」
 昨四十一年大演習からの歸途某船で西洋料理の御馳走、ピフテキが出る、フライが出る、ライスカレーが出る、終りにカステラが出た、先生一盃飲む方だから又肴が出たなど、止せばいゝのに感謝の善意を以てソースをかけた、向ふ隣の先生餘り西洋料理のことに精通なかつたと見へ、「右へ準へ」と、號合する。

後の方でボーイ君クスクスク笑ふ。先生至つて平氣ナイフで切てホークで頬張つた他の先生又候右へ整頓をやつた處がさて堪らん、

ボーイ君笑ふのも無理はない、カステラにソース掛ける人もなからうに、此も客さん皆んなが皆んなやつけた、如何にも滑稽千萬抱腹絶倒せざるを得ない。

愚案 「士官學校に於て一通り西洋料理を食わせしむるの可否」

こんな案を呈出したら生徒諸君大喜び満場一致で可決するだらうが、どつこい然うは行かない、粗食に甘んずる之れ軍人の欲する一大要件なるを知れ。

一同食堂を退出してより、嚮導がわるい、知らんことあるまいに意地が悪い」と、喰つてかゝ

る、その時、嚮導先生曰く「いやそのカステラなる事を知つて併し僕は甘いものが嫌いだからネー」

暢氣無頓着も茲に至つて寧ろ愛嬌あり、さてその先生とは唯ならん。

航海三晝夜何處に向ふとも白波切つて進み行く失策談や隠し藝、残らず出して終りの夜、

「消燈」靜かに」の注意命令か船内隈なく達せられた、さてこそ敵艦近々に見えたるか。

△「オイなんだつて妙な身振するんだ」

○「これが所謂武士頭いだハッハ、ハ、ハ」

哨兵「コラ靜にせんか」

翌れば廿九日鹽大澳張家屯に上陸、その夜は破子と言ふ一小村落に天幕露營、先づ驚いたのは支那土民の不潔と、南山陥落續いて長驅旅順方面へ進軍したとの通報、若しや旅順陥落の間に合はぬかと早や取越苦勞をした。過にし廿七八年の戦役に於ては金州攻撃後數日、其準備に苦心した事は甚だしかつたらうが兎に角攻撃開始してから二日目に旅順全部の陥落と言ふトン々拍子、併し此度は世界の陸軍國を以て任する露國或は未だ持ち耐へて居るかも知れないと、推測風説て夢にさう「旅順」の露營て一夜を明した。

第四 行軍

三十日早朝密營地出發、兎に角旅順陥落の間に合はざるべからずと勇氣を鼓して進軍す、廣漠たる丘陵、連綿數里に亘り流石は大陸的なるかなと、暫し船量の勞れを忘れたりしが戰時負擔量の上に五日分の重焼パンを負ひ、又道路は波狀をなして灰黄色の砂塵飛揚し、行進頗る困難なるに、打勝ち夜行軍—金州迄の距離問へば何處まで行つても三里三里と、後には癪にさわりて聞くのを止めた位—金州南門外に着いたのが翌朝の一時、此の日の行程十三里夜食を其翌朝の七時に終つたと言ふ丈けても此日の行軍が如何に猛烈なりしか、給養が如何に不便なりしかを察するに餘りあらう。

「辻君」

と言つて天幕の中に入つて來たのは阿久津少尉(潜)だ彼は予の同期生で同聯隊に育つた男今は衛兵長として師團司令部附である。

「オイ阿久津君か御互も芽出たい併し今日の行軍にはギヤフンと參つたかい」

「ハッハ、君が弱音吐く様ぢや、餘程猛烈だつたらう、まあ僕の處へ來い山崎少尉も一所に行こう」

と同期生の交情は殊に嬉しむもの！

「サア腹が減つたらう」

ア、湯氣立つ御飯のそれよりも君が熱き情に思はず予は阿久津少尉の手を握つた

「有難ふ少し貰つてもいいか、實は僕のちかぢつれ小隊に饑渴して居る兵があるんだそれに一握つゝ呉れんか」

「ア、いゝとも、當番これを辻少尉殿と一所に持て行け」

「ぢや一寸行つて來るぞ」

予は我中隊の露營地に歸り饑渴患者に先づ之れを與へ、殘餘を中隊長幕舎に分配した。

「オイ阿久津君今歸つた、有り難ふ！皆大に喜んだよ」

「ソーかまあ一盃飲め」

「ダンケ！君ステキなもの持つてるネ、まあ殘して置け、近々の中又旅順城頭で飲まうぢや」

ないか、ハッハ、ハ、ハ」と聲高く笑ひ乍ら

「實はそれよりか御飯一椀頂戴しよう」

「ウムソウか當番御飯ついて来い」

「時に戦況はどうだね」

「オ、この廿六日にすぐ先きにある南山が陥ちたんだ、まだ露スの負傷兵の呻き聲が聞へるぞ」

「然うかそして旅順はまだ落らないか」

「まだ！まだ！なんでも我師團は第一線に出る様子だぞ」

「然うかそれぢや旅順攻撃の間に合ふ譯ぢあなア！これて安心、今漸やく御飯の味がわかつたハッハ、ハ、ハ、」

腹が太れば疲勞は一時に増して睡氣切りに至る

「オイ阿久津君モ一歸つて寝るぞ」

「成程草勞れたらうそれでは又何れ」

「左様なら」

と堅く手を握合つて別れた。

三十一日午前八時睡眠不足の寝ぼけ顔、洗ふにも水無くそのまゝ、金州出發、戦後の南山や如何ならん。

傾斜緩に銃砲の有効射距離内一の據る可き地物なく、肩墻や散兵隊の二三重三重に鉢巻されたるは勿論、鐵條網をも設け鹿砦を備へ敵軍の用意は中々周到であつた、四邊には血に染んだる繃帯や繻料の断片などが散亂せる中に、敵味方の屍が横つて居る、悽愴斷腸の光景、思はず慄然たらざるを得ない、生きてこそ敵味方なれ、死しては共に一冷肉、均しく國家の爲めに竭したる尊敬すべき益良雄の遺骸である、屍は朽ちて黄土と化するも、名は青雲九天の上に在り、生者榮あり、死者獨り豺狼の餌に化する事やある、死者以て瞑すべしと、予は默禱願望した。日は中天に輝きて苦熱百度況して得るに水無き支那の土地、水の日本人には實にこたえる、午後に至りて天候急變疾風砂塵を巻き起し黄塵萬丈修羅の巷と化し了りぬ。塵除け眼鏡も物かは掛けては却つて塵溜場となる厄介物、鼻と言はず口と言はず顔一面汗でこねた黄粉餅とは能く言ふた、其行進連絡の困難なると又内地夜行軍の比に非ず、どうしても支那でなければ出来ぬ行軍、話どころか呼んで返事もせぬ始末、「モ一少しだ後るゝな」「連

絡を失ふな」さあ己れの剣を捉へろ」と珠子繼ぎの行列「ヤッ倒れた誰だ」大丈夫こんな畜生石魂奴」と腹立ちまぎれに蹴飛ばすやら唾吐くやら、それわく／＼此日の行軍位は困難な行軍は生來誰れも初めてだと言ふ、平素訓練の足らぬ兵士の悲しさポツ々と落伍しそうなものが出来てきた、戦友が勵ます分隊長や小隊長が銃を取り手を引き、貯へ置きし一滴の水を分ち與へるなど、此の間の情味素より尋常事ではあるが、たのもしい光景ではあるまいか。「シッカリしろく／＼と斃れちや旅順陥落の間に合はぬぞ」此の「旅順陥落の間に合はぬ」で遂に押し通した、併し聯隊中での落伍者は實に數百名に達したのである。

ア、此の日に行軍里程は僅かに七里に過ぎざるに、之に費やした時間十一時、以て如何に黄塵苦熱と奮闘し、行進に遲滯を生ぜしめたが察せられる／＼であらう。

此日師團は第三師團と交代、我が聯隊は第〇大隊のみ第一線となり、殘餘は豫備隊となり、青泥窪西方約一里西沙河口の村落に露營した。「ヤレ一睡」と枕かたしく間もあらず、予は聯隊命令により將校斥候となり午后十一時出發、何事も善意を以て感謝主義の予には、此の任務は起床瞬間の苦痛を忘れて非常の愉快と光榮とを以て迎へられたので、直ちに左翼隊司令部に宮崎副官(虎喜)を起し、配備の概略を聞き、第一線たる歩兵第〇〇聯隊より我

聯隊〇大隊の守備線に到り、其の任務を遂げし時は鷄鳴曉を報じ空腹と疲労は其の極に達したときである。大隊長木村少佐(捨馬)の厚意により部下は一椀の飯、予はその上ブランドーの一盃を舌鼓打つて飲み干した。

第五 駐軍

六月一日我師團は第一師團長貞愛親王殿下の指揮下に屬するの光榮を擔ひ、後乃木大將は第三軍司令官として北泡子厓に陣せられた。

爾后廿日余依然豫備として三川柳石家橋に駐軍諸種の演習、就中青泥窪の行軍中、歐式家屋の見物鮮魚の買物は兵の最も喜ぶ所て娯樂としては角力が最も勵行せられた。

我中隊の幕營地は梨樹繁茂して樹蔭最も清涼幽靜の地、之を以て角力場を作らんと力士數名をを入れるや、隣家の主人顔色蒼白泣聲して堀開を中止せられん事を乞ふ、而も其何故なるやを問ふに、答辯不明瞭且つ怪しき兆あるを以て斷然地下數尺を堀開すれば異臭ふん／＼如何にも彼等土民の狡猾なるに驚いた。容赦なく之を除去すれば豈斗らんや、窓掛テール椅子、鏡、幕布、十字鍬、圓匙等數十點皆之露兵の分捕物、依て我等は軍用品に之を没

集し、其他は之を隣人に返す、彼は斬罪にもやなんかと悲愁に沈みしが、恩命に接して「大人進上々々」と論語國丈けに「勿　　憚　　改　　禍」とは斯かる事にや。

さて土儀が出来た。角力は毎日入浴前に始まる。

呼出「東いー美女金に　西いー雲見上」

行司「片やー美女金に　こなた雲見山」

互に顔を見合して、ヨイヤハツケ、ハツの終がない、美女金と唐扇上る。

「片やー四國猿に、こなた旅順口——」

出鱈目の命名中々愛嬌あり、處が旅順口力士

「まつた！呼出待つた。行司待つた。見物諸君も待つて下さい。さて私しの藝名旅順口と

あるが、私し負けるのは嫌いぢやと言ふて、勝つては我が軍が縁起が悪い。」

流石は日本人い、處へ氣の付いた。一同そうだくと立所に賛成するので劍山と改名した。

* * * * *

「大人洋酒賣々」

と宿營地を目的に賣り歩く土人の行商、皆之れどどくさ粉れに掠奪したるもの、成程安價なるも道理、彼の土人は瓶の形状に依りて價を上下して賣るも可笑、去ればビールの如き一本五錢、シャンパン拾錢とは、ロハに等しき安價ならずや。而も之れ決して強制的に買つたるに非ず、試みに彼れ等に味はしむれば苦き顔してポコペン々々瓶好と拔目なき事を言つて賣付けける。流石は商買國民なるかなと思れた。

或日の事予は郊外散歩の折柄、兎ある茅屋の中より五十路を越せるかと思はる主婦の出で來りて手に立寄れと頼ふ。其有様何か由あり氣なり、予は若しや部下の兵士が來りて、悪戯などせしには非ずやと私かに己が部下の事を氣遣ふた。

果して主婦の語るを辛ふじて聞き取りしものは日本兵の事なり。はてもと危みつゝ、語續けるを聞けば、一昨日とかや征露池(宿營地を距る程遠からぬ所に我中隊泉が水を改修して命名)に水吸ひ我兵士の歸途、不圖驟雨に逢ひ、太田道敷のそれならで、暫し雨除せんものと立寄りしは此の家にて、折しも主人其の朝俄かの病氣に悶へ苦しむ様を見兼ねて、何か藥(征露丸?)を與へし由それが効能ありてか病氣忽ち治りて、今日は田を耕し居るとの事。漸く懸念が溶解して嬉しき厚氷、思はず

予はホ、と笑む。其れとなく家の内を覗くと薄暗い片隅に打臥したる娘子の今年取つて二九からぬ十八斗りになろうか、恐れてか、疑ふてか、始終俯向き面を見せざりしが、貰ひし薬の効驗著しきものから、その兵が若し通らば今一度願はんものと、且つは父全快のお禮や申さんと昨日も終日窓より覗きしが、それと思ほしき人も見へず、只管思ひ焦れるのみ、あはれ願くば大人よ、その兵連れて薬を恵まれよ、と「焼野の雉子、夜の鶴、我子思わぬものやある。」を偲び涙脆き予は、そゞろ同情の念忍び難く、さらばその兵連れて来るまでもなし、予も亦妙薬持ち居れば與へん事いと安し、之は寶丹とて起死回生の妙薬也、急に起りし病なれば、如何なる難病も忽ち治まる由を言ひ含め、勿體つけて吞ませけるが、娘は重き枕に顔いと赤く、額に手を當てがへば熱いと高し、これは斯ふしてと水にて冷やす術を教へければ、母諸共嬉し涙に目禮しぬ。これも何かの縁なるべし。

若し病の暮ることありせば予はエーシヨウエンの家に寓するなり、知らせなば又よき醫師に診察を待みやらん、去らば身を大切にせよと、言ひ残しつゝ去らんとしけるに、母親は大人暫し待たれよ、心計りのこの鶏、大人と彼の兵に贈るものなりと、そこで予は

「備們的好意多謝々々、這個不要」

と逆呼しつゝ立ち出てたり。

此事たるや些細なる物語なれ共、彼の兵卒が師團長の訓示を守りて猥りに女子に近づき其の内房を冒かさざりし忠良なる精神、及び病者相憐むてふやさしさ心掛は、如何に予をして愉快を感じしめしことの大なりしよ。

○土屋師團長訓示の一節

蘇テ思フニ相戦フノ對手ハ露軍ナリト雖モ相戦フ其地ハ清國ナリ清國ヤ我友邦トシテ管ニ唇齒輔車相倚ルノミニ止マラズシテ東洋ノ平和ヲ保全シ其開發向上ヲ促シテ俱ニ人類ノ福祉ヲ全フセシメンコト是豈此ノ戦ヲ爲ス所以ノ旨義ニ非ズヤ然レバ戦ニ清國ノ其領土ニ臨ムモノ須ラク此ノ趣旨ヲ體シ敢テ或ハ閑却スルナキヲ要ス聽ク露軍ノ經過スル所剽掠殘害荒寥ノ狀慘トシテ悽絶スト噫、國道ナケレバ兵モ亦凶ナルモノ乎平素ヨリ我軍紀ノ嚴律スル所皇軍ノ向フ所清民夫レ箠食壺漿以テ迎フルアラン案ズルニ民俗習慣ノ異、文野教化ノ差、若シクハ氣風品性ノ同シカラザル其間或ハ奇異怪恠可笑可憐ノ威ヲ惹クモノ亦尠ナカラザルベシト雖モ必ズヤ端正己ヲ持シ宏量人ニ接シ懷柔扶掖以テ文明國仁

義ノ師ノ德澤ト共ニ又日本國櫻花國民ノ高風ニ浴セシメンコト亦深ク諸子ノ期セザルベカラザル所若シ夫レ日常領事ノ故ヲ以テ皇軍ノ大恩威ヲ損スル如キ遺憾アラシム可ラズ茲ニ征途ニ上ルニ臨ミ下士以下ノタメ特ニ告諭ス

明治三十七年五月二日

第十一師團長 土屋光春

参考

- 一、神社佛閣ヲ尊崇スルハ何レノ邦國ト雖モ同一ナルモ清人ハ特ニ文神(孔子)武廟(關羽)ヲ崇敬スルヲ極メテ切ナリ不敬等ノ事アルベカラズ
- 一、男女席ヲ同フセズノ風習ハ最モ嚴格ニ格守スル處ナリ猥ニ女子ニ近ヅキ其ノ内房ヲ冒スガ如キハ斷シテ戒メザルベカラズ
- 一、文字ヲ重ズルノ國風トシテ古紙斷簡ト雖モ苟モ文字アルノ紙片ハ之レヲ惜ミ字臺ニ燒テ穢スコトナシ特ニ此美俗ニ反シテ惡感情ヲ惹起スルガ如キコアルベカラズ
- 一、妄リニ人ヲ輕蔑スベカラザルハ何人ト雖モ同シキ所ナレトモ殊ニ清國ノ讀書人ナルモノハ中流ノ人士ニシテ相當ノ名望ト地位トヲ有スル者之ヲ重ズルノ風牢トシテ拔

クベカラザルモノアリ注意スベキコトナリ

- 一、冠婚葬祭ノ典例其ノ他風習慣行テ重ンスベキ又言ヲ俟タズ其異同ヲ以テ嘲笑輕侮ヲ加フルガ如キコアルベカラズ

との宜なり部下にして彼の逸事あることや嬉し、去れど軍紀嚴肅ならざりし后方勤務者の露國俘虜に對して或は清國民に對して遺憾なかりしや否や、予は誇大にもせよ、彼の俘虜の述懐を聞き、或は其の書を読むに及んで密に悲憤の涙下るを覺へたりき。既往は詮方なし現在及將來渡清者の參考にもと信じ、師團長の訓示を再讀記載すること爾り。

御製

予らはみないくさの庭に

出てはてよ

をきなやひとり

山田守るらん

第二編 花の巻

日露戦役に際し日本帝國戦勝の諸素因中、陛下の稜威は言はずもがな、其最大なるものを軍人精神の活動とす。

軍人精神とは他なし、日本魂武士道にして、即ち勅諭の五ヶ條なり。

敷島の大和心を人間はと

朝日に匂ふ山櫻花

本居 宣長

と宜なる哉、古來花は櫻木人は武士と、稱譽比類なき所以は、共に我帝國の精華なればなり。然り而して世人亦戦勝に精神の優越を認め、就中軍事の研鑽に熱心機敏なる歐州の諸強國は、空前の一新事を企てたり、蓋し我國軍人の海外に遊學するもの殆んど枚舉に遑あらず、然れども彼國軍人にして我國に留學し、隊附勤務を命ぜられたるもの、實に日露戦役後を以て嚆矢となす。空前の一新事に非ずして何んぞ之れ他なし、歐州兵家が戦勝の素因に軍人精神の活動を確證せしが爲めなり。

予や幸に日露の戦役に参加し、軍人精神の活動を目睹し聊か心に徹し肝に銘する所尠らず、

花の巻はこの血河屍山場裡に得たる材料を經緯して、具體的に説述したるものなり、只其記事戦闘の順序を追ふ能はず前後したるところあり、讀者諸賢夫れ之れを諒せよ。

第一 軍人は忠節を盡すを本分とすへし

一 旅順攻圍軍の歩兵二等卒川端彌太郎の忠節

明治三十七年七月廿六七日、第三軍は旅順要塞の前進陣地(双寮溝より安子嶺太白山を經て老坐山に亘る)を攻撃せり、而して第十一師團は軍の最左翼にありて太白山及老坐山の敵と對峙す。

敵は一度南山に敗れ、又劍山を失ひしも、其間約二ヶ月の日子を費やして堅固に工事を施し、第一線の諸設備たる(散兵壕、肩壕、鐵條網、鹿砦、地雷等)は勿論、交通路、休息所、收容陣地等に至るまで悉く完備し、將に半永久堡壘と稱するを得る程度に達せり、就中大白山方面は峯巒聳立、斜傾頗る峻險殆んと歩行すべからざる状態にあり、加ふるに之を守るの敵は頑強なるのみか充分庇護せられたる大砲、機關銃を以てし、其他側防の設備完全なるに於てをや、翻て之れが攻撃の衝に當るものを見れば、此困難の外炎熱燒くが如き天候及び給養の不充分、殊に水の缺乏に堪えざるべからず、困頓實に言語に絶す、然れども

吾人は次の事を忘る可らず曰く

「困苦^{こんく}缺乏^{けつぱつ}に堪^たへ克^かつは軍人^{ぐんじん}必須^{ひつと}の性質なること」と。

二十六日師團は二縱隊^{右翼隊第〇〇旅團}となり攻撃前進す、當時我歩兵第〇〇〇聯隊^{第〇大隊欠}は師團の總豫備隊、我大隊は左翼隊の豫備隊、而して予は第九中隊の一小隊長なりき。

二十六日、拂曉^{ふつせう}雲霧^{うんむ}茫漠^{ぼうばく}たる裡に左翼隊の第一線部隊^{步兵第〇〇聯隊}は巧妙なる戰術及勇戰奮闘の結果遂に老坐山を占領せり。續ひて敵の猛烈なる逆襲^{ぎやくしやく}を受けしも之を撃退し、尙其主力を以て太白山高地に向ひ、攻撃前進せしも地形の嶮惡と敵火の猛烈なるため、攻撃著しく進捗せず遂に日没となれり。

此夜左翼隊長神尾少將は、歩兵第〇〇聯隊長の意見を容れ、其聯隊の主力を以て夜襲を企てしも功を奏せず、終夜銃聲^{じゆうせい}喊聲^{かんせい}熄^ひむときなし。

二十七日には、敵艦隊の出動及側背よりする其砲撃により、大白山方面の攻撃意の如く進捗せず、白砲隊の如き遂に其陣地を保つ能はず、一時黃泥川大上屯に退却し、戰况稍不利の光景を呈せり、且つ敵の陸戰隊は老坐山南岸に上陸し、又敵歩兵の増加により老坐山南

方高地守備隊長は、現在の兵力を以て拒止^{きよし}するに困難なるを以て、増援隊の來著を乞ふとの報告屢々左翼隊長の許に達せり、茲に於て予は左翼隊長の命を受け其狀況偵察^{ていさつ}のため將校斥候となり出發す、途に同期生松本少尉^{日廿六}の戰死^{戦死}及先蓋大野歩兵中尉^六同期生桑名少尉^千の重傷を聞き、其他負傷者の續々繃帶所に送^からるゝを見、戰闘の如何に激烈なるやを想ひ、歩を速めて到る、時に敵の逆襲稍柔らぎ、目下の狀況に於ては増援隊の必要を見ず、依て歸來此旨左翼隊長^千に報ず、之を以て左翼隊長は大に期する處やありけん、斷然其豫備隊たる我大隊を第一線に増加し、大白山東南方約千米突標高一九五高地の最要害部に向ひ攻撃せしむ、時に午後四時。

師團に於ては内野歩兵少佐^{辰二}の意見を採用し、總豫備隊中の歩兵第〇〇〇聯隊第〇大隊^{中隊欠}を第一線に増加、し一九五高地の北方要地に向ひ攻撃せしむ、蓋し師團が二晝二夜連續攻撃せしも遂に戰機^{せんき}の發展^{はつてん}を見ざるため、豫備隊の將士幾分焦慮せしや疑なし。

斯の如く予の所屬する歩兵第〇〇〇聯隊の將士は、少しく否大に自ら恃^{たも}む所ありき、何んとなれば、劍山の攻略及び防禦戰闘以來勇名赫々^{せきせき}、初陣の軍旗に光輝の一層燦然^{さんぜん}たるを覺へ、師團中の花形者たる觀ありしを以てなり、其當時他隊に使ひ、或は訪問して歸る將士

の顔面に自ら喜色の禁ずる能はざりしものありしは、實に他隊諸士の賞賛と羨望とを其身に擔ひしを以て也、予は此光景を利用して士卒の志氣を鼓舞せり、茲に於て他隊が二晝一夜連續攻撃するも尙ほ未だ奏功せざる此高地、此敵も、吾人歩兵第〇〇〇聯隊の將士が一度攻撃せば、何有狗鼠と言ふ一種の攻撃精神勃興し、意氣衝天已に敵を呑むの慨ありとは、恐らくは當時の情態に適合する最良の形容詞ならむか。

午後四時我大隊は、茲に前進準備即ち(前進路の偵察、隊形彈藥の分配其他)を終る。但し炎熱の酷烈と饑渴の甚しさを忍ぶは勿論なり、而して愈々出發するに際し、特筆散兵に注意を催さんとする一事を發見若しくば感知せり、そは吾が中隊援護射撃を終へて將さに前進せんとする際、彈藥を落失するもの實に夥しき事是なり、こは全く平時演習の際彈藥盒の留草を鉛に鈎することを忽かにせし結果なり。そこで此時落失したる彈藥を拾得するものありやと言ふに、中々敵彈雨飛の下に此に氣付く兵のなきは遺憾と言ふも愚かなり、聞説他隊にもこの過失ありしと見へ戦闘後彈藥の收容隊を出したりと、宜なり改正操典はこゝにこの必要條件を定めたることや。

さてこの前進路は、幸ひに敵艦の遁走後は、小銃火を時々受くるのみ、之を以て我中隊は

掩護射撃を終つて、分隊躍進を以て其稜線を越へ、谷底に一系列側面に集合し、後ち又各個に躍進し以て敵彈の損害を減少せり。

此時予は小隊の先頭にありて行進中、敵火の曝露する所に至るや、忽然一人の兵卒、予の前方に挺身して恰も自己の身を以て予を掩ふものゝ如し、ハテ不思議の動作をなすものかな、と思ふに矢張其神經なるが如し、蓋し其處に一人の外掩ふことの出来ぬ岩ありき。而して其兵卒は手に先ち其岩に掩はれありしか、子を見るや彼は手招きして「此處」と言ひ指して直ちに岩上に彼の身を横へたり。

嗚呼讀者諸賢、此處は彈丸雨飛の中、而も一個の岩の外他に掩蔽物なき命の瀬戸際なる所なることを忘れ給わぬ様。

而して彼は次に停止すべき地點、及其行進方向の撰定に就て彼の目撃せる所を述べたり、勿論彼は岩上に伏臥するとは言へ、敵火に曝露し予は彼の無窮の厚志を容れて岩と彼の體に掩はれしなり。

噫如何に忠良、剛膽且つ沈着にして殊勝神妙の兵卒なるよ、予は未だ嘗て斯の如き動作に出てよと一回も具體的に教育したることあらざりき、而も猶斯の如くなるは、斯の如き時、

斯の如き場所に於て、所謂「部下は上官のため、上官は部下のため、互に相濟して以て全軍の名譽を發揚すべし」との信念無意識に發現したるに非ざるなきか。

人誰れか自愛の念なきものあらんや、自愛は人間自然の情即ち人情なり、然れども自愛の念のみ強くして他愛の念無く、或は薄きものは所謂小人なり、少しも他の動物と異なるなし、否、動物と雖も彼の燒野の雉子、夜の鶴を見よ、其身を捨て、子を愛す、况んや萬物の靈長たる人間たらんもの、他愛の念ならずして可ならんや、この他愛^二義^一の念強きもの即ち士君子にして、生死の巷に臨んで從容として亂れず、秀ひて、は富岳の雪となり、發しては萬葉の櫻となる、之れ實に眞の忠臣義士にして、決して官位等級の高卑に依り上下せらるゝものにあらず、予は衷心感謝の意を表し心密かに彼を拜せり。

時に一束彈來つて彼の面前に砂塵を飛揚せり、ハツと見る間に又一束彈、此一刹那起ちしと見へし彼の姿不圖も頽れ、顛倒したるや早し、既に此の世の人ならずか吁！。

否々、稜威は此處に輝けり、彼は堯爾として予に慰安を與へつ直ちに前方に躍進せり。

抑も彼は誰れならん、陸軍歩兵二等卒川端彌太郎其人にして、三十五年兵德島縣名西郡浦庄村大字諏訪の生也。

彼は實に偵勳兵なり、何故に彼は刑法に觸れしや、彼れは鳳眼靈胥芙蓉の顔、花を欺く美男子なり、然れども悲しむ哉、無教育なるため、彼れに戀愛せる少女の誘惑に耐ゆる能はず、遂に脱營して、偵勳兵の汚名を負ふ、彼の心情寧ろ憐むに堪えたり、果然性、善なる彼れは、其罪を自首したり、然れども屯營を離れて六日を過ぐ、彼は刑法處分を受くるの已むを得ざるに至りしなり、而して彼れが刑滿て歸隊して、其當時の中隊長香阪大尉(仁)より懇々訓戒と慰藉を與へられつ、あるの日、予は見習士官として著隊し、親しく彼れが悔悟の情と從來の關係を見聞するに及び轉た惘然の情禁ずる能はず、蓋し袖振り合ふも何かの縁、ましてや苦樂生死を共にすべき同一家庭の兄弟なるに於てをや。

一旦前非を悔ひたる彼れは、人一倍粉身碎骨忠節を盡すに非ずんば、自己の罪惡は消滅するものに非ずと覺悟の色熾んなるも、尙ほ未だ同僚の同情を買ふ能はず、爲めに彼れは萬籟静寂の深更、予に泣ひて胸中を吐露したることもありき。

時なる哉、天なる哉、東亞の風雲愈々急に、我師團亦出師の命を受けぬ、茲に於て予は戰時中隊編成の際、中隊内の變物を強めて集めたること前述の如く、蓋し活かして使ふは予の本領に屬すればなり。

忍ぶれど色に出にけり我戀は

物や思ふと人の問ふまで

平 兼 盛

豈夫れ我が戀のみならんや、予が一片の微誠は幸ひに部下一同の感謝する處となり、上下の親密は恰も春風の胎蕩たるが如し。

彼の無教育なりし偵働兵川端二等卒が、彈丸雨飛生死の巷に、或は立ち或は伏し、其身を以て小隊長を掩ふ所以、夫れ上下精神の融和作用に基くにあらざるなきか。

然して彼は以上の事實のみを以て終りしや、否々彼れが忠節を盡し其本分を完ふし、予の尊敬を拂ふに價するもの實に之れ以下に於て見られよ。

我大隊は斯の如き躍進法に依り、幸ひに損害極めて少なく大白山一九五高地の東麓に集合するを得たり。

大隊命令(七月廿七日午後五時
於大白山東麓谷地)

一、大白山一帯ノ敵ハ尙ホ退却セズ

第〇大隊ハ我右翼ヨリ攻撃スル等

二、大隊一九五高地ノ敵ヲ夜襲セムトス

三、第〇〇、第〇〇中隊第一線第〇中隊、豫備隊、左翼後ヲ前進スヘシ

大隊長近藤少佐(末四郎)

當時第〇中隊は、歩兵第〇〇聯隊と共に戦闘中、又我中隊の半小隊は小平島守備の任にあり。

斯くて第一線は、中隊縦隊を以て其前方近距離に、將校斥候(第〇〇中隊阿久津少尉第〇中隊天野少尉)を出して前進す、豫備隊亦殆んと第一線と同線上にありて、左翼に斥候を派して前進す。

此夜襲部隊は、敵陣突入迄射撃と喊聲を禁ぜり、同夜黒雲天に漲り殆んと咫尺を辨せず、爲めに不幸大隊長との連絡を失したりしも、勇敢なる淺見大尉(新六)の指揮により、一層猛烈に突進せり。

敵は我夜襲隊の接近を知り、齊射に次ぐに亂射を以てす、反之我隊は隊伍こそ整正堂々と言ふを得ざれども、歩武肅々亂さず、恰も狂犬の一聲も發せず人に嚙付く如き氣勢を以て、突貫々々又突貫し、茲に彼我の劍尖相摩し、突撃格闘の大活劇を演出しぬ、されど如何に頑強の敵とは言へ勇敢無比なる我突撃隊の英雄に勝つべき、最後の不知不識の喊聲に旅順

要塞前進陣地最先勝利の月桂冠は正に我隊の掌裡に歸し、敵は一九五高地を捨て、退却せり。於茲我第〇大隊は歡喜の餘まり、天皇陛下の萬歳を三唱するや、サア大變、聲を便りに彈丸の飛來頻々たり、思ひきや暗夜の鐵砲に死傷續出せんとは、此時我右翼第〇大隊突撃功を奏せしと見へ、「第〇中隊が此山を占領したぞ！」と有名なる莊司大尉(都盛)の聲聞ゆ。されど尙ほ彈丸の飛來止まされば、喇叭「君が代」を吹奏して味方撃ちを豫防したるも甲斐なく、一方の斜面に移つるや、又もや響くは敵の機關銃聲、續いて來る其彈丸、今は又彼方の斜面に移れば此處も同じく敵彈に空しく死傷者を出すのみ。

「誰だッ今頃居眠するものがあるか」

と予は一喝しぬ、されど敢て答ふる色氣もなく、而も感心に銃を抱いて頭を上げつ下げつ、眼を白ろ黒さす氣味の悪さよ、從卒中田(喜代七其人指して曰く

「居眠りぢやありません、頭の後部から血が出ております、郡であります」
まこと彼れは頭部皮下跳通銃創を受け腦震盪を起し居たるなりき。

「新居か、やられたか」

「糊帶々々糊帶が足らん」

と我を忘れて傷者の救急に飛び廻る桑原堅太郎の敏腕、流石は補助擔坐卒なる哉。

嗚呼留まつて徒らに部下の多數を失ふべきか、さりとて後退して一旦奪取したる敵陣を空しく敵手に渡さんは、實に千歳の恨事なり、嗚呼他に策なきか、曰く否今や斷然左側面の敵を撃攘するにあり、實に最先占領部隊の名譽を保持且つ發揚するは將さに今迄豫備隊にありし吾人の任務ならずや、果然大隊長代理淺見大尉は呼んで曰く、

「誰れか將校は居らんか第九中隊の將校は居らぬか」

と依て予は大聲

「辻少尉茲に居ります」

と勇躍淺見大尉の許に行くや、同大尉は非常の喜悅を以て予を迎へ、次の命令を下せり。

「一、貴官は部下小隊ヲ率ヒ左側面ノ敵ヲ撃退シ歩兵第十二聯隊ト連絡スベシ」

尙ほ左の獎勵の言を與へらる曰く

「貴官の成功に依り此陣地の占領確實なるを得ん」

と實に大白山一九五高地の占領は敵に代りて陣地の主となりたるものにして、其價值や甚だ偉大なるものなり。

予は快諾欣然として部下の伏姿しある所に到り、此命令を下すや否や、憚絶、快絶、危険悲惨も物かは、早や已に前進せんとする勇者あり、之れ他人にあらず盡間身を以て予を掩ふたる恩人川端二等卒なりき。

然るに俄然彼れは

「ウム！」

と一聲地上に斃れたり。

予は

「ドウしたか」

と思はず彼を抱けり。

彼は腹部を押へて

「小隊長殿やられました萬、萬萬歳」

と氣息奄々早や絶へなんとす。

嗚呼恩愛の契違からぬ彼と予、如何なる前世の宿縁ありしにや、一度ならず二度三度遂に彼は予の防楯となつて斃れたのである、嗚呼能くも予の身代りをして呉れし彼れ。生殘の

予が如何にして涙を流さざるを得んや。

「一、軍人ハ忠節ヲ盡スヲ本分トスベシ」

と、予一片の念佛を奉唱すれば、言下に彼は嚴然起立せり、其利那一彈又來つて彼れの頭部を貫通せり、而して彼れは腹部貫通銃創の絶へ難き苦悶裡より、早く美しき天國に救ひ去られたり、嗚呼勇敢なる忠士の戦死ならずや。

彈丸雨飛の中而も腹部貫通の重傷を負へる彼、何故嚴然起立せしや、言ふまでもなく、神聖なる勅諭の一節念題を去らざりせばなり、蓋し之れ實に土屋師團長（光春）の感化に基因す。師團長嘗て檢閲の際一兵卒の勅諭を奉答するや自ら嚴然不動の姿勢を取り謹聴せらる。爾來我隊に於ては此美風良慣性を養成せらる。

予は之を筆にして茲に至り、或は之を回顧する毎に額汗を覺ゆ、何んとなれば當時堂々たる將校の予は、實に岩石に敵弾を遮ぎり伏姿のまゝ、勅諭を奉唱したばなり。

然るに一兵卒たる彼れの精神、彼れの行爲は、如何予が先きに彼れを尊敬するに充分の價値ありと賞賛したるは、實に平戦兩時不變不拔の信念の發作を彼れに依りて認むればなり。嗚呼志操堅忍而して氣節の壯烈なるに非ざれば、焉んぞ能く此に至らん哉、其誠忠傳へ

次て萬世不朽、其行爲探つて以て軍人の好模範とするに足る矣。

かくて我小隊は川端二等卒の忠烈に感激し蹶起勇進す。

「辻君すぐ此の左に敵が居るぞ」

と岩の影より飛び出て來りたるは阿久津少尉なり。

「オ、阿久津君、ソ、か僕の大隊に喇叭手居らんが一名貸さんか」

「うむよろしむ」

と例に依り快諾、而して予等の行を壯にして曰く、

「確ッかり頼むぞ、後は引受ける」

廢殘の敵尙頑強に抵抗する奴を、側面より將基倒しに突き捲くる愉快さよ、而して遂に其
第二第三壘を奪へり。

「オ、イ味方か」

と問へば



君	天	曇	大	色	花
が	晴	り	日	香	は
代	れ	を	山	に	づ
祝	討	拂	頭	迷	か
ふ	死	ふ	夜	い	し
萬	尊	武	半	し	美
々	し	夫	の	罪	男
歳	や	の	月	消	子
				え	の
				て	

「味方ぢや、第〇〇聯隊第 大隊」

と答ふ、そこで予は大隊長久野少佐(廉)に面會して、

「第〇〇〇聯隊第〇大隊より連絡に参りました、御成功の段誠に御芽出度御坐ひます」と言へば、

「イヤ君の隊の御蔭ぢや、能くやつて呉れた、近藤少佐に先頭第一の成功を祝すと宣敷」
嗚呼何んぞ心事の高潔なる、他の成功を稱へて自己の成功を誇らざる床しさよ、予はさても其名の如く功名手柄に廉なる人哉と執くく感じ入りぬ。

此夜我小隊は我大隊と久野大隊との中間、數百米突に至り、警戒を擔任し拂曉に至るまで敵の數次の逆襲を撃退せり。

* * * * *

賞 詞

歩兵第四十三聯隊附

陸軍歩兵少尉 辻 權 作

明治三十七年七月二十七日所屬隊大白山ヲ攻撃スルニ當リ敵ハ峻險ニ據リ堅固ニ工事ヲ施シ頑強ニ抵抗シ攻略頗ル困難ナリシガ少尉ハ突撃隊ニ屬シ同夜暗黒ニシテ攀登最モ困

難ナル斜面ニ向ヒ小隊ヲ率ヒテ猛烈ナル敵ノ小銃火ヲ冒シ勇往奮進敵陣に突入シテ先ツ第一壘ヲ拔キ次テ三壘ヲ占領セリ其動作勇敢ニシテ功績著大ナリト認ム仍テ賞詞ヲ授與ス

治三十年八月一日

第十一師 長陸軍中將正四位勳二等功四級 土屋 光 春花押

豊夫れ予一人の功績ならむや、部下の勇戦奮闘就中、川端二等卒の殊勳に基くもの多し、唯其代表者として徒らに名を表はされたに過ぎず。

川端二等卒は武功拔群により即日上等兵を命ぜられ、又功七級金鷄勳章勳八等白色桐葉章を下賜せらる。聖旨宏大無偏實に光榮なりと謂ふべし。

大白山戦争に於て我中隊の死傷人名左の如し。

- ハ戦死、×ハ負傷、○ハ本戦に於て負傷他
- ハ大尉、×ハ中尉、○ハ上等兵以下之
- ハ軍、×ハ軍曹、○ハ上等兵以下之
- 上、大西善吉
- 上、川端彌太郎
- 上、田尾音太郎
- 上、山内大得
- 上、遠藤安藝太郎
- 上、貞野宇一
- 上、清水彦平
- 上、小川龜一
- 上、新居愛蔵
- 上、緒方治平
- 上、原重吉
- 上、大西善吉
- 上、川端彌太郎
- 上、田尾音太郎
- 上、山内大得
- 上、遠藤安藝太郎
- 上、貞野宇一
- 上、清水彦平
- 上、小川龜一
- 上、新居愛蔵
- 上、緒方治平
- 上、原重吉
- 上、大西善吉
- 上、川端彌太郎
- 上、田尾音太郎

- ×二、涑田多次郎
- ×一、長瀬清助
- ×一、上田豊太郎
- ×一、出島鹿吉
- ×一、阿部助之助
- 上、貞野宇一
- ×一、三宅會平
- ×一、三木藤一
- ×二、清水彦平

二 中村特務曹長(莊也)の美談、勳章のために戦は致しませぬ。

中村軍曹は、歩兵第〇〇〇聯隊第九中隊根本小隊長(極三郎)の部下の分隊長なりき。同軍曹は明治三十七年七月二十六日、所屬隊大白山攻撃に當り小平島の守備地より撰拔せられて半小隊を率ひ、特に中隊に復歸したるなり、二十六日午後四時、左翼隊の主力を以て大白山の敵を攻撃するに決し、豫備隊たる我第〇大隊を第一線に近く招致するに際し、我中隊前進中、敵の猛射を受け白晝の前進頗る困難危難なり、茲に於て中隊長岡村大尉(朝次郎)勵聲叱咤志氣を鼓舞して奮進中、敵弾のため肩胛部に貫通銃創を受けぬ。中隊長の直後(すそ)にありし中村軍曹之を見るや、

「中隊長殿の創は淺い、軍曹背負ひます」

と近づく途端、又一弾此度は軍曹の大腰を貫通して起つ能はず、而して二人は敵火に曝露し、附近に一の遮蔽物だになし、憎ひ設懸敵、又々猛射を加ふ嗚呼絶對絶命。

此時軍曹其の河原を辛ふじて這ひ廻わり小石を築めて僅少の掩體を構築し先づ中隊長を隠蔽しぬ、而して軍曹は中隊長の危難を救ふためには鮮血淋漓自から綑帯するに違あらざりき、身を捨て、仁をなす豈偉大ならずや。

後日小孤山戦闘の結果、第九中隊か將校を失ふて途方に迷ひ、便り少なくなりし時、中隊長岡村大尉が身剣痕を襲み、速に戦線に復歸して部下に著大の光明を與へ、遂に旅順陥落に擧つて力を致し、又北進して鴨綠江軍に屬し、諸所に轉戦して多大の戦功を顯はせしも、之れ同軍曹の勇敢義烈に基くと言ふも敢て過言に非るべし。

爾後同軍曹は、内地に後送入院の身となりしも戦局の發展に伴ひ、出征部隊へ人員の補充逼迫を告ぐるや、創痕全く癒へざるに志願して再征後備歩兵第四十三聯隊に編入、累進特務曹長となり、奉天會戦に参加して功あり。

論功行賞發表せらるゝや中村特務曹長は勳七等青色桐葉章を拜受せり。

不思議だな」と、同僚打寄り談る。そこで

「何が不思議ですか」

と問へば

「イヤ中村は殊勳になるだろうと、思つて居たから」

「ハイそうですネー」

と、彼の働きを知るもの皆氣の毒の思ひせざるものなかりき。

依て予は一日彼を慰撫して殊勳の思典に達せざりしを述べよや、彼は端然誠意を滿面に溢らし而して絶叫せり曰く

「中尉殿！中村不肖なりと雖も勳章のために戦は致しませぬ」

と、噫何んぞ夫れ氣宇の高潔にして清麗なる、恰も光風霽月の如く一點の曇なき玲瓏たる胸中、如何にも快男子ならずや。

夫れ我國軍人が敵前に於て赫々武勳を奏するは、只、君の御爲め、國のため其職務を盡すにあり、敢て恩賞報酬の如何を冀ふべきものに非ず。

歸つて敵國の情態を見よ。

露國の非職將校ガインフィールド氏の話に

露都から來る汽車の中には夥多の勳章賞金等を載積してあつて、同車に充滿せる將卒等は、意氣甚だ軒昂、文明の露軍は必ずや半開の日軍を粉碎して彼の燦たる勳章を佩び、爛なる黄金を懐にするのである云々。

と、以て知るべし日露兩軍勝敗の素因歴々指點すべきものある事を。

然るに近來世間滔々として、虛名、利己の惡風に感染し、甚しきは軍人にして行賞の不平を漏らすものありとかや、さる折柄彼れ中村特務曹長の如き美談は大に人意を強ふするに足る矣。

富士の峯千古の雪の眺め哉

此句、聊か以て彼に比するを得んか。

第二 軍人は禮儀を正しくすべし

一 瀕死の境にある上等兵島村猪源太の舉手注目、

明治三十七年八月七日、第三軍は旅順要塞攻圍作戰の進捗上、第〇〇師團及攻城砲隊の一

部を以て、大、小孤山の攻略に任ず、而して我歩兵第〇〇〇聯隊の攻撃目標は實に小孤山なりとす。

抑小孤山は、旅順要塞東雞冠山、及び白銀山砲臺を東に距る約二千米突、傾斜急峻所々に攀登すべからざる斷崖ありて、大孤山と相並んで屹立する重要な高地なりとす、而して敵は其東麓を流るゝ小河を改修して氾濫を設け又山頂には角面堡を構築し、周圍に鐵條網を以てし、尙其南方海岸にまで延長せり、加之九珊知口經の加農砲及機關銃を以て堅固に守備す。茲に於て聯隊長西山大佐は部下に訓示して曰く

「過去劍山及大白山に於ける我軍旗の偉勳は實に赫々燦然たり、而して今や愈々旅順要塞本防禦線前の一要地を奪取せんとす、これ或は我聯隊の要塞戰に參與する最終戰たるやも圖り知るべからず、希くは諸子の勇戰奮闘により軍旗に尙一層の光輝を添へられんことを、」

と、衆爲めに奮躍死力を竭して之を抜かんことを誓ふ。

七日午後四時、聯隊は歩兵第〇〇聯隊の左翼に連繫し、第〇第〇大隊(第〇〇中隊員)を以て第一線、第〇〇中隊を豫備隊となし、山川抑附近より郭家口を経て攻撃前進す、第〇大隊は旅團の

豫備隊なりき。

敵は我攻撃隊の前進を見るや、大、小孤山上の敵砲は勿論、東雞冠山、白銀山等の諸砲臺より轟然として發砲す、迅雷疾風天地爲めに震動す。

此時山川抑近附にある我白砲隊及び山砲隊之に應射す、時に大、小孤山上の敵砲沈黙す、我歩兵は此期を利用し一舉敵陣に募進せんとするや、今まで沈黙を守りし敵砲、俄然猛烈に砲火を我歩兵に集中す、又敵の歩兵及機關銃火漸次熾盛となれり、加之驟雨沛然として至り今や暗黒咫尺を辨せず時已に午後七時三十分。

茲に於て第一線諸隊は、敵を距る約八百米突附近に戰鬪展開のまゝ露營せり、此露營地は敵の探照燈の死角内に撰定せり、而して此夜に於ける吾人の辛酸は到底言辭に盡難きものありき、蓋し終夜櫛風沐雨ビシヨ濡れの儘立ち通しにて夜を徹したればなり。

八日午前四時、第一線(第〇大隊右翼)は攻撃前進す、第〇大隊は第〇中隊第一線、第〇中隊第二線にして、大隊長は第二線と共に前進す、之を以て中隊長(岡村大尉負傷中)は、第〇中隊長(小原大尉劍山にて)と協力し、又左翼第一大隊と連絡を保持し、小孤山東北角に向ふ。

途次汜濫に逢ひ之を徒涉せんとするに、深き身長以上なり、衆爲めに愕然少しく逡巡す、此時中隊長根本中尉は稍其上流に於て漸やく首を没するの深さの所を發見し、「涉れる々々」と連呼しつゝ率先之を過ぐ、續ひて一同の徒涉するや、敵之を知り猛烈に射撃す、水煙水音の揚擲中或は撃たれ或は溺るゝもの數知れず、此時に於ける千古の美談は第四章に於て詳述す、而して予の如き身長漸やく五尺二寸六分の小兵は、爲めに首を没して屢々吸水し、將さに危からんとするを第十中隊の上等兵彼岸より銃を差出し其庇護により無事徒涉するを得たり。

午前五時混淆して徒涉したる諸隊は、一旦小孤山東北麓に集合し、部隊の整頓を行ひ、確實に部下を掌握し、然る後靜肅に而も斷乎として敵の監視隊を驅馳し其散兵濠を奪うや、敵は「待ち設けたり御坐ンなれ」と言わぬばかりに、山頂の加農砲一閃火蓋を切つて彈丸の飛來急霰の如し、死傷續出流石に剛勇の小笠原少尉「ヤ、辻君タツカて堪るか」と土佐辯を振ひつ、敵の散兵濠を捨て予が占領する頂界線の後方に來る、同少尉は右耳貫通銃創を受け居るも至つて平氣さても剛毅なるかな。

此時我左方第〇大隊方面銃聲甚だ熾盛、而して汜濫の下流部に逢遇し徒涉困難の狀景也。

當該大隊の大隊長、長尾大尉(恒吉)濱田大尉(楠猪)水室大尉等其他多數の將士が戰死負傷したるは多く此時にして、如何に敵火の優勢にし陣地前に設けたる障礙物の効果多かりしかを察するに足る。而して此方面の戰況著しく發展せざるは實に一面地形の不利なると、一方には此正面に敵の機關銃其威力を逞ふせるに因る。恰も好し此時吾小隊は已に小孤山の東北部に位置し、第〇大隊方面の敵を側射或は斜射するの自由を有せり。時已に黎明、何物か二個の大なる黒き物あり、而して爆々たる音響、閃々たる火光は正さに敵の機關銃なることを知り、「しめたッ」と、予は雀躍「目標は斜左の黒き固物四百米突、急ぎ撃ちかゝれ」と射撃號令を下すや、正しく命中、敵は倉皇陣地を撤せり。續いて敵歩兵も亦交通路を経て一列側面となり退却す、之を射殺する我兵の勇氣百倍し一層沈著して射撃するを以て敵の死屍山をなせり、此時に於ける予等の感想は唯一つの愉快ありしのみ。

然れども山頂の角面堡に據る敵は頑として退かざるのみならず、我兵が寸影だに表はずや、或は狙撃し、或は霰彈を放射す、此際我白砲隊砲撃すれども命中不良にして、唯徒らに砲彈を浪費し、又敵の志氣を鼓舞するのみ。而して我兵の小銃彈は岩石を以て重疊せる敵の胸壁に反潑せられ毫も其効なし。

此間第〇大隊の全部は予等の徒涉したる場所附近より徒涉を終り、我左翼に連り攻撃準備の位置にあり、又今まで旅團の豫備たりし一部は、第一線増加の目的を以て前進中敵砲彈の猛烈なるため各個躍進をなしつゝありしが、敵砲は斯の如き小目標に對し榴霰彈の驟雨を降らし白烟其附近を掩ふ。

「倒れた。いや又起きた。一體誰れだ。」

と。予は双眼鏡を以て見るに、何うやら將校だ。確かに幸田中尉(健介)の様だと見えた。時又一彈、遂に同中尉を粉碎せり。

時に午後一時頃監視兵の報告に曰く、

「敵艦七艘我左側に現はる」

予は又直ちに双眼鏡を以て熟視すれば、果たして敵の驅逐艇なり、「何時も殿軍を務むる勇敢なる彼の四本橋のワッリヤック先生又候見へとるわい」と。而して漸次除行我側背に迫る其距離僅かに二三千米突。

電光一閃砲火を放つたなと思ふ間もなく、一發二發我隊の頭上に破裂するや、一同恭しく頭を下げぬ。幸にして我小隊のみは敵艦の砲撃に對し掩護せらるゝ好位置にあるも、其他

の諸隊殊に第〇大隊の如きは全部曝露し敵艦の好目標となり、松田中尉(五十二)及其部下の如き砲弾のため土烟と共に一旦空中に舞ひ上り、次に断崖より直下し、汜濫中に轉落するの慘狀を呈せり。

又敵艦は、今朝來の激戦により多數の負傷者小孤山東北麓に蟬集せるものを、我豫備隊とや認めけん、之を砲撃すること甚だ熾なり。片腕隻脚の傷士其砲撃を免れんとて其北麓に移るや、此時又本防禦線の諸砲臺より砲撃を受くること一層甚だし、之を以て原位置に復歸するや、又々敵艦の砲撃を受く。而して又歩行に堪へざる重傷者の如き實に器具或は徒手にて周章狼狽小穴を掘開し其身を土中に埋む、眞に此世の地獄なり。

ア、悲ひ哉此時悲鳴を擧げて救助を乞ふものありき。勿論彼等神經過敏となり、或は夢中なりしならむも、由來攻撃に勇敢なる我國兵士は防禦殊に稍不利の情況に逢遇するや、堅忍持久の性質に欠くる所なるを遺憾とす。予にも血あり涙あり、此悲惨の情況を目撃し轉た同情の念に堪へざるは五千萬同胞の同意を表す處ならんも、軍人にして他の志氣を粗喪せしむる如き悲鳴は絶対に擧げざるを要す。而して此の際に於ける予の同情とは抑も如何なるものなりしか。

「其處動くな」

と是れ予の絶叫なりき。「其處動くな」との一聲は甚だ無情なる要求なるか如し、然れども上官の命令は對絶に神聖に、而して注意や極めて周到ならざる可らず。然る後下級者の忠實なる義務心と崇高なる徳義心とに依り、茲に服従の美德を發揚するを得べし。

予の此一言に依り蠢動悲鳴せる幾多の傷士は、一齊に予の方に注目せり、而も砲弾は絶へず破裂しつゝあるなり。

茲に於て予は更らに一聲高らかに

「死んだ真似せよ」

と。此言を聞きたる木村特務曹長以下一同地上に伏臥すると同時に、又一發パンと破裂す、死んだ真似が真物になりはしなかつたかと予は大に憂慮せしも、幸ひに再傷者なかりし由。爾來敵は之に欺かれて一發も砲弾せず、意外の奇効を奏せり。蓋し之れ予が嘗て芝居大膽なる紳士或る悪漢に狙撃せられ進退に窮したる時不圖一計を案出し即ち死んだ真似をなし其悪漢の近づき止めを刺さんとすたるを俟ち忽然驟起して之を取押へたるものを見ても之は妙計なりと考へたることあり、恰も好此時不圖之を想起し、此場合に應用したるなり

き。而して彼の芝居は眞の彈丸も來らず、又止めを刺さんとするも皆空事なり、されは死んだ眞似も容易なるべし、然れども今や實戰也、彈丸は飛來し傷者又再傷を蒙るてふ危険悲惨の場合に際會し、死んだ眞似をなすは一寸容易の事にあらず、其之を爲す眞に服従の美徳にして、而して又眞の勇氣あるものに非れば能はざるなり。

斯の如く腹背敵を受け殊に敵艦のため苦めらるゝこと約二時間、此時芝乘沖遙かに煤煙の幾個となく襲撃たるを認む。間も無くゴォゴォと雷の如き響きありて何物か見るべからざる一物敵艦の附近に落ちて水柱を揚ぐ、續ひて四五本、是れ確かに我海軍の砲彈なりき、オ、オ、も遠くより撃つものかなと思ふ裡に、敵艦は艦首を回轉し旅順港内に隱遁せり、獨り例のワリリヤック殿りして悠々引揚ぐる惜さ、「此畜生奴！」と思はず空拳を振ふた。時に午後三時頃。

時來れり、機亦熟せり、午後四時聯隊長は第〇第〇大隊をして小孤山全部の占領を嚴命す、然れども第〇大隊は將校の殆んど全部を失ひ下士卒亦多數の缺損を生じ、機關の運轉十分ならず、爲めに先づ第〇大隊突撃の任に當り、第一大隊は現在位置附近より援護射撃をなすに決す。大隊長近藤少佐は中隊長を集め訓示す、其要旨に曰く

山頂に至る傾斜は頗る急峻、而して其角面堡は廻らずに鐵條網を以てす且つ之を守るの敵は頑強なり、之を以て之が突撃の任に當るもの素より生還を期すべからず、先づ猛烈なる敵火を冒し鐵條網を破らざる可らず。次に身を横へて胸墻下の階櫓とならざるべからず、而して最後に肉弾を投して敵壘を粉碎するの概あるを要す。然り而して此重任を完うする名譽の勇士は誰れぞ、蓋し皆然らん、然れども最初突撃に任する部隊多きに過ぐるは却て不利なり、故に各中隊(第〇第〇中隊)より小隊長以下約五十名の決死者を募集し、之に工兵若干を加へ、淺見大尉の指揮に任し、鐵條網破壊突撃隊とす、諸官宜しく本職の意を體し之を部下に傳へよ、終りに臨み其成功を祈るや切

と予此訓示を聞き血湧き肉動くの感甚しく、
「中隊長殿何うか辻を出して下さい」
と言へは小笠原少尉

「イヤ小笠原を出して下さい下さい辻君は大白山の時も出て居るから何うか小笠原を」

「イヤ小笠原少尉殿は現に耳に負傷までして居らるゝから今日は是非辻を」

と死を争ふ二人の兄弟、中隊長も余程困まつてありしが遂に予の懇望を容れぬ。

而して下士、兵卒は中隊内各小隊より平均採用することに内定せり、然るに決死志願の選抜に漏れたる予の部下は予殘留者の選定に困難せり依て已むなく一人子息、或は妻子あるもの等嘆歎して曰く、

「死なば諸共と誓ひてし一同今小隊長殿に見捨てらるゝは終生の恨事なり、况んや家累を顧慮せられたるか如き傾あるに於てをや、君の御爲め、國のため、家をも身をも打ち忘れてこそとの兼ての御教訓如何てか忘る可き、希くは我小隊(當時僅に三十八名)を基幹とし而して不足の人員を他小隊より採用せられん事を」

と情理共に正々且つ懇願已まざる彼等の精神實に賞すべく又愛らしからずや。依て予は此旨中隊長に上申し其許可を得て我小隊を基幹とし、他小隊より約十名よりなる一分隊宛及工兵若干の決死小隊を編成し鐵條網破壊の準備に著手す。

先づ食事なる聲に應じ、出るわ出てるわ道明寺粥の自然飲即ち氾濫徒渉の際浸水し日光と體温とにより自然に澎漲したるものや、ミルクにバインアップルの罐詰(小平島守備中、我海軍より惠與せられしもの)等陣中には珍無類の好物。

「それ一つ小隊長殿に」

「それ半分なれども分隊長殿に」

互に戦友に分與する勇士の眞情何ぞ床しき次第ならずや。午後五時、日將さに没せんとし西天晴朗、空は夕陽に影して其色彩名状すべからざる程美麗也。敵の銃砲彈(それは皆死に必要な旅銀)を忘れて嬉々たる勇士が末期の食事は實に之れ好個の一畫幅、予は此自然の美と人爲の壯とにあこがれて暫時恍惚たり。如何てか、この天地の壯嚴たる夕陽を拜まざるに居られやうか。

此時予は不圖兄の教訓「夕陽を拜め」と、そは落ち行く人に同情を表せよとの謂を回想し、執く予に詩歌の想足らざるを耻らいつゝ、駄句一句、

「夕陽を拜む弟の最期かな」

と日誌を取り出して鉛筆の走り書も今は昔、不思議に命長らへて之を公にする、おこがましきよ。

此時第○大隊長渡邊少佐は副官越智中尉(茂)を願ひ

「辻君は酒好きぢやねー」と問ふと、越智中尉は

「ハイ同好の士です」と答へた。

「どうだ君の成功を祝するために一献」と云つて大隊長はコップなみく注いで呉れる
思ひどおりし純日本酒に、胸を濡めさんとは。

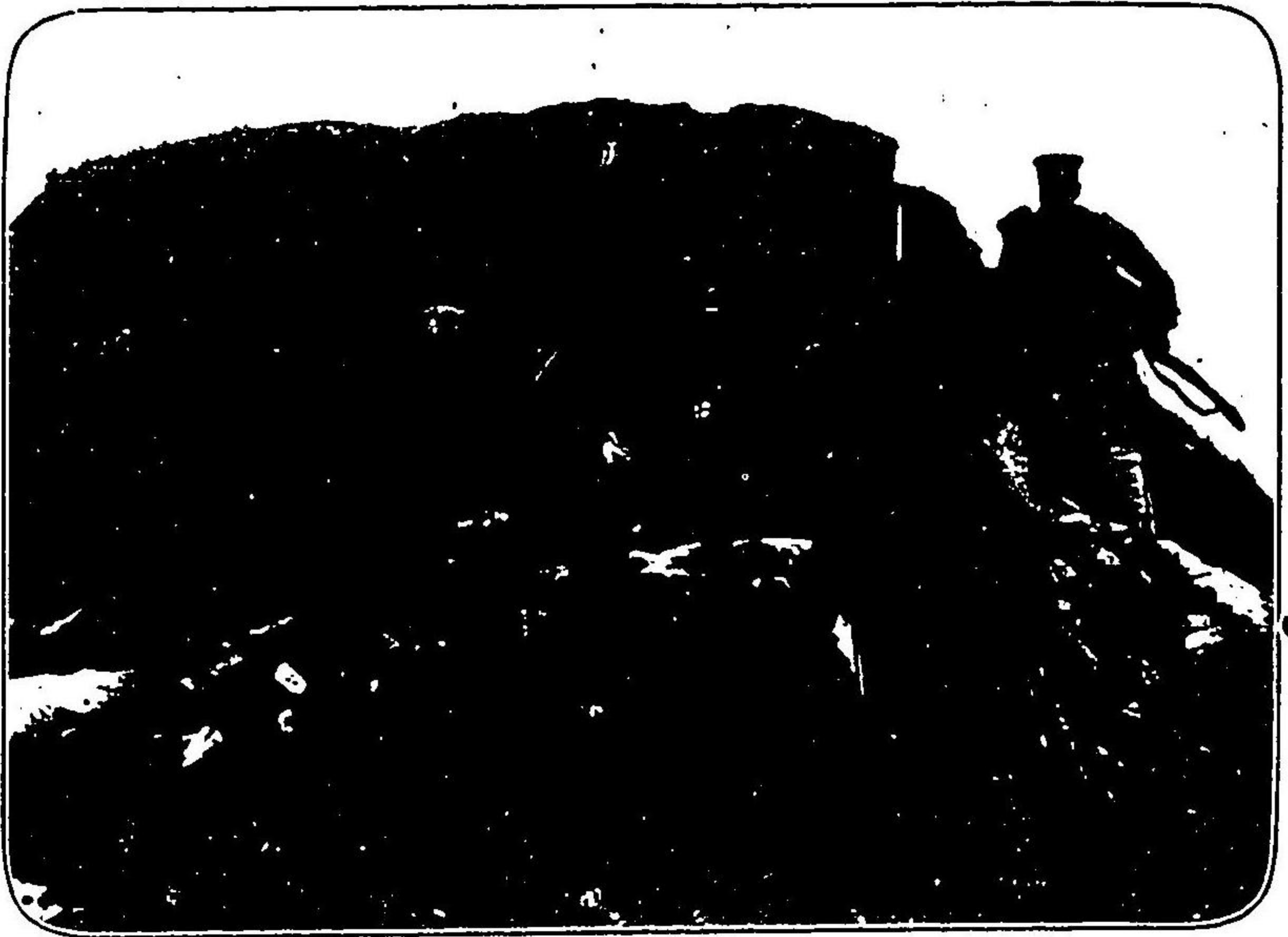
六發十二發大孤山上敵壘の上に破裂する我榴霰彈の白烟は、誰れにも壯快に眺められた、慾
を言へば予の向ふ小孤山にも尙少し猛烈に欲しかりき、去れど他の援助を缺く場合に於て
も毅然として勇進奮闘するは之れ歩兵の誇とする所、斷然前進を決行す。

茲に於て敵は頑強に防戦甚だ務む、鐵條網破壊の援護として先發したる島伍長(文八)の一
分隊は、敵を距る約五十米突附近に於て巧みに地物を利用し敵の出撃に備へ、以て我破壊
隊を掩護す。

此時予は破壊隊を指揮し、攀登、匍匐前進す、然るに常に予の前方に挺身して前進する忠
實勇敢なる上等兵島村猪源太。敵彈のため大腿軟部に貫通銃創を受け一度倒れたるも

「ナニニ大丈夫」

と叫びつゝ前進す、時に又一彈來つて上等兵の顔面を貫通す、之を以て鮮血迸つて滿面
朱に染み、慘言ふべからず、時恰も光彈の飛揚するありて一時皆伏臥す、依て予は從卒に命
し島村上等兵を綱帶せしむ、然るに彼は手を打振りつゝ敵方を指すは「前へ進め」の意にや



前へ前へと振り向いて

舉手注目の敬禮や

頼むさらばも口の中

言はぬは言ふに彌まさる

上下正しき瀕死境

あるらん、而して今や光輝の光焰漸やく滅盡せむとす、前進の好機逸す可らず、茲に於てが予「前」へと號令するや從卒は辛ふして上等兵の繃帶を終へて問ふ

「島村上等兵殿はドウしましやう」と予は單に

「前へ」と、

而して島村上等兵を顧み且つ慰撫して

「確つかりせよ今に仇を討つてやる」

と言ひつゝ去らんとすれば、今や呼吸も不調にアクアクと瀕死の境にある彼は、之を最後とや思ひけん、名殘惜しげに何をか言はんと欲して能はず、而して彼は遂に横臥のまゝ、
手注目の敬禮を施しぬ。

嗚呼何んぞ夫れ上官を尊敬するの偉大にして又從容告別の禮を行ふの正しき。蓋し心中期せずして相應するもの、人間終末の美風、傳へ以て千歳の美談とするに足らんか。

二 補充隊戦傷兵士の道避け

予不幸にして負傷し、入院後送の身となり、爾來内地留守部隊に勤務すること約半歳、此間聞くも麗しき美談。之ど實に敵前の働さにも劣らず、否敵前に於ける一生懸命の動作は敢て難事に非るも、諸種の誘惑情實の纏綿する内地に於て、而も一度戰場を蹂躪したる勇士を有する補充隊兵士にして一意専心、勅諭の御趣旨を遵奉し軍紀風紀を嚴守してこそ始めて軍人の面目を完ふしたるものと謂ふべし。

明治三十八年一月二日旅順開城我軍大捷の報一度公表せらるゝや、國民勸呼の聲は天に轟き地を裂くかと思はれ、或は提灯行列となり、或は祝賀會となる、其熱狂殆んど名狀すべからず。此間國家の干城と生れて少くも一度旅順攻圍に参加して今や内地に勤務するもの、心情果たして如何なりしか、予は實に其一人として多數の同境遇者に満腔の同情を表して思ふ、

「ア、不運の傷病者よ」
と又何をか言はん。

然れども戦争の前途は尙ほ遑遠なり、噫早く早く來れよ、再征の命、之れ予等か一日千秋の思をなして待ちたる喝望なりき。

斯くの如き四圍の状景に包まれ以上の感想を有する予は、或日留守師團副官吉永少佐（狂義）より師團長の命なりとて、丸龜城南に戦死者の遺族を訪問して善通寺に歸る途中、一小徑に於て兵士の外出せる一群に逢遇せり、而して彼等は自宅に行きしものか皆酒氣を帯へり、然れども敢て酔歩蹒跚の醜體なく嚴正に道路の一侧に避け停止して敬禮せり。

素より彼等は予の部下に非ず、又予と同隊にも非ず、然るに道路の一侧に避けたるのみならず停止して敬禮したるは、蓋し上官の通行を妨げざらんがためなり、予は直ちに其兵士等の善良なる品性に感謝して答禮し且つ次の賞辭を呈するを禁し能はざりき曰く

「威服、直屬上官に非ず、又一面識もなき予に對し停止敬禮したるは、此場合、至極適當なり、予は留守旅團副官なり、諸子歸營せば此旨中隊長に告げられよ」

とて別れたり。

此後暫時にして後方より來る車上の人、予の姓を呼ぶ、見れば善通寺盡誠舎長大久保先生也、先生は德行共に高く育英界の偉人として常に予の敬慕する人也先生車より降りて曰く、

「只今世にも珍らしき威心の兵士を見、誠に愉快に堪へません、それは直ぐ此後方に於て三名の兵士に逢遇し下車せんと考へしも已に先方に於て道路外に避けられたるを以て、

勿體なく感しつゝ、車上のまゝ脱帽し行過ぎんとする途端、一方の車輪、深き凹部に嵌入り容易に脱出する能はず依て下車せんとするや件の兵士は「宜し」と一聲、直ちに車の後押に盡力せられたり、茲に於てか如何にもと深く感動し下車して厚く御禮を申上ました、近來、軍人に非れば夜も明けず日も暮れざる今日、聊かも粗暴倨傲の振舞なく地方人に對し唯に道路外に避けたるのみならず、他人の困難を見て弱さを助くる其禮儀、實に肝に銘し軍隊教育の注意周到なる事敬服に堪へません。」

と依て予はうらははつかしく
「否、其れは皆先生の高德が然らしむる所、且つは又國民教育の普及に基かん」と語り了つて別れを告げぬ。

此事たるや、其原因する所一にして足らざるべし、然れど戰時補充隊の教育多端、且つ人員増減瀕繁なる秋に際し、穩和謙讓勝つて誇らざるの美風を養成振起したる、九龜歩兵第十二聯隊補充大隊長の(久野)教育方針は予の大に敬服したる所にして、予は本件を時の留守師團長兼旅團長(波多野)に上申せしが、直ちに喜んで採用せられたり、且つ予は終生の好教訓を受けたるを感謝し予の修養帳に記載しぬ、

以上述べたる事實即ち島村上等兵の舉手注目と補充隊戰傷兵士の道避けとは時と場所を異にするも、共に衷心上官を尊敬し、又公衆に對しては穩和謙讓の美德を發揚したるものにして、予等軍人の好活模範にあらずや。就中公徳の養成は戰後の軍人に一層の必要を認め、予自ら其修養に務むるは勿論、之を部下に教育し、而して動もすれば醇朴恭謙の美風を沮害せむとする世間に超然邁進せざる可らず。

第三 軍人は武勇を尙べし

一 今武藏宮本上等兵の剛勇、徒手鐵條網の抗を引抜く

時維明治三十七年八月八日午後六時、前記瀕死の境にありて舉手注目之敬禮をなしたる島村上等兵其他數十名の死傷者を出し、殘餘の勇士を率ひ潛行遂に小孤山角面係の周圍にある鐵條網に達す。流石は工兵直ちに破壊器具を携へ先進破壊に従事するや、山頂の備砲より發彈を浴せかけられ一溜りも無く即死重傷を蒙る。又山川抑附近にある我白砲隊は熾んに大、小孤山上の敵を砲撃するも時に、偶々我破壊隊内に落下して味方打に遇ふものあり、知らぬが佛の憐れさよ、美軍敵陣に殞れしと思ふこそ、されど予等は此際肝銘すべき戰術

上及び精神上の一大原則あるを忘れざるを要す曰く、

「決して我砲彈の命中不確實、特に味方撃を恨む可らず」

何となれば設堡陣地の攻撃に際し突撃の瞬間、我恨彈のために若干の味方撃は如何に歩砲連繫を確實にするも絶対に免る可らず、况んや敵陣近く作業するに於てをや、之を以て他の過失を恨む如き未練の根生を放棄て、先づ自己の本領特質を發揮奮進するに如かず、此時に於ける味方撃の一彈は宜しく予等歩兵を勇進奮闘せしむる鼓勵の福音と感謝するの善意を要す、然り此原則は唯に予等將校のみならず一般兵卒に至るまで知悉觀念せしむべし、然るにこの觀念、經驗なき予の部下は、思はずして砲兵の悪口をなしたりき。又角面堡の敵は我が隊が多火の損害を蒙りつゝあるを察知してか、豪然胸牆上に半面を露出して射撃す、「如何にも横着千萬生意氣なロスケ奴」

「急ぎ打ちかゝれ」

と令し、暫時射撃するも斃るゝもの一人も無し、距離僅かに二三十米突の最近距離に於てこの結果は何事ぞ、如何にも残念なと思ひ居る矢先鐵條網をクハリ抜け胸牆内を偵察し來りし西岡一等卒の報告に曰く

「胸牆の上にある敵は皆死人であります」

と敵はかくして我を欺き彈藥を浪費せしめんとす、楠公の葉人形の奇智に摸したるならんも、自國のため奮闘したる死者を標的に代用したる所、流石は露國式なり、

此間敵は絶へず探照燈の死角内を照らすため光彈を飛揚し、又其絶滅間敵の小銃彈の岩石に中つて跳飛する其音、其光景槍妻と言ふも恐かなり。而して敵の小銃彈に斃るゝものは敢て珍らしからざるも、茲に異様の戦死を遂けたる軍曹藤村長太郎其人は、之れ迄最も勇敢に健闘したる我小隊の最古參の分隊長なりしが、哀れ無慘敵の投棄せる十字銃のために其頭部を貫通せられて即死せしとは。

「臭い〜」

「ウム臭い〜」

「ナンダこれはこれは」

と臭いて思はず苦笑す、豈計らんや敵は空鐵詰の中に滋養物の殘骸即ち糞を填實して之を投げ付けるの奇計を案出したるなり、流石の我兵も之には閉口閉鼻閉息せざるを得ない。此他敵は大なる岩石を轉落し、爲めに或は頭部を碎かれ、或は手足を切斷せられ、多大且

つ悲惨の死傷者を生じ、我軍の志氣沮喪今や其絶頂に達せり、
此時驟然として起ち、猛然として奮進し、徒手鐵條網の杭を引抜かんとする勇者あり、
「エイ、エイ」

の懸聲勇ましく恰も眼前に敵あるを忘れたるものゝ如し、然り、真に然り、彼は、君の御
爲め、國のため、身邊に夥多戰友の戦死重傷を見ては敵をも妻子をも打忘れ身を捨てたる
なりき、無鐵砲かア、無我よ

予は我を忘れて一聲

「宜しい誰れだッ」

「宮本上等兵であります」

と答へつゝ、彼れは一生懸命尙ほ杭を動かしつゝあり、予は彼の拔群なる勇氣寧ろ一同を
して驚愕に値せしめたる大膽不敵の動作と、彼が答へたる宮本なる姓が如何にも一種の強
き印象を以て予等の耳を聳動しぬ。

此瞬間予は仇敵討を以て有名なる宮本武藏の武勇を想起し、彼と其對照の妙なるに感動し、
即座に予は彼を激賞せり曰く

「天晴れ天晴れ、宮本上等兵にこれより今武藏の勇名を與る。實に昔の宮本武藏に優るぞ」
彼は此の一言に勵まされ、頓に百倍の力を増しけん不思議とも不思議、鐵條網の杭四、五
本一時にメリメリと音して引抜かれ、同時に彼の身體は地上に倒れたり、而して彼は敵
砲彈のために爆煙を以て掩はれぬ、

「小隊長殿杭が抜けました、抜けました！」

と連呼す、快絶一而し予は今の砲彈氣に懸りて、

「宜しい、負傷はないが」

「少々、併し大丈夫！鐵線鉄」

と絶叫す、

茲に於て從卒中田喜代七、鐵線鉄を死せる工兵の手より取り進んで鐵線を切斷す、續ひて
松浦一等卒(和平)宮本上等兵の二の舞を演し是亦杭を引抜く事約四、五本、
抜きたる杭に纏結せる鐵線は中田喜代七之を切る。

斯くして突撃隊の鶴首して待ちたる幅約二米突の破壊口を得たり。よもやと思ひし鐵條網
の抗が引抜かれたる所以、素より小孤山の地質岩石交りの脆弱なりし點もあるべし、又此

際伴ひにも山頂角面堡内よりする霰彈盡きたる儼伴もあるべし。されど敵の小銃彈、轉石、投器は勿論、旅順要塞防禦首線よりする砲彈裡にありて、加之我軍多大の死傷者を生し志氣沮喪其絶頂に達せるの時に際し、卒先神的行为を敢てし遂に身に重傷を蒙るも屈せず、破壊隊の重任を一身に擔ふて辭せざる彼宮本上等兵に、今武藏の勇名を冠せしむる、蓋し至當ならんか。

彼の大勇は唯に之に止まらず、重傷の彼は已むなく内地へ後送歸還の身となりしも、出征軍の補充逼迫を告ぐるや、又卒先創痕を衰み、再征を志願し、遂に後備歩兵第四十三聯隊に編入を命ぜられて出征せり。

平和克復無事凱旋したる彼は、論功行賞發表の曉、筆頭に殊勲者の一人として功七級金鷄勳章勳七等青色桐葉章を賜はりぬ、豈光榮ならずや。

二 祖谷平氏の孫平山二等卒(國三郎)の沈勇、外套を下ろして銃に枕さす

附 劍山戦争の概要及滯陣中の慰勞

劍山は旅順と大連の中間に位し、小孤山道上に屹立する標高三六八米突を有する最高の峻

山にして東は大連の策源を制し、西は旅順要塞を睥睨し、之を領有すると否とは彼我戰機の發展上至大の關係を有す。

明治三十七年六月廿六日我師團日露戰役の初陣に於て、徳島健兒を以てなる我歩兵第〇〇

〇聯隊は、最初師團中央縱隊の前衛となり猪圍子溝附近に達して開進す。

「大隊縱隊、第九中隊停止ッ」

「中隊止まれ、左へ中隊縱隊進め、」

何處よりも見へず、バツと一東彈、我中隊の前面に 塵を飛揚す、

一同思はず知らず膝委く「悪しく言へばヘコ垂る」とは言ふもの、予も敵彈に逢ふのは今がめて、瞬間異様の感生じけれ

「ハァーこゝだな」

と密かに袂より鏡を取出し、人知れず予の顔を寫し見た、之は予が士官學校在學中戰術教官穴戸歩兵大尉(省三)の教訓に基きて鏡を携帯し、正かの時に反省すべく用意せしなりき。幸に性愚鈍の予は別に顔色の變化を認めず、そこで後に向ひ部下の心氣を一轉すべく、

「ハッハハハハ」

と例よりは一層聲高く笑ひ

「サア、こゝだ一つ罌丸握ッて見よ、ハッハ、小便に行きたいものは行つて来い」と諧謔すれば、衆始めて笑ひ出し、戦友に銃を托して互に用便せり。

かくて第〇第〇大隊は、剣山頂上第〇大隊は其南麓の敵を攻撃す。

敵は剣山の頂上に、砲二門及歩兵、其南麓一帯の高地に機關銃其他歩兵を以て頗る頑強に固守す、此時我〇大隊は剣山の最高部に向ひ攻戦前進中、第十一中隊の正面に白煙濛々として恰も白馬の狂奔するが如く、西より東に走り爆發す、南無三地雷に掛つたなと思ひさや一名の死傷者も無く、無事之を免れたることの愉快さよ。

又同隊より出たる決死の斥候五名は、地雷の調査として先發し山頂附近に達し、大なる日の丸旗を打振り打振り異状なきを信號す、此時敵砲は我砲兵のために全く沈黙せしめられ、其威を逞よする能はず。茲に於て第三大隊は敵の小銃火を冒し、苦戰奮闘遂に頂界線と占領す、而して思はず萬歳を連呼するや、敵は待ち設けたるものゝ如く、其收容陣地より一斉射撃を連發す、此時敵陣に殲れたるもの野口大尉(丈一郎)小屋大尉(孝藏)を始めとし其他數十人、之れ蓋し敵陣を占領したる際著大の目標を曝露したるに依る、之を以て倉

皇委勞を低くして此敵に當る。

然るに剣山山頂は岩石鋸齒刃の如し、部下の射撃するもの皆銃を直接岩石上に依托す、此時獨り悠然として外套を肩より下ろし之を岩石の間に置き銃に枕さして射撃するものあり、其動作如何にも敵陣中と見へず。

是なん平時遲鈍を以て中隊一の評ある平山二等卒(國三郎)其人也。

平山二等卒は平氏の子孫及桂橋を以て有名なる徳島縣祖谷の生にして實際遲鈍なりき、然れども性質至つて正直理解頗る遅き代りには一度覺へたる件は容易に忘れず、又時と場所の如何を問はず動作に二なく表裏なし、之れ彼の特長とす。

彼が剣山の初陣に於て一頭地を抜きたる戦闘法は眞に彼の沈勇の致す所、平素彼を目して遲鈍の代表者としたるもの蓋し顔色なけん。

之を以て予は、部下に命じて打方を中止し、平山二等卒の沈勇を賞讃し、彼を模範となし射撃を開始せしむ。

効果空しからず我射撃の命中頗る確實となり、敵は遂に其陣地を撤するの已むを得ざるに至れり。

彼平山二等卒の沈勇は唯に劍山占領に與つて多大の功績ありしのみならず、爾來岩石多き滿州山地の戦闘に於ける依托射撃の活模範を示したるものと言ふを得べし。

夫れ歩兵戦闘に於て戦闘經過の大部分を占むる大戦をなすに當り、慧敏にして不沈著なる射手よりは、寧ろ遲鈍にして沈勇なる射手を要求すること甚だ切なるを實驗せり。

此間我第二大隊方面の戦闘は尙酬にして、殊に第六第七の苦戦は言語に絶す、茲に於て山頂にある我大隊は距離稍遠かりしも敵の頭上より援助射撃を與ふ、又右縦隊より砲兵の掩護射撃は頗る有効にして劍山南麓の敵敗退の一因となりたるもの如し。

「ヤツ威心々々ロスにも威心な奴が居るわいアツ二人とも斃れた」と予は思はず、獨言しつゝ双眼鏡を以て熟視す、從卒問ふて曰く

「何んでありますか」

「ウム、敵が一人負傷したんだ。それを戦友が後へ戻つて来て自分の肩に手を懸けさせ、

二人抱き合つて逃げ居つたがトゥ〜二人ともヤラレタのだ」

「ア！追撃々々第二大隊が追撃に移つた」

と、勝戦を高い山から見物するのはさて愉快なもの、眞に爪や薔子の花盛り所にあらず呵々。爾來七月五日に到る間、我聯隊は劍山を守備す、此間敗殘の敵將はスツテセル公よりひどい御目玉を頂戴し、劍山を取り返しに御出なさつた其猛烈と、巧とは聊敬意を表するに足る。

七月三日劍山頂を守備する第一大隊の幕舎上に、八發拾六發と榴散彈の白煙は美事と言ふては失敬ならんも當時の予等から見れば實際見事であつた、處がオハチは廻つて我頭上にパトンと音して破裂す、一同恭しく頭を下げて暫し言葉なし笑止々々。

六七苦戰時附近にありし我砲兵始めて對戰したるも暫時にして敵のために沈黙せられぬ、否今や彼と對戰するは左まで効力なきを認め砲撃を中止したるなりき。此時島内少尉(武美)以下負傷戦死者あり、今度はオハチが酒保のある家屋に廻つた、流石は酒保商人金より命が大事と尻に帆懸けて走つたとの事、此時酒保品に損失ありしや否や知らざれども他山の石以て鑑むべしと信じ茲に露軍の状態を左に附記せん。

露兵の狂醉(胡朔隊に於ける從軍記の一節)

三月三日曙光は美はしく發出せり、燦爛たる辰星漸く其光を失ひ、彎月の斜めに西天に

懸るもの尙ほ少しく光明を放ち、而して雪は薄く地上に布きて曖々曙光を反射せり。……蘇胡停車場に於て予は、未だ曾て見たることなき光景を見たり。即ち「フツカ」酒、罐詰類、其他各種の食料品の到底制裁を加ふに由なきを以て一般兵士の恣に飲食するに任せられたり。數日間僅少の携帯に糧の他、何物をも食したることなき數千の兵の内に開放せられたる此の襟察し得て知るべし、恐る可き人間の潮流四方より此一點に向つて流れ來れり、多くの者は直ちに數十個の罐詰を運び去れり、或者は直ちに座して罐を開かんとせり、或者は此の一週間にも食ひ餘る程の罐を開けて樂めり、然れども彼等は罐詰を見たる計りにて大に狼狽し、之を開く際誤りて其指を傷くるをも知らざりき。

然れども非常なる光景は「フツカ」樽の邊りに現はれぬ、銃劍軍刀等を以て酒樽の攻撃を始め、之かため自ら負傷したるもの十數名を生じたり、斯くて狂せる如き一群其周圍に集まり、或は其口を直ちに樽に附くるあり、或は空罐を以て之を吸み來るあり、或は其傍に落下し來る日本砲彈を以て飲めるもありき、赤帽を被りたるオーレンブルグの一人、斧を振つて鏡を破り、勢に乗じて立ところに數樽を開きぬ、赤帽胡胡の狂ふ状態、カ

ライルの有名なる句を想ひ起さしむ。

樽の破れたるがために溢る「フツカ」は流れて他の處に充ち、人は脆きて其泥酒を飲めり。

ア、純潔なる日本人諸賢よ、諸賢は、之を讀んで嘔吐を催さるるか、或は眉を顰めざるものあらざる可し、若し斯く無きは純日本人にあらざるべし。

或者は手にて之を掬ひ、或者は之に口を附けたり、ブリヤ胡胡、高加索兵、綫銃兵、龍騎兵、其他雜多の兵種皆、此處に集まれり、而して附近に燃ゆる家屋の燄と烟りは之と相對して、宛然一個の小地獄を見るが如し。

酒は今全く人を狂せしめたり、或は妄りに笑ひつゝ、強いて他人に食物を與へんとし、又或一人は其不潔極まる手にて茶を吸み來りて、手に飲ましめんとせるものもありき、將校は叫び其部下を取締らんと試みたれども、其命の奉せられざるを見て手を顧みて「いや軍紀風紀などは何處かに去りぬ」と嘆きぬ。

ア、若しこれが日本の將校なりせば、此際切捨つるならん、併し予は我軍にかゝる狂暴者あらざるを信ずるが故に、讀者諸賢は安心して可なり。

元來露兵の喜ぶ所以のものは前日までは、番兵に立ち居り自己は、唾を流しながらも一指たも之に觸るゝ能はざるものありしが、今其自由になるを得たればなり、神の十戒が俄に撤去せられたるが如き心持すればなり……

予は愛蘭土生れの者なるを以て快樂を得んが爲めに人の飲酒する心はよく了解せり、然れども予は未だ曾て此の群集の如き陰沈たるものを見たることなし、酒を飲みて人は陽氣になるものなるに、此等の露兵は僻狂となれり……云々

と、以て知るべし、「武士は喰はぬと高揚子」の高雅なる精神のなきものは往々かゝる狂暴を敢てするを。

さて、露軍砲彈の次に來るものは敵の歩兵なり、予等敢て恐るゝにあらねど、防禦はイヤ演習の防禦は樂なれど、戦鬪の防禦は中々容易ではなし。

果然戦隊は攻勢に轉ずるや、敵は樂を奏して來る。依て進軍を中止して退却しぬ、此時第二大隊長木村少佐敵彈に一眼を負傷しぬ。

驟雨沛然として來り、電光閃々雷鳴轟々たるの夜、流星はロス君、夜襲と御出てた、其中

最も勇敢なりし露軍の行動を記して劍山防禦戦鬪の局を結び、滯陣して勞を慰めんか。

敵の決死斥候四五名は襦袢袴下一枚となり、劍山頂上戦第一線を潜り抜け、我が大隊本部目懸けて突進す、時に大隊長渡邊少佐(小太郎)は第二線中隊長を集めて密議中、天幕を通して一閃何物か肘と胸との空間をかすめて過き行さぬ、竹村大尉(繁木)はこは敵と悟りて軍刀の鯉口三寸寛ぐや既に遅し、無慘にも、敵劍に胸部を貫かれて即死せり。噫劍術に堪能なりし竹村大尉の無念思ひやるだに哀れなり。

之に反して敵の心や如何なりけん、富士の裾野に會我兄弟が阜月闇に松明ともして、こゝかしこ假家間近く忍びいり、難なく敵を討ちたるにも比して壯なる哉と思へしにや。されと大局は當低動すへからず敵は遂に劍山の恢復攻撃を斷念しぬ。

劍山戦鬪の死損者

×、上石本政一、

○一、長瀬利八(兄弟三人皆日清日露の兩戦役に陣没す)

十一、山内辰二郎

×一、白川菊太郎

劍山命名の由來

徳島健兒を以てなる我聯隊日露戦役の初陣に於て頑強に固守する敵を撃退して之を占領し攻圍作戰の進捗に與へし功績著大なりとし、時の軍司令官乃木大将より永く聯隊の名譽を表彰するため此高地を徳島の名山に因み劍山つるぎやまと命名せられたり。

去る六月廿六日より七月五日に亘る戦闘に於て獨り大に奮闘したる我聯隊は、慰勞休暇との積なりしが、夫々第二線勤務を命ぜられ、我大隊は左翼第〇〇聯隊の豫備隊として北河口に滞陣しぬ、一戦而も花々しき初陣に於て攻撃防禦の兩戦争の味を知りたる吾將士は、戦は攻撃に限る縦令防禦の位置に立つ場合と雖も機を見て逆襲に轉するの絶對に必要なるを認めき。

「嬉しい、辻君歸つて來た、歸つて來た」

と、喜色満面の阿久津小尉は其後懇願して遂に戦線の小隊長として出づるを許されきと。

「ヤー！あめてとう、ウムとうか、ウム」

と予は彼と共に恤兵品の正宗を傾けて握手しぬ。

「評判が宜いぞ、評判が」

「然うか何の評判が宜いのか」

「ウム、師團で、我聯隊が中々勇敢にやるチユエ」

「オーそるか併し實はおはづかしい位だ、評判滿作でハッハ……」

時に一人の兵士拍子木を打ち群集に取巻かれて

「エー東西々々戦捷祝ひとして今夜六時より北河口、戦捷座に於て演藝大會を催しまする
て東西々々南北の諸君子方賑々しく御光榮あられん事を、念のため申上ます木戸錢中座
總てロハの事、終ッッ

と眞面クサツて口上述べ立てたり。

其夜行き見ればトタンの座板に天幕の屋根、陣中の戦捷座は總てこんなものなり。

口大鼓に口三味、一盃機嫌に高座に上ほつて呻るはそも何ぞ、琵琶あり、謠あり、義太夫、浪花節、都々逸詩吟は勿論、キンキラ節、元録節、サノサ節等百出し、硝煙彈雨の巷に時ならぬ春風の胎蕩たるを覺えぬ。満堂の諸兵噲々としてサモ愉快に堪えざりしが如き光景は、今も予が眼前に髣髴たり。

第四 軍人は信義を重んずべし

一 重傷の従卒中田喜代七小隊長を觀音脊にす

小孤山頂南面堡の周圍に繞らしたる鐵條網は、今武藏の勇名を轟かしたる宮本上等兵、其他の武勇により、茲に漸く一條の突撃路を開設するに至れり。

此時鐵條網破壊兼突撃隊として同行したる松井少尉(榮雄)及中村少尉(爲一)の小隊は、共に小隊長人事不省の重傷に陥り、殊に松井小隊長の如きは生存者僅かに五六名(約十分の一)を残す、而して此各小隊は今や混淆して指揮甚だ不便、突撃の號令下すも、予に隨從するものは常に予の身邊にある數十名のみ。

然るに寸時も傍を離れざりし従卒の姿見へず、はてなと驚き、

「中田々々」

と聲限り呼べども更に答へなし、暫らくして微かに、

「小隊長殿」

と叫ぶ聲、予の耳に達す、予は彼れ亦敵彈の犯す所となりしを察し、今や光彈の飛揚せざるを幸ひに、部下に停止を命じ、予は四五歩後退して自づから彼を見舞へば、彼れは

「アンマリ痛ふございましたから一寸吃驚しました」

と云つて苦笑を漏らせり。

彼れの負傷は右上膊貫通銃創(骨折兼神経痛)にして、其餘彈を以て胸部を擦過せり、依て予は彼れの繃帶を以て繃帶せしも、傷所大にして繃帶足らず、そこで取敢へず戦死者の繃帶包を取り、之を以て彼れに施し且つ彼れに假繃帶所に到る可きを諭せども、彼れは我軍の成功を見るか、然らざれば小隊長殿の屍を負ふて歸らんとて頑として動かず。

「宜しそれでは暫らく待て」

の一言を残し、光彈の消滅間を利用し突撃す、急斜面の事とて勢好く走つて突き込むに非ず、敵は突撃路の開設を察知したるもの、如く、彈丸の雨飛又もや猛烈なり、之を以て突撃路は忽ちにして死屍積んで堆かく、眞に血路と急變するの慘狀を呈するに至れり。時に一人先進して敵の胸牆に飛付きたる島伍長(文八)は、敵より銃劍を以て突き落されコロ／＼轉んで我隊に近づき、戦友の劍尖に引き懸かつて、あへなくも戦死を遂ぐ。

此時幸なる哉、増援隊として小笠原、山崎の兩少尉、各其小隊を率ひて来る、茲に於て突撃隊の指揮漸く恢復す、依て予は此期を利用し増援隊に援助射撃を依頼し、最初編成の突

撃隊たる第〇第〇中隊を集合し、愈々最後の思出に予秘藏の懐中武蘭を部下に分配す、時に

「私は第十中隊であります」

と、暗夜に遠慮する正直者あり、予は

「此際他の中隊の者などの原別は無用、これより極樂浄土に同伴するんだ」

と、一盃機嫌にて呵々大笑すれば「私にも」私にも」と、末後の一滴を味ふ可憐さよ。

かくして突撃隊の志氣を興奮し、喊聲を發して突入す、予素より突撃隊の先頭にありて、今や鐵條網内突撃路に積堆する屍を踏み越へ、踏み越へ將さに鐵條網を通過し終らんとする刹那右肩胛背部に一打撃れた様の痛を感じたりしか、之と同時に振り持ち居る抜刀、右手と共に下垂れる、負傷なるか、さりとて痛は背部なるに、と思ふ間もなく何時しか停止伏臥し、唯生汗の額に滴出するを覺へ、喝を催ふすこと切なるの後は、千歳の恨事人事不省の身となる噫！夢か、現か、幻か、否々、予は正に人の脊に観音様の如く脊合に負はれるが如し、脊負ふ者滑べつて同時に予は地上に落つ、而して肩胛部に疼痛を感ずること甚だし、熟視すれば予の上半身は繃帯を以て包まれあり、茲に於て予は始めて負傷したる

に氣付き予を介抱する者の誰なるやを見廻すたるに、豈圖らん從卒中田喜代七ならんとは。依て予は先づ

「角面堡は取れたか」

と尋ねれば彼れは

「未だの様です」

と答ふ、予は

「ア、残念々々」

と狂動す、忠實なる從卒は彼れ自身の重傷を忘れて、予を看護す、而して予が人事不省後の状況を聞くに實に左の如し

予の負傷は、右肩胛部(稍肺に)貫通銃創にして出血甚だしく、爲めに小笠原少尉は予を重傷者として一人の輕傷者に命じ、假繃帯所に送致せしめたり、其途中先きに負傷したる從卒は其予なるを知り、輕傷者と共に予を敵に面せしめ、予を觀音負にして斜面を此處まで下り來り、而して貫通銃創の痛は彈丸の出口に強く感ずるものなり

と語る、予は

「ナゼ敵に面して脊負ふたか」と詰ぬるに彼は

「ハイ兼て小隊長殿が、どんなことかあつても決して敵に脊を向けてはならんと仰しやりましたから、我々雑兵は兎も角小隊長殿が脊面から敵弾を受けては申譯ないと考へまして」

と、茲に於て予は彼が信義を重んずるの如何に深厚にして、其注意の周到なるに思はず落涙せり。嗚呼戰場就中、斯の如き状況に於ける予と従卒の關係情誼は、曰はく言ひ難く、味ひ得るものは、唯それ此經驗ある者のみならむか。

然り而して平時予が依頼せる「死んでも敵に背を向けてはならぬ」との誓言を、又敵陣中は勿論の事な、身重傷を負ひながら屍を負ふて歸らんと誓ひし言を空にせざりし忠實無比の従卒中田喜代七の信義に誰れか感涙を催ふさざる。

夫れ「信トハ己ガ言ヲ踐ミ行ヒ、義トハ己ノ分ヲ盡スナリ」との 勅諭を實踐し予をして再び戦線に立ち奉公するの今日あるに至らしめたるもの、實に従卒の信義に基かずんばあらず。

二 勇士の情死、銃を抱ひて汜濫に溺る

附 小孤山戦闘最後の概況

明治三十七年八月八日晩第九、第十中隊先頭にて小孤山下の汜濫を徒渉するに際し、敵の探知する所となり、猛烈なる射撃を受く、爲めに水烟飛揚し水音鳴動す、水深く首を没する汜濫中、或は撃たれ或は溺るゝもの甚だ多し、此時に於ける千歳の美談は實に軍人が信義を重んじたるの實證とす。

八日午後四時頃、我軍の工兵が敵の銃砲弾を冒して汜濫の端末を切開し、其水量を海中に移流せしむるや、無慘にも、河底より幾多の死屍残露す、其中に一意専心銃を放棄せざる事に留意したるもの、如く、死傷者は勿論、全く溺死したる者と雖も一人として銃を抱き居らざるものなし、嗚呼を言ふは易く行ふは難きものなり、况んや生死の巷に浮沈しつゝあるの時に於てをや。彼等が銃器を愛護するの精神充溢したるに基因すべしと雖も、抑亦彼等が「信トハ己ガ言ヲ踐ミ行ヒ」との 勅諭を實行したる信義の結果たらずんばあらず、蓋し「銃は死んでも手より放たず」とは平素彼等の口にしたる所なればなり。

予は斯の如く信義を重んじたる忠死者を發見したる軍旗の下に棲息するを光榮とす。然り而して軍人精神の大部分を發輝したる小孤山戦鬪の最後の景況は如何なりしか、予は遺憾ながら目撃するの名譽を有せざるも、林中尉(迎寛)其他の先輩より傳聞したる所によれば實に左の如し。

第二回の突撃をなしたる小笠原、山崎兩少尉は共に重傷し、其部下亦全滅、第三第四回の突撃も功を奏せず、第五第六回の突撃に於て、白井大尉。中田中尉戦死、野口中尉(矯)入江中尉(九郎)岡崎少尉(守余)野上少尉(繼志)負傷し將校の殆んど全部を失ひたる諸隊は今や寂として人なきが如し、此時林少尉(迎寛)は其小隊を率ひ突撃を決行するに至り、途中幾多の士卒立錐の地なきまでに伏在す、依て諸隊の將士は憤滿の色を表はし、

「ナンダ決死隊なんて、ヘコ垂れチャツて、サア一所に突撃に進め」と呼べと起せど答なし、こは如何にと熟視すれば慘たる哉、皆屍體のみならんとは。

「それは皆死んで居ます」

と虫の音の如き聲にて、痛を忘れて死者に同情を表するに重傷者、今にも息の根切れそくな兵卒なりけるよ。

「第五中隊豫備一等卒中山崎之助今より先頭す」

と突然大音聲に呼ばわりて、屍體を押し分け踏み越へ道に胸墻下に達し今や突入せんとする時、林少尉亦重傷を蒙り立つ能はず、

茲に於て窮鼠猫を食むの類か、指揮官なき士卒は各自に躍進して敵の胸墻下に集まり無言の行をなす者數十名に達す、此時敵は彈藥を消費し盡したるものか一發も射撃することなく、遂に銃、銃劍を放つて吾軍を殺傷せんとするあり。

銃劍突撃それは日本の獨特の格闘戰機熟したりと見て取つたる一兵士、

「敵に彈丸が無い突き込めワツ」

と一齊に而も不意に足許より鳥の立つ例への如く屍の起き上がりしこととて、流石の敵兵吃驚仰天尻餅を搦きしや否や予之を知らず、されど我兵の銃劍將士に敵の肉に達せんとするときは未練にも銃を捨て、跪居合掌するは是れ降伏の意か、將た又從容天に禮拜するの状か、そんな事の明る筈もなければ一刺殺す。

劍術教範に曰く

竹刀(木銃)ヲ放墜セシモノハ敗者トシ、之に對スル敵手ハ擊突ヲ行ハザルモノトス、但シ

其ノ瞬間ニ於ケル一回ノ撃突ハ此ノ限リニアラス」と
 眞に然り決して敗者を故意に殺戮したるに非ず、實に瞬間に於ける一回の刺突なりしなり、小孤山の占領は斯の如く貴き血と銃劍の力に依り得られたり、時に九日午前三時。嗚呼我攻撃軍の數回屈撓せざる突撃の猛烈果敢なりしは言はずもがな、小孤山を枕に討死したる敵の頑強沈毅も亦大に賞すべく又大に敬すべき所ならずや。
 九日敵は奮然として小孤山の恢復攻撃に前進し、我軍防戦甚だ努めたるも、阿久津少尉の壯烈なる戦死、淺見大尉(新六)杉原中尉(信一)龜井少尉(駒三郎)小野中尉天野少尉等の負傷に依り一度敵に盛り返へされたるも、聯隊長は自ら豫備隊と共に軍旗を押し立て押立て遂に又之を取り返へす、茲に於て小孤山の占領愈確實となる。

感 状

歩兵第四十三聯隊

明治三十七年六月廿六日ノ戦闘ニ於テ、劍山ヲ攻略シ爾來屢々敵襲ニ對シテ之ヲ固守シ八月七日ヨリ九日ニ亘ル小孤山ノ攻撃ニ際シテ敵火ヲ冒シ峻崖ヲ攀テ損害ヲ蒙ルモ更ニ屈セズ遂ニ同山ヲ占領セリ爾來屢々敵艦隊ノ猛射ニ耐ヘ數回ノ逆襲ヲ掃攘シ敵ヲシテ

全ク旅順要塞内ニ退却セシメタリ。

明治三十八年五月二十二日

第三軍司令官男爵 乃木 希典

小孤山參加將卒

我が中隊死傷者人名左の多きに達す以て本戦争が如何に猛烈なりしかを察するに余りあり。

- ×中、根本喜三郎 ○軍、河野 藤平 ○上、井内 鹿造 ×一、岡島 藤藏
- ×少、小笠原松菟彦 ○上、今川松太郎 ×上、原田久太郎 ×一、大前芳太郎
- ×少、辻 權 作 ×一、井内喜三郎 ×二、服部 清八 ×一、渡邊 春重
- ×特、木村信太郎 ×一、稻井辨二郎 ×上、橋本 新藏 △一、片山 和藏
- 軍、藤村長太郎 ○上、井村喜代藏 ×上、原田松三郎 ○上、上崎重太郎
- 伍、島 文 八 ×一、石川延太郎 ×一、林 丑太郎 ×一、龜井重太郎
- ×伍、吉川 林太 ○上、井 住嘉平 ×二、西岡 淺造 ×一、吉田 喜十
- 軍、遠藤淺五郎 ×上、猪子 彌平 ×一、細川 林八 △上、吉田次太郎
- ×伍、三河 重平 ×上、市山 只一 ○一、岡本綜三郎 ○上、竹重 宇平



歩兵第四十三聯隊孤山攻撃前進の光景



全聯隊佔領後對陣の光景

- 山 谷 山
- 上、竹内 和平 ×一、上柿重太郎 ○上、藤江②淳夫 ○上、北岡幾太郎
 - ×一、竹房貞太郎 ○上、内田 芳八 ○上、藤代 利吉 ×一、三好 權七
 - ×二、高木 萬吉 ×一、山口 秀一 ○上、兒島泰三郎 ×一、美馬 貞吉
 - ×一、高木 芳吉 ×一、柳本清次郎 ×一、江戸森三郎 ×一、水田 新吉
 - 上、高橋 石郎 ×上、松島 辰次 ×一、阿部徳太郎 ×上、宮本 倉松
 - ×上、竹内 彌平 ×上、豆成 友市 ×上、赤澤兵二郎 ×二、三崎 壽吉
 - ×一、立花 彌平 ○上、射場 貞吉 ○上、青山 惣吉 ○上、清水 彦平
 - 上、坪根 清藏 ×一、松浦 和 平 ×一、阿部伊八郎 △上、島野 鐵五郎
 - ×一、中田喜代七 ×上、牧原虎太郎 ×二、阿部芳二郎 ×上、島村猪源太
 - ×一、中山 半平 ×上、松田 磯平 ×一、西條延太郎 ○上、島田 彌平
 - ×一、中 林 藏 ○上、松本 治平 ×一、佐坂 利吉 ○上、杉本 平藏
 - 上、村瀬繁太郎 ×二、藤井重太郎 ×一、佐々木辰藏 ×一、住友 文平
 - ×二、村田浅太郎 ○上、福田重太郎 ×一、佐藤梅五郎
 - ×一、内田豊太郎 ×一、福島甚太郎 ×一、坂本 喜平

予が従軍中に感知したる戦友相互信義を重んじたる實例は一々枚舉に遑あらず、蓋し戦地に於ける日本人の特色なるべし、依て左に飛泉氏の作戦友の歌を掲げて一般の状態を示さん。

三 戦 友 (コ、は御國) 附予の吊辭

○ 戦 友

こゝは御國を何百里、	離れて遠き滿洲の
赤い夕日に照されて、	友は野末の石の下
思へば悲し昨日まで、	真先駆けて勇進し
敵を散々膺らしたる、	勇士はこゝに眠れるか
あゝ！戦の最中に、	隣に居つた我が友の
遽かにバタと倒れしを、	我は思はず馳せ寄つて
軍律厳しき中なれど、	これが見捨て、置かりやうか
確ッかりせよと抱き起し、	假纏帯も彈丸の中
折柄起る突貫に、	友はよろ／＼顔を上げ

御國の爲めだ構はずに、遅れて呉れなと眼に涙
 後に心は残れども、残しチャならぬこの身體
 それチャ行くよと別れたが、永の別れとなつたのか
 戦濟んで日が暮れて、探しに戻る心では
 ドーカ生きて居て呉れよ、物など言へと願ふたに
 空しく冷へて魂は、故郷へ歸つてポケットに
 時計ばかりがコチ／＼と、動いて居るも情けなや
 思へば去年船出して、御國が見へずなつた時
 玄海灘て手を握り、名を名乗ツたが始めにて
 それから後は一本の、煙草も二人分けてのみ
 著いた手紙も見せ合ふて、身の上話し繰り返し
 肩を抱ひては口僻せに、ドーセ命はないものよ
 死んだら骨を頼むぞと、言ひ交はしたる二人仲
 思ひも寄らず我一人、不思議に命長らへて

赤ひ夕日の滿洲に、友の塚穴堀ろうとは
 限なく晴れた月今宵、心しみ／＼筆取りて
 友の最後を細々と、親御に送る此手紙
 筆の運びは拙いが、行燈の影で親達の
 讀まるゝ心思ひ遣り、思はず落す一筆
 予はこれを歌ふてその末段に至り思はず一筆の熱涙を禁ずる能ず、されど心弱さに非ず只
 滿腔の赤心に依るのみ。
 予が軍人として理屈を言へば、作者軍事志想の足らざる所敢て無きに非ず、されどは少
 しく忍ぶを要す。唯我友なるものゝ情愛が如何に深くして、信義を重んずるの如何に大な
 るやを味はゞ以て足るべし。

附吊 辭 (予の阿久津少尉に送りたるもの)

明治三十八年四月十五日陸軍歩兵少尉辻權作一書ヲ奉リ

謹テ

故陸軍歩兵少尉正八位勳六等 功五級阿久津潛君ノ英靈ニ告グ

君陸軍中央幼年學校ヲ卒ヘテ歩兵第四十三聯隊ニ來ル干時明治三十五年六月

回顧スレバ君ト相識リテヨリ未ダ三星霜ニ充タス而モ意氣相投シ肝膽相照シ所謂管飽食時ノ交ヲ致シタルモノ蓋シ君能ク我ヲ知り我能ク君ヲ知り以テ緩急相助ケ難苦ヲ共ニシテ厭ハザリシニ因ル

客歲日露戰端ヲ開キ共ニ征途ニ上ラントスルノ夕「辻一所ニ死ナン」ト握手シタル者嗚呼君ナリシ

五月廿九日清國上陸後急行軍ヲ以テ同三十日金州南山々麓ニ着シタルノ曉「噓漸ク尋ネ出セリ」トテ直ニ其宿舍ニ誘ヒ俄ヘタル腹ヲ醫セシメタルハ嗚呼君ナリシ君ガ情ハ湯氣タツ飯ノ夫レヨリモ尙熱カリキ

七月二十七日初陣ノ願叶ヒテ再戰奮闘遂ニ旅順要塞第二防禦線ノ據點タル大白山高地ヲ攻陥シ最先占領ノ月桂冠ヲ得タルモノ實ニ君ナリシ

續ヒテ殘敵ヲ驅馳シ他隊ト連絡ヲ取ルベキ新任ヲ有スル余ヲ願ミテ「行ケ矣辻、危ニ瀕

セバ直ニ應援セム」ト側射彈雨ノ間ニ平然トシテ望遠鏡ヲ放タス月光ニ照シテ余ガ進撃ヲ注視シタルモノ嗚呼實ニ君ナリシ

八月八日小孤山突撃ノ際余ガ決死ノ士ヲ率キテ前進セントスルトキ君曰ヘリ「余モ其光榮ヲ擔ヒタシ」ト余曰ク「君言フヲ止メヨ公平ナル淺見大尉ハ蓋シ武勳ノ平均ヲ慮リタルナリ早カレ遲カレ共ニ吾人ノ血ト骨ハ滿洲ノ野ニ大陸建國ノ基礎ヲタツヘキモノナラズヤ」ト其當時余ハ君ニ先立ツ可ク決心シタルナリ而モ余ハ名ノミヲ有シテ脆クモ敵彈ヲ蒙リス

八月九日要塞ノ巨砲猛彈ヲ飛バシ小孤山爲ニ形ヲ變セントス敵モサルモノ機ヲ逸セザルナリ大舉逆襲シ來ル今ヤ我隊將士相踵テ斃レ傷クモノ數フルニ遑ナシ悲雲將ニ日光ヲ蔽ハントス噓天ナル哉干時一陣ノ清風ハ君ガ軍刀ノ邊ヨリ奮起シ四面再タビ明ラケシ嗚呼小孤山確保ノ香ハシキ美果ヲ結ビタルモノハ誰ゾ運ナル哉一彈來リテ君ガ腹部ヲ貫通ス萬歲聲裡遂ニ笑ヲ含ンデ斃ル壯ナル哉君ガ忠死ヤ

宜ナリ 大元帥陛下君カ功ヲ頌シ勳六等單光旭日章並ニ五級金鷄勳章ヲ賜ハル武士ノ光榮何物カ之ニ如カン君カ忠死ノ功空シカラズ難攻不落ヲ以テ誇リタル旅順城頭今ヤ旭旗

ノ鬪々トシテ中天ニ揚ゲラル、ヲ見ル盛ナリ矣嗚呼禁ジ難キ感謝ノ念、拜センカ君ガ英
 姿、而モ今ヤ幽明所ヲ異ニス悲哉況ンヤ君ガ令兄安君亦二〇三高地ニ斃レテ家系遂ニ絶
 ヘタルニ於テヲヤ然レハ是私情ナリ私悲ハ公義ノ光榮大ナルニ如カズ何ゾヤ
 君ガ英靈今ヤ櫻花爛熳タル九段坂上崇嚴ナル靖國神社ノ堂裡ニ安座セラル、ニアラズヤ
 回顧セヨ君毎歲春秋ノ大祭ニハ 陛下親詣シ賜フ否ラザルハ勅使ヲ被差遣國士ノ英靈
 ヲ慰メ賜フ光榮豈ニ大ナラズヤ

又回想セヨ君、吾人士官學校卒業前振天府拜觀當時ノ光景ヲ 仰ギ見ル位置ニ於テ極メ
 テ町重ニ掲置セラル、モノハ殉國將士ノ眞影ニアラザリシカ其當時誰レガ此光榮アル眞
 影ノ主トナルヲ希ハザリシモノアリシゾ君ヨ君ハ今ヤ其光榮ヲ享ク可キ境ニ達セリ光榮
 豈ニ大ナラズヤ

又其當時侍從官長ノ物語ニ曰ク

「兩陛下ガ振天府ニ御座遊バサレマシタ折此ノ寫眞ノ主ノ物語ヲ致シマシタ時ニ 天皇
 陛下ニハ能ク父子共ニ盡シテ呉レタト御嘉尚アラレマシタ又 皇后陛下ニオカセラレマ
 シラハ何ト御言葉モアリマセンデシタガ御下俯遊ウズカハス御眼ニハ玉露ノ宿ルヲ拜シマシタ」

ト天恩ノ無窮宏大ナルニ誰レカ感涙セザルモノヤアル、君今ヤ令兄ト共ニ旅順ノ鎮守タ
 リ家門ノ光榮豈ニ大ナラズヤ

噫赫々タル君ガ武勳ハ長ヘニ青史ヲ照シテ朽フス隆々タル君ガ光榮ハ四海武士ノ仰慕ス
 ル所且ツ夫レ君ガ忠死ハ時ト所ヲ得テ其ノ職ニ斃レタルモノ君以テ瞑スベキナリ余ヤ不
 幸ニシテ后送ノ身トナリ内地勤務ニ服スルコト茲ニ八個月慚愧ノ至ニ堪ヘズ然レモ幸ナ
 ル哉天ハ余ニ一條ノ光明ヲ與ヘタリ希クハ有終ノ美ヲ收メテ再ビ君カ英靈ニ見ユム
 敬テ祭詞ヲ呈シ英靈ヲ弔フ

明治三十八年四月十五日

陸軍歩兵少尉 辻 權 作

敬白

* * * * *

阿久津少尉は、實に栃木縣那須郡烏山阿久津平四郎氏の次男にして、幼年學校出身後予と同
 聯隊に育ち屢々矢石の間に相提携したるもの、轉た今昔の感に堪へず、况んや其長兄安君

は、後備隊特務曹長として第一師團後備歩兵第十五聯隊附となり等しく旅順攻圍軍に屬し、二〇三高地にて戰死せらる、而して阿久津家遂に嗣子無し、恰も乃木大將の分家なるの情況にあるに於てをや噫

第五 軍人は質素を旨とすへし

一 一日五厘宛を兩親に捧げて歸休となりし一等卒中山勝太郎の勤儉

陸軍歩兵一等卒中山勝太郎は、歩兵第四十三聯隊第八中隊所屬、明治四十年歸休となりしものにして、其當時の中隊長三谷大尉(興吉)の從卒なりき。

三谷大尉は極力良家庭の中隊を作為するに精力を集注せられたるのみならず、又滿期後の良國民を養成することに努められたり、之がため先づ戰役後浮華優柔の風習に感染せしめざるため勤儉力行を獎勵せしむる。

茲に於て中隊附たりし予は、予が父上の教訓たる非獨味主義凡そ嗜好物は先づ之を神佛に供へて父母に呈し後ち人と共に味へ獨味すべからず毒味すへしを講話して軍人の質素に及べり、即其要旨に曰く

「諸子が戴く所の給料日に四錢也五錢也之と全部貯金せよとは強ひず、然れども諸子が一日の小使錢は日に其所得金を超過せざるを要す、而して其所得金全部を費消飲食費 其他雜費せんとするときは非獨味主義を實行せよ、故郷には父母、諸子のために蔭膳をして其健康を祈りつゝある也、去れば三恩一に諸子を生みたる父母、二に諸子を教育しつゝある上官、三に父母上官及諸子を安全に生活せしめ賜ふ天皇陛下の御恩を忘れざるため忠孝服従の美德を發揮せよ、然れども今こゝに諸子の父母を在さねば費消高の一部を貯へ置け、日に五厘宛兩親に捧げなば月拾五錢一ヶ年壹圓八十錢」

問「二年目には幾何」

答「參圓六拾錢」

問「三年目には」

答「五圓四十錢」

よろしる、三ヶ年後滿期の際には五圓四十錢となる、金錢は賤しくもなり、又貴くもなるものなり。予は決して拜金宗守錢奴となれど糊糊むるものに非ず、殊に軍人には金錢は要なきものなり、予は世の中に嫌嫌ひなもの唯一つ、そは實に金錢也。否金錢が予を嫌ふ

を如何せん。

然るに右の如く親を忘れず貯蓄したる金銀は決して賤しきものに非ず、諸子即ち満期の後には各其家業に勵み強兵と富國の兩任務を有するものには、最も必要にして又高貴なるものなり。其土産の由來を兩親の耳に入れなは、其喜びや如何ならん、思ふたに愉快ならずや、諸子好きな酒なり飲み、芋なり食へ、要は非獨味主義を實行して勤儉質素の美德を養成するに在り矣。

と、彼中山勝太郎は一日五厘宛を兩親に捧げ二年目歸休の際三圓有餘の土産金を懐にして歸國せり。

之れ貯蓄したる金額や素より少なりと雖も、其精神の堅確善美、其勤儉力行實に賞讃すべきに非ずや。

二 食はず眠らずして壯快を感ずるは質素の極

糧食の缺乏、睡眠の不足連日連夜に亘り、而も天候炎熱或は沍寒の度増加するに遭遇する毎に勇氣百倍して、一種言ふ可らざる壯快を感ずるもの是れ眞に質素の極となす。

本美質は我大日本帝國軍人の先天的性質にして戰士に必要缺く可らざる大要素たり、平時特に 陛下が大御心を質素に注かせ賜ふの厚き一に之に由來するならむ。

予は大小數度の戦闘に於て質素の一端を味ひたるに過ぎざるも、日露戦役に於ては勿論特に又旅順黑溝臺及奉天戦に於て我軍人が絶対に質素の極致を發揮したるを聞いて大に人意を強ふするものなり。

敵と雖も、無ければ食ふ能はず、又已むを得ざれば眠らざる可し、而して彼等は戦ふを餘儀なくせられつゝあり、是れ所謂消極的なり。之を以て君國のために死するよりも、俄渴勞苦を厭ふものゝ如く投降者續出するなり、此限界、差異が戦闘の最後を争ふ決勝線とす。

予は左に兎羊蛇なる匿名氏の「佐賀土風」の一節を讀んで感最も深し曰く

名君閑叟公は、天保の初め年十八を以て江戸を去りて佐賀に入られんとした、出發の日は既に定められながらも、今日も明日もと出發を延期した、延期の原因は實に借財拂ふに途なく調金求むるの術なき、内帑空乏、信用缺乏の憐れむ可き事情であつた、三十六萬石の藩主として此有様は何事ぞと、十八の軟かな頭に貧窮の悲しむ事か痛くなる程に染み込んだものだ、(予は解す閑叟公は夫位の借財に頭を痛むる如き小膽者には非ず) 兎や角して公は

遂に封土へ歸つた、何は兎もあれ祖先の墓參に寺を見舞つたのである、寺の門前に古き家にもあらぬ一軒の倒れたまゝ、起されずにある。公は侍臣に、あの家は何時倒れて、ナゼ起さないかと聽かしめると、去年の大風で倒れて起す金がないから、詮方なく其まゝに任つてゐると答へた。公は心に思ふ様、藩主といひ、藩民といひ斯くも窮乏しては一朝大事の場合邦家に盡さんにも協ひ難しと大に感激して、これより重臣と協議し極端なる勤儉主義を勵行せられたのである。恐る可し勤儉政策の勵行は先づ公自らより初めたるので三十六萬石の大名の身を以て衣服は木綿の洗濯したるものを用ひ飲食は朝は汁香物二品限り晝は平と香物夜食は味噌鹽にて宜しと内達したものだ藩主既に然り勤儉は恐る可き權威を以て勵行嚴守せられたのである。

と斯の如くして佐賀藩は明治維新の際薩長士と共に治動し謳歌われしなり、以て知るべし。粗衣粗食して身心を鍛鍊する是れ積極的質素ニチャールズ、ワグナー氏の所謂簡易生活又以て武士道の神髓なることを。

大山元帥の一言「戦は梅干てなくちや勝てんよ」と誠に味ふべきことにあらずや。

又建部文學博士の戊申詔書行義の一節に曰く

英社戦争に於ける英兵一人の要する給養の費用に比し、日露戦争後に於ける日本兵士一人の要する費用の驚くべきほど僅少なるは日本が國富の割合に戦争持續の力強かりし原因の一であります近時列國陸兵一人一ヶ年の費用は左の通りであります。

英吉利	七七二・五〇〇
露西亞	五六四・〇〇〇
獨逸	五一四・五〇〇
佛蘭西	四四五・五〇〇
奧太利	三九〇・〇〇〇
以太利	三五八・五〇〇
日本	二一七・五〇〇

右の中、日本の高は假に經常の陸軍軍事費の總額を兵士の數にて割りたる高を以て充てたのでありますから、列國のに比へて餘程高く見積つてあるのであります。これは日本社會の生活の程度の低きに由るとはいへ、畢竟日本兵士が困苦缺乏に堪ふる力の強さが爲てあります。(著者重ねて曰く困苦缺乏に堪へ克つのみならず寧ろ常に百氣増加し一種

壯快を感ずるか日本兵士の特長)而して困苦缺乏に堪ふるは即ち儉の徳を極端に勵行するの結果たるに外なりませぬ。

儉の徳によりて英吉利露西亞獨逸等の兵一人を養ふの費用を以て、日本は三人を養ふことが出来る次第であります。

併ながら斯く養兵の上に利益ありといふ事は、決して國と國とが相敵視する上に都合が宜いといふ譯ではありませぬ。つまりかく實力上に優勢を維持する所の國民は、友邦として親密なる平和の關係を結ぶにも好都合なるもので、その證據は近く日英同盟の成立にも見ゆる次第であります。

要するに友として親まるゝが爲めにも、敵として憚らるゝが爲めにも、我に具ふべき資格は一つであります。

之を要するに今後の歩兵戦闘は、鞏強の性質を有する程度、愈々増大すべきを以て、益々積極的質素を要すること甚大なりとす。

宜なる哉。成申詔書の御發布になりし事や。誠に聖旨の鴻大無邊なること恐懼恐惶の至りに堪へず。左に謹んで記載拜誦せむ。

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益々國交ヲ修メ友義ヲ悖シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ランコトヲ期ス願ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戦後日尙淺ク庶政益々更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誠メ自疆息マザルベシ

抑々我が神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我が光輝アル國史ノ成蹟トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我ガ忠良ナル臣民ノ協翼ニ依藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威徳ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克

ク朕ガ旨ヲ體セヨ

御名御璽

明治四十一年十月十三日

御	ますらをか
常	にきたひし
製	なぎつくすらん
劍	もて
む	こふ
配	草

第三編 果實の巻

月毛に爪なし、青に眼無し、栗毛に尾無し、鹿毛瓦毛に佛無し、

これは馬一般の評である。無事に非ず、完全のもの少なしと言ふのである。

櫻に良果なし、然るに予は何故に果實の巻を編んで茲に局を結ばんとするが。これ大に予が深意のなす所にして讀者諸賢の心讀を煩はさんと欲する所以。否予の切望である。

日露戦役に於て實に五萬有餘の生靈は滿洲の山河に櫻と散つたのである、而もこの櫻の果實は現在の生者及子孫ではあるまいか。

予が渡滿第三の航海に(第一回初陣第二回再從第三回駐劄師團交代のため)於て大連の光景が見ゆる時一人の船員が馬に咬まれた、誰の馬かと段々調へて見るとそれは吉田軍醫正(成太郎)の馬にて日露交戦中同軍醫正が分捕馬せしものとの事仲々温順しく、人に咬み付いたり何んかする馬でないと言ふと倉田中佐(新七)は天の一方に曙光を認めたる如き表情にて曰く

「イヤ左機だろう辻君如何思ふか」

「全く御意の通り」

馬てさへ斯くの如し、まして萬物の靈長なりとせば如何、否世間は平和だの人道だのと外交上の禮法が必要だから決して嘶いびいたり咬み付いたりする様なことは滅めつた他に無い。

雨降つて地固まる日清日露の親善は日進月歩で誠に結構な事であるが、併し予は軍人であるから一日も敵と言ふ觀念を去らない、去れど將さに来る可き敵は誰なるか「雨子嬢であるか、或は品さんであるか、或は露さんであるか、誰れ彼れと陰ながら待受けて色男風を吹かすのではないが兎にも角にも軍人が實敵を忘れて演習しては毫も價値がない」と、之れは各國の要務令が唱ふて居る所なれば予の此の言を咎めて、日本人は矢張好戰國民だと黃禍説かうくわくせつを振り廻すのはそれは大なる誤解である。併し予の職務に對する趣味は一生不變で即ち「戰に勝ち斃れて後止む」を以て最大の名譽と心得て居る。之は予が軍人たる以上予の權利義務であると信ずる。

而し斯かる論議立ては何うても宜しとして予等日本人が大連に上陸し、又は南滿線を経由するに當り、湧出する所の感想と諸外國の人々が起す所の感とは、如何なる差異があるならんや、鹿毛瓦毛に佛なし、吉田軍醫正の馬は確か鹿毛なりしと肥臆す。

又予は十月二十五日鐵嶺に於て鑿鏢たる伊藤公爵の英姿に接し、其後三十有六時間、即ち二十六日の午後十一時の零下十五度の寒風骨を刺すの夜「命を捨て、」の悲哀極まる喇叭の餘音を聞くの急變に接した。

嗚呼！明治の元勳世界の偉人たる伊藤公爵が韓人の手に暗殺され給しことを、誰れか悲み憤らざるものあらうぞ。併し予は公爵の最後が如何にも軍人的にして花々しかりしを慕ふ。

ア、！公爵終焉の地が滿洲のハルビンと言ふ事と、分捕馬が咬み付いたと云ふ、二つの教訓は予の腦裡に深く一種の印象を刻し遂に本書の公刊を早むるに至つた。夫れ然り、之を以て予がはしがきに於て「滿鐵延長五百餘哩の沿道及租借地、就中大連旅順の發展、邦人の活動が豫期に達せざるを見聞するに及び轉た舊懷の情に堪へず」と述べたるは大に不満足の意味に於てなりしなり。予は軍人なれば滿韓の經營策に就て具體的の案を述べずと雖も、斯くありたしと思ひし事は韓國に於ける鍋島侯爵の御令息直映様、一は滿洲の百姓後備砲兵大佐森松次郎其人である。前者は華胄の身を以て、後者は頽齡の身を以て共に寒暑酷烈人文未開の地に率先活動しつゝあり、其精勵や決して腰掛主義に非ざる所豈大に敬慕

の至りならずや。然り而して日清日露の戦役に於て先輩が流したる血、洒したる骨を以て組成せる大陸建國の基礎の上には、大農場大商店大規模の工場を建設活動し以て滿韓の利源を開拓するを要す。蓋し日本の如き山紫水明の地は宜しく世界第一の大極樂園となし、酷寒酷暑の二季には本國の別荘に避寒、或は避暑し、以て行幸行啓を仰ぎ天顏に咫尺して、大和魂を鍛錬し勞を應ずることを得ば、唯に我國人民のみかは滿洲土民の幸福實に測り難いのである。

「然れども日本は戦に勝ちて國榮ゆるの後、永久に今日の如き精神を維持し得べきや。之れ問題なり、知識は人をして冷靜に考へしむ。時の經るに従ひ、富の増加するに従ひ、物質的快樂の發展に伴ないて、日本人の勇氣と其大和魂は漸々其銳き處を缺くべきなきか云々」

と、是れ紐育「ヘラルド」戦時通信員ランミス、マカラ一氏が其著胡朔隊從軍記の末節に杞憂したる結論なり。然れども予は決して斯くまでに悲觀、絶望せざるなり。何んとなれば開國三千年金匱無缺の皇室國體を奉戴せる日本國民の血管中には先天的に忠君愛國の熱血充滿し、斷じて消滅することなければなり。然れども方々西洋文明の進歩駁々乎として

底止する處を知らず、爲めに個人主義拜金主義に感染し而して醇朴義俠の美風漸く地を拂ひ去らんとするあり。之を以て予等軍人は一意熱誠以て「軍人精神ヲ淬鍊シ軍紀ヲ嚴正ニスルコトニ」努力せざる可らず。就中精神を以て戦闘する歩兵にありて一層は喫緊事なりとす。

夫れ日露戦役に際し軍人精神の活動は小にしては予の今日あるを得せしめ、大にしては國運の隆盛、戦争の勝敗に關したるものにして、畢竟君の御爲め國のため身を捨て死を致したるに因らざるばならず、要するに戦勝の餘光は予等の責務を明瞭ならしめたり、何となれば勝敗の素因は全く的確に分解せられたればなり、之を以て予等軍人は明治四十一年度大演習の際賜りたる

勅語中の「治ニ居テ亂ヲ忘レヌ」との詔に對し予等は各其責務に向ひ勇往邁進以て皇威を發揚し國家を保護せざる可らず。

尙特に一言予が親愛する在郷軍人に切望して止まざるものは「治ニ居テ亂ヲ忘レヌ」てふ事を、現實にするため家業の餘課として、**士は藝に遊ぶ**ことの趣味を解せられんことを。番に在郷軍人のみならず苟も日本帝國の男子と生れしものは擧つて、**武術就中擊劍、**

銃剣術を錬磨するに至らば全國幾百の青年會規約の所謂「品性を陶冶し勤儉尚武の美風を養成振起するを目的とす。」と云ふ美麗なる金言に優ること萬々、要するに戦争の終結を與ふるものは實に此の誠意一劍に存す。

終りに臨み謹んで陸海軍人に賜りたる詔勅と平和克復の詔勅とを掲げて以て本書を結ばん。

詔勅

朕カ親愛スル帝國陸海軍人ニ告

朕嚮ニ汝等ニ示スニ軍人ノ精神タル訓規五箇條ヲ以テシ明治二十七八年戰役終ルヤ深ク邦家ノ前途ヲ念ヒ更ニ汝等ニ諭示スル所アリ爾來十閱年

朕カ陸海軍ハ世界ノ進運ニ伴ヒ經校大ニ其歩ヲ進メタリ不幸ニシテ客歲露國ト彗ヲ啓キシヨリ汝等協力奮勵各其任務ニ從ヒ籌畫宜キヲ得攻戰機ヲ制シ陸ニ海ニ曠古ノ大捷ヲ奏シ帝國ノ威武ヲ宇内ニ宣揚シ以テ朕望ニ副ヘリ

朕ハ汝等ノ忠誠勇武ニ頼リ出帥ノ目的ヲ達シ上ハ祖宗ニ對シ下ハ億兆ニ臨ミ天職ヲ盡スコトヲ得タルヲ懌ヒ深ク其戰

ニ死シ病ニ斃レ又ハ廢痼ト爲リタル者ヲ悼ム
 朕今露國ト和ヲ講ス惟フニ我軍ノ名譽ハ帝國ノ光榮ト共ニ更ニ汝等
 ノ責務ヲ重カラシメ國運ノ隆昌亦汝等ノ努力ニ待ツコト大ナリ汝等
 其レ能ク朕カ意ヲ體シ留リテ軍隊ニ在ル者ト散シテ郷閭ニ歸ル者ト
 ナ問ハス常ニ朕カ訓諭ヲ服膺シテ朕カ股肱タルノ本分ヲ守リ益々勵
 精以テ報効ヲ期セヨ

御名 御璽

明治三十八年十月十六日

詔 勅

朕東洋ノ治平ヲ維持シ帝國ノ安全ヲ保障スルヲ以テ國交ノ要義ト爲
 シ夙夜懈ラス以テ皇猷ヲ光顯スル所以ヲ念フ不幸客歲露國ト釁端ヲ
 啓クニ至ル亦寔ニ國家自衛ノ必要已ムヲ得サルニ出テタリ開戰以來
 朕カ陸海ノ將士ハ內籌畫防備ニ勤メ外進攻出戰ニ勞シ萬艱ヲ冒シテ
 殊功ヲ奏ス在廷ノ有司帝國議會ト亦善ク其ノ職ヲ盡シテ以テ朕カ事
 ナ獎メ軍國ノ經營内外ノ施設其ノ緩急ヲ愆ラス億兆克ク儉ニ克ク勤
 メ以テ國費ノ負荷ニ任シ以テ費用ノ供給ヲ豐ニシ舉國一致大業ヲ贊
 襄シテ帝國ノ威武ト光榮トヲ四表ニ發揚シタリ是固ヨリ我カ皇祖皇
 宗ノ威靈ニ賴ルト雖抑亦文武臣僚ノ職務ニ忠ニ億兆民庶ノ奉公ニ勇
 ナルノ致ス所ナラスンハアラス交戰二十閱月帝國ノ地歩既ニ固ク帝

國ノ國利既ニ伸フ朕ノ憤ニ平和ノ治ニ汲々タル豈徒ニ武ヲ窮メ生民
ヲシテ永ク鋒鏑ニ困マシムルヲ欲セムヤ

獨ニ亞米利加合衆國大統領ノ人道ヲ尊ヒ平和ヲ重スルニ出テテ日露
兩國政府ニ勸告スルニ講和ノ事ヲ以テスルヤ朕ハ深ク其ノ好意ヲ諒
ホシ大統領ノ忠言ヲ容レ乃チ全權委員ヲ命シテ其ノ事ニ當ラシム爾
來彼我全權ノ間數次會商ヲ累ネ我ノ提議スル所ニシテ始ヨリ交戦ノ
目的タルモノト東洋ノ治平ニ必要ナルモノトハ露國其ノ要求ニ應シ
テ以テ和好ヲ欲スルノ誠ヲ明ニシタリ朕全權委員ノ協定スル所ノ條
件ヲ覽ルニ皆善ク朕カ旨ニ副フ乃チ之ヲ嘉納批准セリ朕ハ茲ニ平和
ト光榮トヲ併セ獲テ上ハ以テ祖宗ノ靈鑒ニ對ヘ下ハ以テ丕積ヲ後昆
ニ貽スナ得ルヲ喜ヒ汝有衆ト其ノ譽ヲ偕ニシ永ク列國ト治平ノ慶ニ
頼ラムコトヲ思フ今ヤ露國亦既ニ舊盟ヲ尋テ帝國ノ友邦タリ則チ善

鄰ノ誼ヲ復シテ更ニ益々敦厚ヲ加フルコトヲ期セサルヘカラス
惟フニ世運ノ進歩ハ頃刻息マズ國家内外ノ庶政ハ一日ノ懈ナカラム
コトヲ要ス偃武ノ下益々兵備ヲ修メ戰勝ノ餘愈々治教ヲ張り然シテ
後始テ能ク國家ノ光榮ヲ無疆ニ保チ國家ノ進運ヲ永遠ニ扶持スヘシ
勝ニ狃レテ自ラ裁抑スルヲ知ラス驕怠ノ念從テ生スルカ若キハ深ク
之ヲ戒メサルヘカラス汝有衆其レ朕カ意ヲ體シ益々其ノ事ヲ勸メ益
々其ノ業ヲ勵ミ以テ國家富強ノ基ヲ固クセムコトヲ期セヨ

御名 御璽

明治三十八年十月十六日

山 さ く ら 終

御 製

國たみの
 カのがきり
 つくすこそ
 我日の本の
 かためなりけれ

正 誤 表

頁数	行目	誤	正	行目	誤	正
八	四に互	互に	互に	八	我砲彈	我砲彈
一〇	二悦し	悦し	悦し	九	半面	半身
一〇	二核し	核し	核し	一〇	火戦	火戦
一〇	二神佛も	神佛も	神佛も	一〇	我第一線	我第一線
一〇	二なとく	なとく	なとく	一〇	行き	行き
一〇	二浴道	浴道	浴道	一〇	光榮	光榮
一〇	二祈るや	祈るや	祈るや	一〇	角面堡	角面堡
一〇	二新るや	新るや	新るや	一〇	志氣	志氣
一〇	二瀧即ち	瀧即ち	瀧即ち	一〇	事	事
一〇	二湖水と異りて	湖水の事とて	湖水の事とて	一〇	嗚呼	嗚呼
一〇	二三ことである	ことのそれ	ことのそれ	一〇	近寛(以下全書)	近寛(以下全書)
一〇	二奇	宿	宿	一〇	送るは	送るは
一〇	二松本	松本	松本	一〇	八月	八月
一〇	二若しくは	若しくは	若しくは	一〇	前除	前除
一〇	二香	香	香	一〇	戦友	戦友
一〇	二拾坐卒	拾坐卒	拾坐卒	一〇	梶子	梶子
一〇	二大隊長	大隊長	大隊長	一〇	後備特務曹長	後備特務曹長
一〇	二六(三三郎)	三三郎	三三郎	一〇	日活	日活
一〇	二二大隊長	中隊長	中隊長	一〇	再征	再征
一〇	二二大隊長	中隊長	中隊長	一〇	分捕せし	分捕せし
一〇	二二大隊長	中隊長	中隊長	一〇	左様	左様
一〇	二二大隊長	中隊長	中隊長	一〇	怒する	怒する

明治四十三年七月廿五日印刷
明治四十三年七月三十日發行

著作權

發行 吉野兵作

印刷 飯田三千太郎

印刷所 同牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社 秀英舍第一工場



發行所 東京日本橋區十軒店 振替口座東京第一〇七番 裳華房

山奥付
正價金六拾錢

邦本
界術學
著大の前空

◀ 告 廣

ルトクド
游川士富
著生先

華 裳 ▶

我國に醫學史なし、之あるは本書を以て嚆矢とす、該書は醫學專攻の大家ドクトル富士川先生が十有餘年の、考覈究鑽を経て、今や完成せられたるもの、敢て絶後と云はざるも確かに空前の大著たり、醫學に關係あるの士は論なく、我が文化史、社會史を研究せんと欲する者は、必ず一本を架上に供へたる可からず。……(細詳目録参照)

日本醫學史

全 壹 冊

* 價 定 *
錢拾五圓四金
* 料 包 小 *
錢四拾貳金

男爵 石黒忠憲先生
醫學博士 三宅秀先生
醫學博士 土肥慶藏先生
醫學博士 森林太郎先生
醫學博士 吳秀三先生
醫學博士 河内全節先生

文 序

菊判洋装箱入美本
全頁數千貳百餘頁
* 挿 入 圖 版 數 *
* 挿 入 圖 畫 百 餘 個 *
本文圖畫百余个挿入

心術修
養之絶
好寶典

勝海舟先生題字

座右之銘

(版五十第)

我國民の高潔剛健なる精神は、武士道に由りて養成せらるる而かも武士道は宗教に非らず哲學に非らず故に其實際に發展流布せる状態を知らんと欲せば國民の思想信仰に就て觀察せざる可からず本書は此の要求に應ぜんが爲近古三百年間に於ける偉人百五十餘名の箴言を収録せり其人を以てすれば名將賢侯碩儒高僧等其言を以てすれば家訓遺誡壁書辭世あり武士道の精髓全く此の一卷に網羅して餘蘊なし。

冊壹金
(280)頁
正價金參拾錢
郵送料金六錢

故福羽美靜先生題字

續座右之銘

(版二第)

既に座右の銘ありて近代に於ける武士道の修養を網羅せる上はこれに對して實業道の修養法を示すものなかる可からず本書即ち此の目的を以て編纂せられ心學者富豪の壁書・家訓・道歌等を収録せること百廿餘家内和合商賈繁昌の法より日常坐臥の掟に至るまで一々平易通俗の言を以て説き示し且つ圖畫を挿みたれば座右の銘と并讀して前文の誇張ならざるを知られよ。

冊壹金
(245)頁
正價金參拾錢
郵送料金六錢

美徳養
成上必
須之業

◀ 告 廣 刊 發 書 叢 術 學 通 普 ▶

Flowers



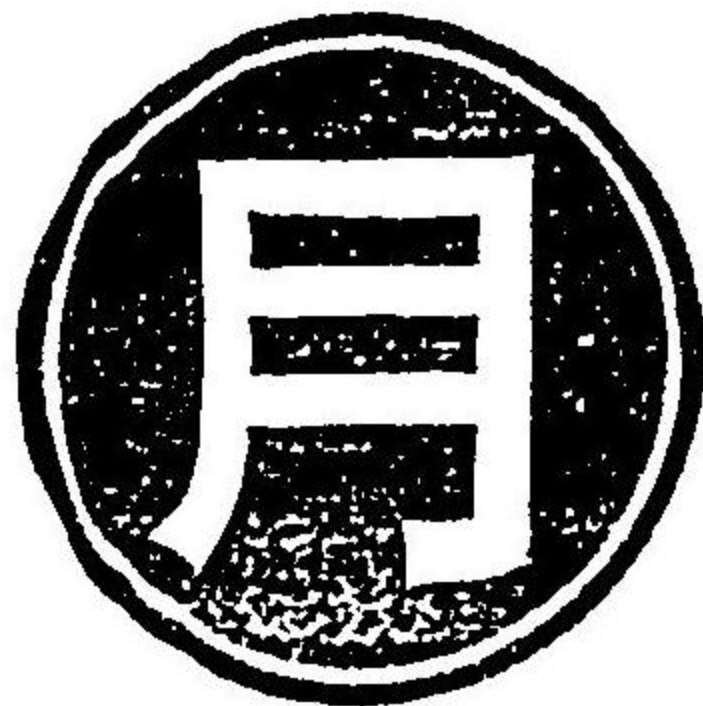
全 壹 冊
菊判洋裝美製本
正價壹圓五拾錢
小包料金拾貳錢

農 農 學 學 士 士 川 森 上 瀧 廣 彌 先 生 著

各大家執筆着色圖書
十數葉外說明木版挿入
著者身を科學界に委ね旁ら文學を嗜み、久しく此缺陷を補ふに意あり、拮据數年漸く本書を成せり、敢て花の美と巧とを説き盡くし、造花の靈機を穿了すると云はざるも、庶くは文學と科學との調和之に由て啓かるゝあらんか、圖書の巧印刷製本の美、書中の文字と相輝映するに至ては、必ずしも茲に繰述せず。

好評 第五版印行中

Moon



全 壹 冊
菊判洋裝美本
正價金壹圓也
小包料金八錢

東 京 帝 國 大 學 理 學 大 師 著 戶 直 藏 先 生 著

口繪(月世界より地球を見たる圖) 其他寫真版十葉挿入
本書は天地開闢の想像説より月が現今に至れるまでの、歴史を通觀し現在吾人が望觀する、月世界に科學的探檢を試み、其新奇なる現象を解説し、之に配合するに文學的趣味を以てし、且近世の研究に基き、地球と月との未來の物語たるものである、一讀して月の清色を擲せよ。

最新刊好評噴々

◀ 告 廣 刊 發 書 叢 術 學 通 普 ▶

Demon



全 壹 冊
菊判洋裝美本
正價金壹圓也
郵送料金八錢

理 學 博 士 坪 富 石 井 士 橋 正 川 臥 郎 游 波 先 生 著

口繪(羅生門の鬼)極彩色木版圖 其他鬼の寫真十數葉挿入
鬼とは如何なるものぞ形あるかと思へば無きが如く、無きかと思へば繪圖彫刻に表はされ、詩歌に歌はれ、今も猶人心の奥に潜みて、婦女子の畏怖する所と爲る、鬼は果して實在するものなるか。本書は此怪物の歴史を研究し、其本態を明にせる最趣味ある珍書にして奇險不可思議なる鬼の面目紙上に活躍す。

最新刊好評噴々

Stars



全 壹 冊
菊判洋裝美本
正價壹圓五拾錢
郵稅拾貳錢

東 京 帝 國 大 學 理 學 大 師 著 戶 直 藏 先 生 著

精功圖畫數十個挿入
昔時カルテアの牧人等の目に映じたる星の世界の現今の科學的眼光で觀たら如何なるものでせうか? 本書は其疑問に充分なる解答を與ふべく著されたるものにて幾千の星の世界に關する學理を通俗にし、文學と觸れた星座を紹介したものである、世の塵に汚れた思想を天界に清めようとする人は是非とも一讀せねばならぬ

近日發刊

(1911)

(1911)

◀ 告 廣 書 圖 刊 發 房 華 裳 ▶

長田 偶得君編纂	醫學界六大家序	新渡戶法農學博士	渡邊 國武先生序	井上文學博士序	三浦千春大人遺著	吳 醫學博士校訂	栗本 秀二郎君校訂	賴杏坪先生編纂	富士川子長君校訂	志賀重昂先生校閱	根來 可敏君著	東京市御編纂
德川三百年史	日本醫學史	日歐交通起源史	五山文學小史	五山文學全集	萩園遺稿	菟庵遺稿	葩庵遺稿	藝藩通志	地理辭典	東京案內		
初版	初版	再版	再版	初版	初版	再版	再版	初版	初版	再版		
全三冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全五冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全四冊	全壹冊	全貳冊		
上卷四十二年中發行	正價金四圓五拾錢	正價金壹圓貳拾錢	正價金四拾五錢	第二輯正價金六圓	正價金壹圓五拾錢	正價金壹圓五拾錢	正價金壹圓五拾錢	正價金貳拾圓也	正價金壹圓貳拾錢	正價金四圓五拾錢		
中卷正價金五圓五拾錢	小包郵稅金拾六錢	小包郵稅金八錢	小包郵稅金八錢	第三輯正價金四圓	小包郵稅金拾貳錢	小包郵稅金拾貳錢	小包郵稅金拾貳錢	小包郵稅金拾貳錢	小包郵稅金八錢	小包郵稅金四圓五拾錢		
下卷正價金四圓五拾錢				小包郵稅金拾貳錢								

(その四)

◀ 告 廣 書 圖 刊 發 房 華 裳 ▶

長崎 藤代儀士	陸軍 步兵中尉	高楠 文學博士	常光 得然君著	故勝海舟先生題字	故華房編輯部編纂	志賀 直道先生序	二宮 尊親先生序	吉田 宇之助君著	富田 高慶翁著	松方 正義侯題字	吉田 宇之助君著
清 正 公	山 櫻	佛 陀 家 庭 訓	座 右 之 銘	續 座 右 之 銘	報 德 分 度 論	報 德 要 論	報 德 論	報 德 論	報 德 論	民 記 改 版	濟 民 記 改 版
再版	新版	初版	壹版	再版	四版	再版	再版	再版	初版	再版	再版
全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊	全壹冊
正價金六拾錢	正價金六拾五錢	正價金四拾錢	正價金六拾錢	正價金六拾錢	正價金六拾錢	正價金四拾錢	正價金四拾錢	正價金四拾錢	正價金四拾錢	正價金四拾錢	正價金四拾錢
送料金八錢	送料金八錢	送料金四錢	送料金六錢	送料金六錢	送料金六錢	送料金四錢	送料金四錢	送料金四錢	送料金四錢	送料金四錢	送料金四錢

(その五)

◀ 告 廣 書 圖 刊 發 房 華 裳 ▶

石橋 龍 子先生著 城君校訂 素人宗教觀 新刊 全壹冊 郵送料金 八拾錢	安藤 紫陽君著 小鳥と金魚 初版 全壹冊 郵送料金 四拾五錢	宮崎 三味君著 薔薇の栽培 初版 全壹冊 小包郵稅金 四拾錢	和田 英作君著 花と莓 再版 全壹冊 郵送料金 四拾錢	飯田 雄太郎君著 昆蟲採集日記 初版 全壹冊 郵送料金 四拾錢	石川 昌人君著 貧兒之機會 初版 全壹冊 小包郵稅金 八拾錢	ハプアト 健吉君譯 文 日本近世政治思想 初版 全壹冊 小包郵稅金 八拾錢	河上 清君著 商人文學 初版 全壹冊 郵送料金 五拾六錢	經濟新聞社編纂 かぶら矢 初版 全壹冊 郵送料金 四拾五錢	島崎 柳塙君書 趣味畫 再版 全壹冊 郵送料金 四拾五錢	岡野 知十君著 趣味畫 再版 全壹冊 郵送料金 四拾五錢
--	---	---	--	--	---	---	---	--	---	---

◀ 告 廣 書 圖 刊 發 房 華 裳 ▶

石橋 龍 子先生著 城君校訂 性相學精義 再版 全壹冊 小包郵稅金 八拾錢	石橋 龍 子先生講說 性相眼正續 初版 全貳冊 郵送料各貳拾錢	大澤 醫學博士校閱 人體內臟圖 初版 全壹軸 小包郵稅金 拾八錢	富士川 遊先生主幹 波君編輯 人性第一卷 合本 全壹冊 小包郵稅金 拾貳錢	富士川 遊先生主幹 波君編輯 人性第二卷 合本 全壹冊 小包郵稅金 拾貳錢	富士川 遊先生主幹 波君編輯 人性第三卷 合本 全壹冊 小包郵稅金 拾貳錢	富士川 遊先生主幹 波君編輯 人性第四卷 合本 全壹冊 小包郵稅金 拾貳錢
---	---	---	---	---	---	---

◎人性内容を御覽の御方は郵券二錢封入申込次第送呈◎

◎詳細圖書目錄あり御望の方は往復端書にて申込次第送呈◎

故松平勝海舟伯序 田邊蓮舟先生序
平直亮伯序 長田偶得君編纂

(上卷近日發行)

(右の八)

徳川三百年史

菊版洋裝美本全三冊
全紙數五千五百冊
正價金拾四圓五拾錢
各肖像圖版挿入

上卷

正價金四圓五拾錢
郵送料未定

中卷

正價金五圓五拾錢
小包料金貳拾八錢

下卷

正價四圓五拾錢
小包料貳拾四錢

本書收載する所の人物八十餘名分ちて五大門部となし第一門には徳川家康以下、時代活動の中
心たりし政治家を收め以て本紀となし第二門には伊達政宗、水戸光圀以下の諸賢侯を收め、第三
門には藤原惺窩、中江藤樹、伊藤仁齋、本居宣長、佐藤信淵以下の思想界に勢力ありし碩學鴻
儒を收め、第四門には文學者美術工藝家其他名僧等を收む、第五門には言行俊邁、當時を傾動し
後人の觀感に資すべき者を收む、卷首に附載するに詳細なる年表を以てす、合して之を見れば
精密なる徳川史なり、分ちて之を讀めば趣味多し偉人の傳記なり、三百年間に於ける名君賢相、
碩學鴻儒、義人烈士の偉胸に興成し、兼ねて政教文化の得失と思想風尚の變遷とを詳かにし、
今日文化の淵源する所を知らんと欲する者は須らく書架の珍と爲すべし。

42
309



42
309

116.12